
塾の先生

高野敢太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

塾の先生

【Nコード】

N6798A

【作者名】

高野敢太

【あらすじ】

塾の講師・岸和田浩は、同僚や生徒達と共に忙しいながらも楽しい？日々を送っている。ある日、浩は一人の女性の名を耳にした。それは、浩にいやが応でも学生時代を思い出させると同時に、今でも浩の心を揺さぶる名だった……。浩の恋愛を中心に、過去と現在、笑いと涙が入り混じった、日記形式の小説です。

第1章 浩（前書き）

ジャンルは「恋愛」とさせていただきます。なかなか「恋愛」が出てきませんが（第2章以降です）ご容赦を。

第1章 浩

3月18日

「しらをきり通せ。絶対何も言うな。いいか、森中」

「……先生、『しらをきり通せ』ってどういう意味？」

「お前、『しらをきる』も知らないのか……。『知らない顔をする』ってことだよ」

「へえー。じゃあ、知らないふりをしておけばいいってことだね」

「顔は見られてないんだろ。そうしろ、安心しろ」

中学2年生の森中が1時間も遅刻して塾にやって来た。いきなり職員室に姿を現したかと思うとまっすぐに俺のところに来た。顔面蒼白で、ブルブルと震えている。ただことではない様子だ。が、ストレートに「何があつたのか」と尋ねるのも風情がない。

「どうした森中、寒いのか？」

「違うよ先生、まずいよ。捕まるよ」

「鬼ごっこでもしてるのか？お前14歳だろ、いい加減に……。」「」

「警察だよ。もう、真面目に聞いてよ」

森中の話はこうだ。学校帰りにキーがついたままになっているオートバイを見つけた。川の土手まで持つて行って乗り回しているところを警官に見つかり、追いかけられたが何とか逃げて来た。オートバイは乗り捨てた。顔は見られていないし持ち物も残していない。が、怖くなって家には帰らずそのまま塾に来た。どうしようか、と

確かに森中のやったことは悪い。窃盗、無免許運転だ。14歳とはいえ、捕まると相当まずいのではなからうか。経歴に傷が付く。もししたたら高校に入るときにかなり不利になるのでは。頭の中で

はずばやく考えがまとまった。で、さっきの「しらをきれ」だ。

授業が終わる頃には森中もずいぶん元気になった。いつもの「とぼけた奴」に戻ってみんなを和ませている。先生の「安心しろ」は生徒には結構効くようだ。

（ 警察が中学生のこのような行為にどう対処するか、本人がどのような、いわゆる「罪」に問われるか、また、そういった中学生の「受験」につきましては、現実と相違があることをお断りしておきます。）

3月19日

警察で思いっきりしぼられた。

「先生、あんた、『しらをきれ』いや『きり通せ』と言ったそうです。困りますねえ。仮にもあんた、『先生』と呼ばれる人が犯罪を教唆するようなことを言っちゃあねえ」

説教はおよそ1時間に及んだ。

そして、始末書か念書かわからないが、差し出された書類に署名等をする事になった。「ごめんなさい。もうしません」という意思表示だ。

「氏名：岸和田浩 フリガナ：キシワダヒロシ 職業：学習塾講師 等々」

森中の馬鹿野郎は、仲間と2人で悪さをしたなんて俺には一言も言わなかったぞ。仲間が捕まりや絶対ばれるさ。やはりとぼけた野郎だ。

まあ、本人は反省してるし、オートバイの持ち主も「穏便に」と言ってくれているらしく、大したことにはならないようだ。とりあ

えず良かった。だが、森中のご両親に会わせる顔がない。

3月20日

「先生、悪かったな」

森中が謝ってきた。

「いや、俺が大人げなかった。ご両親にも謝っておいてくれ」

「お母さんが今日来るって言ってたよ」

森中の母親が来塾。ひと通り挨拶を済ませた後沈黙があった。森中の母親が切り出した。

「ありがとうございます。うちの息子をかばってくださいったんですね。何かほっとしてるんですよ。ものごとの善し悪しはともかく、
……、大したことになりませんでしたし」

一応お礼を言ってもらった。複雑な心境だ。ただ、はつきりしているのは、森中の母親も言っているように、大したことになるなかったから互いに穏やかでいられたということだ。もっと事が大きくなっていれば、

「あなたが悪いのよ！あなたがうちの息子をそそのかしたからこんなことになったのよ！」

とか、

「あんたんとこの息子が仲間と一緒にだっただけで言わないからさ！状況説明もできない馬鹿が悪いんだ！」

とか、ひどいことになってただろう。まあ。次からは気をつけよう。

すまなかった、森中。罪滅ぼしに、意地でも、嫌でも、志望校に入れてやるぜ。

3月21日

塾長に叱られる。森中の件だ。

「とにかく警察沙汰は困るんだ。栄明塾の名を汚すようなことは二度とするなよ！」

だとさ。

言うことはわかるが、少しは森中の心配もしてやれよ。あんたも先生だろうが。

減給処分にされた。

3月22日

久保優子という新中学1年生が入塾。この優子の兄、晃一も塾生だった。数々の伝説を残している。

<伝説1> コンピュータ・ゲームにはまり、ソフトを求めて20kmも離れた街まで自転車で行ったあげく、サンプルゲームに夢中になり、店内で引きつけを起こして倒れ、救急車で病院に運ばれる。

<伝説2> 何を思ったか、家を出るときに玄関先で跳ね、頭のとっぺんをドアクローザーにぶつけて出血、病院に直行。ガーゼを頭頂部につけたまま塾に来る。そのガーゼには血がにじんでいて痛々しいのだが、他の塾生、講師一同大笑い。「怪物ガッパ」の名をもらう。

<伝説3> 学校で、足を机の上にのせ、手を頭の後ろに組んで授業を受けたらしい。「社長」という名をもらう。「俺の授業でもやって見せてくれ」と言うと、「勘弁してくださいよ、会長」とほざく。

<伝説4> 塾の大掃除の翌日、授業に遅れまいと走って来て、磨き上げられた入り口のガラスに気付かずに突進、何とガラスを突き破る。幸い大事には至らなかったが、あちこちから出血。「ブラ

ッディ・コウイチ」の名をほしいままにする。

<伝説5> 休憩時間、塾の二階バルコニーの柵にもたれていて、何の脈絡もなく自分で勝手に柵を乗り越えて落下する。幸い、下に塾長のオープンカーがとめてあり、その幌の上に落ちて打撲のみ。どうしたのかと尋ねると、「柵を背にしていたら、頭が重くて・・・」「わけのわからないことを言う。「フリー・フォール・コウイチ」と呼ばれるようになる。

<伝説6> 受験前の1月、美園北高校受験クラスで、生徒のふがいなさに怒った同僚の北が、「このクラスで美園北に受かるヤツなんて1人もいない」と言うと、久保が模試結果のデータ表を北に見せ「僕は？」と尋ねる。データ表を見た北が、「このクラスで美園北に受かるのは久保だけだ」と発言を訂正する。

<伝説7> その年、美園北を受けた塾生20名。合格者19名、不合格者1名。その不合格者は久保晃一。

久保の親も何を考えて兄が受験に失敗したその同じ塾に妹を入れるのだろうか。引率の母親に一応挨拶をして、晃一のことを詫びると、

「いえいえ、受験は水物ですから。それより、この塾が気に入っちゃってるんですよ、家族みんな。晃一もまたお世話になるって言ってますから、よろしく」

だそうだ。変な家族。

講師の間では、久保優子を「刺客」というコードで呼ぶようにした。

4月9日

高3の宮城が学校の制服で来た。それだけなら何でもないのだが、ルーズソックスをはいているのだ。よせばいいのに。象がルーズソックスをはいているようなものだ。しかし、忠告もできない。たま

たま居合わせた中3の女の子2人も声を失っている。何となく空気が重い。仕方がないから話しかけてやろう。

「宮城、お前、いつもその格好で学校へ行くのか？」

「はい」

屈託のない返事だ。素直さと明るさが宮城の良いところだ。そうさ、誰にだって良いところはあるのさ。勇気をもつてきいてみよう。「宮城、お前、そのルーズソックスは、自分ではいてガラガラにして作ったのか？」

一瞬、空気が凍ったような気がした。

「いいえ、買ったんです」

さすが宮城、こともなく答えてさっさと教室に消えて行った。宮城がいなくなってから、中3の女の子に、

「先生、何てこと言うんですか！」

と責められる。同僚も、

「今のはちよつとまずいんじゃないですか。問題発言ですよ」
なんて言うてくる。

みんなが知りたいことをきいて何が悪いんだ。何より俺が知りたかったんだ。

その後、宮城のクラスでも授業をしたが、宮城はいつも通り、明るく素直にとぼけたことを言っていた。全然問題ないじゃないか。

4月12日

中1の松戸が塾に来るなり「腹が減った」を連発する。と言うよりそれしか言わない。

「おい、松戸よ、ホントに腹が減ってて気の毒だとは思うが、一応女の子なんだし、『腹が減った』しか言わないんじゃない格好悪いぜ。何かほかに言うことがあるだろう」

「何？」

「自分で考えろよ」

「あ、わかった！先生、電話借りるね」
「いいよ」

しかし、何がわかったんだろう。

「もしもし、シーフードピザのMサイズを1枚お願いします。電話番号は……」

止める間もなくピザを注文してしまった。大した奴だ。

4月13日

宮城がわけのわかんないことを言う。

「先生、『赤い渡る』って何ですか？」

「何だその『赤い渡る』ってのは。どこに書いてあるんだ？」

「テキストのここです。ほら」

見ると、The Red Crossとある。絶句した。が、気を取り直して、

「宮城、これは『赤十字』だろ」

やさしく教えてやった。

「でもcrossは渡るじゃないですか」

真顔で言う。こいつは高3になっても品詞が理解できていないのか。いや、品詞云々の問題ではない。もう手遅れだ。

4月15日

宮城がわけのわからないことを言う。

「先生、『わたしはそのとき眠っている犬を使った』ってどういうことですか。テキストのここです、ほら」

見なくてもわかった。a sleeping bagのことだろう。

「それは『寝袋』だろ」

「へえー、dogって『袋』って言う意味もあるんですね」

しやれで言つたのなら大したものだが、宮城に限ってそれはない。
こいつは完全に手遅れだ。

4月17日

宮城が塾に来るなり話しかけてくる。

「先生、今日、学校で生物のテストがあつたんですよ」

こいつが自分からテストの話題をふってくるとは、よほど手ごたえがあつたに違いない。話に乗ってやろう。

「そうか、できたか？」

「全部埋めたんですけど、記述の問題で自信がないところがあるんです」

「どんな問題だ？」

「はい、『減数分裂の前にDNA量が増えるのはなぜか』っていう問題です」

「で、どう書いたんだ？」

「はい、『念のため』って」

「………そうか」

後の言葉が出て来ない。

こいつはただのボケなのか、結構な大物なのかわからなくなってきた。大物だとしても大学受験は失敗するだろうが。

4月19日

高2の原田が煙草臭い。俺は煙草を吸わないから臭いには敏感だ。

「煙草を吸うと単語が覚えられなくなるぞ」

と脅す。

「わかりましたあ」

やけに明るい返事が返ってくる。まあ、どう言おうが吸う奴は吸うのだ。

授業が終わって生徒達が帰って行く。窓から見ていると、自転車にまたがった原田がシャツの胸ポケットから煙草を1本取り出して火をつける。そして、星空を仰いで煙を吐き出し、肩の凝りを癒すように首を左右に曲げた後、ゆっくりとペダルをこぎ出す。許そう。格好をつけて吸っているのではない。煙草がサマになっている。

4月20日

いやはや、保護者からの電話には辟易する。その大半は苦情や泣き言だ。成績のことならこっちにも責任があるし真摯に対応するが、子どもの性格のことをうじうじ言われても、どうしようもないのだ。親がどうにもできない性格を、たかが塾の講師がどうしろって言うのだろうか。

「親が言っても聞かないんですよ。ここは先生の方から何とか」
「こっちも商売だから、」

「わかりました。今日授業の後にでも話してみしよう」
と答えておくとそれなりに感謝される。実際、生徒には話すのが効き目が多いことが多い。当たり前だ。

まあ、親に合わせておくのも給料のうちか。

4月21日

電話が鳴る。出てみると生徒の母親からだった。

「吉本です」

「はい、いつもお世話になります」

「・・・・・・今日休みます」

「ユタカ君ですね。どうなさいましたか？」

「・・・・・・熱」

「いけませんねえ。ゆつくりと休ませてあげてください。お大事に」
「・・・・・・・・ガチャン。」

もつと愛想があってもよさそうなものだが、最近この手の母親が多いのだ。本当なのだ。こんな母親と話して育ってりゃ国語がダメなのは当たり前か。俺の責任じゃない。

たまに父親からの電話があるが、どの父親も母親より丁寧できちんとした話し方なのだ。日頃社会でもまれているからなのだろう。「たかが塾の講師」と腹の中では思っているやも知れぬが、そんなことはおくびにも出さない。立派だ。

4月22日

授業後、中2の中曽が馬鹿丸出しで石頭を自慢している。

「俺はヘッドパッド（頭突き）で負けたことがない」

それを聞いていた筋肉隆々の同僚、北が、中曽の石頭に挑戦した。ヘッドロックで中曽の頭を締めあげたのだ。

「痛い！先生！まいりました。もうしません」

いきなり中曽が謝り出す。何をしないというのだろうか。

「なんだ、もう降参か。でも、もうちょっと我慢しろよ」

なおも締めあげる北。

「ごめんなさい。許してください。あいたたた・・・・・・・・」

「お前、悪いこともしてないのに謝るんじゃないやねえ」

理不尽なことにかけては北は相当なものだ。中曽が開放されたのはそれから3分後だった。

4月23日

北が遅れて来た。昨夜、寝るときに胸に激痛が走り、息をするのも困難になったのだそうだ。それで病院に寄って来たということだ。「右側の肋骨にヒビが入ってたんですよ。ヘッドロックして骨にヒ

ビが入るなんて初めてですよ。何か殴って指を折ることは普通に何回ありましたけど」

北の「普通」がわからない。ともかく、中曽の石頭が勝ったということになる。

「中曽には内緒にしておいてください」

北にもばつが悪いという気持ちはあるようだ。

5月8日

午後4時、誰かが入って来る気配がした。授業までにはまだ間があるが、生徒が忘れ物を取りに来たか、わからないところを教えてもらいに来たかだろう。通路で脅かしてやろう。

「わっ！」と叫んで生徒の前に飛び出す。

「うおーっ！」

知らないおじさんがうなりをあげた。一瞬、何がなんだかわからなくなった。おじさんはもっとわからなくなっているに違いない。すぐに謝る。

「すみませんでした。生徒だと思ったもので」

「お宅は、生徒だと脅かすんですか」

鋭い指摘だが、ひるむわけにはいかない。

「ええ、時と場合によっては」

いかん、何を言っているんだ、俺は。人格を疑われるぞ。

「はあ、そうですね。楽しそうなことで」

「どうも」

この「どうも」ってのは便利な言葉だ。何とか収まりがついた。

見知らぬおじさんは某高校の事務の方で、高校の案内書を持って来てくださったのだ。大変失礼なことをしてしまった。

5月9日

1 人生徒がやめた。授業中にすべきことをしないで遊んでいれば、叱られるのは当たり前だ。俺に叱られたのがよほどこたえたらしい。そんなに激しく叱ってはいないし、何より生徒本人のためなのだが、
「・・・・・・・・」。叱られ慣れていないからな、最近の子どもは。ちよつと叱られたら、全人格を否定されたような気になるんだろうな。仕方ない。残念だが塾はうちだけではない。いっぱいある。自分に合った塾を探して欲しい。それが生徒のためだ。しかし、叱られない塾なんてあるのだろうか。まあ、どこにはあるんだろうな。俺には絶対に務まらないけど。

減給処分だそうだ。知るか！

5月11日

塾が終わるくらいの時間になると、塾の周りに怪しげな連中がたむろするようになった。どう見ても中学生だ。うちの塾に通っている友達を待っているらしい。最初はただいるだけで実害はなかったが、そのうち、煙草は吸うわ、ジュースの空き缶は投げ捨てるわ、ご近所に顔向けできないことを始めた。頭にきて1度追っ払ったが、数日後、何事もなかったかのようにやって来る。また追っ払いに出て行くがもう聞きはしない。聞くどころか、

「おっさん、うるせえんだよ。ぼろ雑巾にしてやろうか」

だって。面白い。雑巾にできるものならしてみろ。雑巾はともかく「おっさん」呼ばわりは許せん。「お兄さん」だろうが。自転車にまたがっているくわえ煙草のリーダーらしき奴のところに行き、腕を取り、自転車から引きずり下ろした。バタバタ暴れるが所詮はただの中学生、俺の相手ではない。そのまま塾の中に連れて入った。「お前よ、迷惑なんだよ。二度とたむろするな」

「うっせい！道路で何しようが俺の勝手だ！ざけんな！」

やけに威勢がいい。

「ほおー。じゃ、この写真の煙草吸ってる中学生は誰かな？警察呼んで確かめるか？」

以前撮った写真を見せ、本当に110番してやった。森中の例もあるし、悪さする奴を見つけたら警察に任せなくては。

「すみません、中学生が煙草吸ってたんで捕まえたところなんですよ。来てください」

いきなりリーダー君は逃げ出そうとする。誰が逃がすか。こんなこともあるつかとドアはロックしてチェーンもかけておいたんだよ。ロックはともかく、チェーンをはずす間にまた捕まえられるんだよ。「あきらめの悪い奴だな。警察が来るまでおとなしくしてろよ」

「おっさん、頭変なんじゃないか！煙草くらいで」

そうだよ、煙草くらい何とも思っちゃいないさ、俺は。ただ「おっさん」呼ばわりが許せないだけだ。

「おっさんじゃないの。お兄さん」

「おっさんはおっさんなんだよ、おっさん」

頭に来た。俺がいかに「お兄さん」かわからせてやらねば。

「てめえの親父は何歳だ。俺は親父よりずいぶん年下だと思っぜ」

「35歳だよ」

若い。が、俺の方がずっと若い。

「お前は何歳だ」

「15だよ」

父親が二十歳のときの子か。俺が二十歳のときは学生で……。
。いや、思い出すのはよそう。こいつの母親は何歳だろう。

「母さんは何歳だ？」

「関係あんのかよ」

「あるんだよ！俺が『お兄さん』かどうかによ！早く言え！」

「33歳」

母親も若い、俺の方がまだ若い。勝った。

「見やがれ！俺は『お兄さん』だよ。はっはっはっはっはっ！」

勝ち誇ったように笑う。リーダー君の顔がゆがんだ。わけがわからないんだろう。当たり前だ。リーダー君には俺がいかに「言葉」というより「お兄さん」にこだわるかなど理解の外だ。関わってはならない人に関わってしまったという焦りが見て取れる。

そうこうするうちに警官が2人来た。そっぴや、煙草の件があったんだ。

「まあ、こいつも反省しているでしょうから許してやってください」心の広いところを見せてやる。警官の1人は露骨にイヤな顔をする。そりやそうだ、呼びつけた本人が「許してやってください」「じゃ、ムツともするわ。もう1人がキョトンとしながらも話を継ぐ。

「はあ。ところでこの子の名前は」

「知りません。年齢は15歳です。父親は35歳で、母親は33歳です」

「・・・・・・はあ。で、どうしましょう。私どもがこう言うのもあれなんです。あなた先生でしょ、指導力もありそうですし、ここはひとつ、先生の方からピシッとお願ひできませんかね。保護者に連絡してもらって、ピシッと。その方が効き目がありそうですし」「いや、うちの生徒ではないもので。お任せしますよ」

しかし、警官もなんだかんだと理由をつけて結局「じゃ、先生からご指導いただくといいことだ」と、俺にリーダー君を押し付けて帰って行った。馬鹿らしくなってきた。

「帰れ。二度と来るな！」

「誰が来るかよ！」

素直に帰って行った。

5月12日

大林が話しかけてきた。

「寺本が、あ、昨日先生が捕まえた奴、あいつがさ、『二度と行かないからな、おっさん』って。で、これやるってさ」

封が切られたマルボロだった。

「俺は煙草は吸わないんだよ。そう言っつけ」

中学生が高い煙草吸いやがって。もっと安いのがあるだろうに。って、そういう問題ではない。しかし、煙草もらっても仕方ないんだが。原田にやろうかな。

その後塾長に呼び出された。

「お前、また警察か！」

「はい、今回は自分で呼びました」

「・・・・・・・・」

ザマリロ。

5月14日

高2の山下が悩みがあるという。

「どうした？」

「先生、僕、どの大学に行こうかと思って」

「は？お前に大学が選べると思ってるのか？」

「うん、名古屋大学にしようか、大阪大学にしようかって。どっちがいい？」

こいつは正気か。だが東京大学と言わないところに正気、いや本気が感じられる。何とか気を取り直して尋ねた。

「おい、名古屋や大阪の下に何が付くんだ？」

「え、どういうこと？」

「いや、だから、名古屋　大学とか、大阪××大学とか」

「何も付かないよ」

絶句した。しかし、何か言わなきゃ。

「俺なら大阪大学にするけどな、俺ならな」

「そうか、大阪大学か。じゃ、そうするよ」

「そうか、大阪大学にしたか。でも、今のままじゃ無理だぞ。今までお前が生きてきた年数浪人しても無理かも知れない」

「そうだよね」

ああ安心した。やっぱり、こいつ、しゃれで名大だ阪大だって言
ってたんだな。良かった。が、違ってた。

「先生、僕、塾やめるよ。悪いけど阪大ならこの塾より大手予備校
の方がいいと思う」

救いようがない。救えないなら、せめて気持ちだけでも高みに登
らせてやらなきゃな。

「俺もそう思う。山下ほどのヤツなら　ゼミや、　塾の方が合
うと思うぜ」

「やっぱり！じゃ、そうするよ」

「おお、退塾の手続きはしておいてやる。がんばれよ」

「ありがとうございます」

どういう育ち方をしたんだ。「やれば何でもできる」とか、「叶
わぬ夢はない」とか、ずっと聞かされて育ってきたんだろうな。否
定はしない。だが、そこに「努力」の2文字が抜けてませんか？で
も最近多いぞ、「根拠のない自信」「裏付けのない万能感」にあふ
れた連中が。

5月15日

中1の正岡（男子）が塾のトイレ（和式便器の水洗）で大便中、
間違って誰かにドアを開けられてしまった。不覚にもロックをして
いなかったのだ。それが、ちょうど出ている真っ最中で、見た方も
見られた方もかなりのショックだったようだ。

5月17日

正岡、退塾。

塾長に呼ばれる。

「正岡が退塾するようだが、理由は？」
「ウンコしてるところを見られたからです」
「何だそれ？そんなことで退塾するのか？」
「そうみたいです」
「何で止めないんだ」
「どう言って止めるんですか？『もうウンコしてるところは誰にも見させないから』って止めるんですか？」
「それくらいのことは言えよ」
「はい、次からはそうします」
どこかおかしい。

5月19日

中1の授業中、何かにつけて投げやりな藤田がこう言う。

「勉強なんてしなくていいよ。適当で。いざとなったら西光森高校に行くから」

西光森高校と言えば、履歴書にその名があるだけでどんなに人手不足の企業でもアルバイトにさえ採用してくれない天下無敵の馬鹿でワルの高校、行かないほうが人生のプラスになるという世にも珍しい高校だ。まずい。こいつら中1にして、世間の高校評をしつかり受け取って、それを努力をしなくていい理由に使うことまで知っている。ここはひとこと言うておくべきだろうな。

「お前、本当に西光森に行くのか。いいか。西光森なんてな、誰でも、いや、何でも入れるんだぞ。努力もなーんにもなし。ここだけの話だからよそで言うなよ。西光森の先生が授業で使おうと思ってプリントを教室の机の上に用意しておいたんだ。で、授業が始まってみると用意しておいたプリントがない。おかしいなと思って教室中見渡したら、何と一番後ろの生徒用机で、山羊がプリントを食べたんだ。普通の学校なら大騒ぎさ。でもな、その先生は冷静にこう言ったんだ。」

『おい、大沢、プリントを食べるのはいい加減によしてくれ。授業にならないじゃないか。それからみんなも大沢がプリントを食べ始めたら注意してくれよ。クラスメイトだろ』
って」

何人かの生徒はすぐ笑う。そのうち話が飲み込めて笑い出す生徒達。さあ、ここからが本番だ。冗談をステップに努力について話しておかなければ。しかし、ただ1人きよんとしている生徒がいる。境だ。その境が何を思ったか手を挙げる。

「どうした境、何か言いたいのか？」
にこやかに話しかけてやる。

「ウン。僕ん家、お父さんもお母さんも西光森！」

シーンという音が教室中に響いたような気がした。顔が一瞬でひきつるのが自分でもよくわかる。俺だけではない。さっきまで笑っていた生徒達も一斉にひきつっている。知ってはいけないことを知ってしまったのだ。父親と母親の寝室での秘め事をかいま見てしまった幼い子どもの心境か。さすがの俺も1分ほど言葉が出なかった。「……そ、そうか。も、もしかして、お前も行くつもりなのか、西光森？」

ようやく出た言葉がこれだ。何のフォローにもなっていない。

「はい、できたら」

境は真面目に答える。

わかった。俺は今、この瞬間からお前に優しくしてやる。決めた。他の生徒達も同じ思いに違いない。境家の秘密を知ってしまったせめてもの罪滅ぼしだ。

5月22日

境、転校のため退塾。

5月23日

国語の授業。有田にテキストを読ませる。

「生まれ故郷ののうむらでは……」
教室がざわつく。

「おい、今何て言っただ」

「生まれ故郷」

「いや、その次だよ」

「のうむら」

「……それはね、『のうそん（農村）』って読むの」

「いつからですか？」

「……ずっと」

5月26日

漢詩を教える。まずは、漢詩の形式だ。

「いいか、漢詩では行を一句、二句という風に句と数える。で、一句が五文字ならそれは『五言』だ。一句が七文字なら『七言』だ。次に、四句の詩を『絶句』、八句の詩を『律詩』と言っただ。普通、問題になるのはこの『五言』『七言』と『絶句』『律詩』とを組み合わせた形式なんだ。ちよつと確認しておくか。（縦に5個の一行とし、それを4行書いて生徒に示す）
『

『
おい、有田。こういう漢詩の形式は何だ？」

「うーん……」

「四句の詩だから何だったかな？」

「絶句です」

「それならもうわかるだろう。その『絶句』の上に何か数に関係あ

る言葉がづくだけだ」

「はい、『にじゅうごんぜつく』です」

教室中が笑った。そりゃ笑うぜ、有田よ。笑い事ではないのだが俺も笑ってしまった。

5月27日

隣町の中学校で、男性教師が女子生徒に猥褻なことをしてクビになる事件があった。よくあることだが、その教師というのが2年前までうちの塾がある校区、つまり地元の中学校に勤務していたらしく生徒達も親達も多少ざわついている。

「あの先生、すごく人気があったのに」

「授業が面白かった、って、お兄ちゃんが言ってた」

「お母さんは『魔が差したんだろっ』って」

「マガサシタ？何それ？どういうこと？」

生徒もなかなか盛り上がっている。

「先生って呼ばれるような仕事の人はどこかズレると、いつぺんに危ないことする人が多いんじゃない？」

優等生の斉藤がなかなか鋭いことを言う。

「斉藤、結構いいとこ突いてるじゃないか」

「じゃあ、先生も危ない人なの？」

おお、来た来た。

「ああ、ちよつと危ない」

笑い声や、本当にイヤそうな「えーっ」「やだあ」という声がある。

「まあな、危ないっていうより、不平や不満や欲望があるってことだ」

またうるさくなる。

「だけど、不平や不満や欲望のない人なんているか？まずいないだろ。学校の先生も、塾の先生も、お医者さんも、先生とは呼ばれな

いけど警察官も、みんなどこか危ないところは持つてるのさ」

当たり前のことだ。話を続ける。

「でも、教師は生徒の前に立つと不平や不満や欲望なんて忘れて、何とかわからせてやろうと思うし、生徒にはまっとうな人生を歩んで欲しいと思うんだな。医者患者さんのところに行くと、何としても病気や怪我を治してやろう、助けてあげようと思うし、警察の人だって、一般の人が安心して暮らせるように命がけで頑張ろうって思うものなんだよ」

「でも、結局とんでもないことするじゃん」

「そうだな。ところで斉藤、お前の学校に先生は何人いる？」

「40人くらい」

「で、その中で何かしでかした先生は何人いる？」

「いないよ」

「だろ。この地区に公立中学校が5つある。1つの中学に先生が40人いるとして全部で200人。今回隣の先生が1人悪さをしたけど、残り199人はまあ普通に先生をしてるんだ。普通についていうのは、不平不満、欲望なんてどっかに飛ばしちゃって、君達のために頑張ってるってことだ。それが先生っていうもんだ。たった1人が変だからといって、残り全部も同じじゃないだろ」

「でも普通じゃない先生に当たった生徒達はかわいそうだよ。下手すると人生が狂うんだよ。運が悪かったじゃ済まないと思うけど」

やはり斉藤、すごいことを言う。

「俺もそう思う。だが、それは学校の先生とか医者とかっていう職業の問題ではなくて、例えば岸和田浩とか、斉藤隆之とか、隣の何とかさんっていう個人の問題だと思うんだよ。自分の欲望を抑えられない個人が、たまたま学校の先生やってたんだ。学校の先生っていう職業全部を変な目で見るのはやめた方がいいと思う」

「じゃあ、変な先生に当たった生徒はあきらめるしかないの？何か納得できないよ」

斉藤が食い下がる。

「いや、あきらめなくていい。他の先生やお父さんお母さんに助けを求めろ。それで聞いてくれなきゃ教育委員会がある。なんなら俺でも力になる。弁護士さんだっている。意思表示をすることだ。いか、『あの先生、俺を叱ったから嫌いだ』とか『宿題が多過ぎるから消えろ』とか、お前達のワガママを通せというんじゃないぞ。不正、邪悪には目をつぶるなということだ。少なくともお前達が学んできた『正しさ』から外れてると思ったときには周囲に判断をを仰いでみるってことだ。みんなそれなりに判断してくれるし、力にもなってくれるだろう。俺が言っても説得力がないけどな」

「先生、今日は何かマトモ」

高橋がほめてくれた。

「そうか、ありがとう。とにかく、お前達の周りにいる99%以上の先生、もつと言うと99%以上の大人はみんな一生懸命、立派に生きているんだ。1%に満たない変な奴のために教師や大人全部に絶望するような愚かなことはしないで欲しい。何より、お前達が、これからその大人になるんだからな。俺も、大人になるお前達に、キチンとした何かを示してやれる先輩の大人であるように努力するよ」

斉藤もうなずいている。何とかおさまった。良かった。感動してる生徒もいた。言ってみるもんだ。

今度のような事件があるとこっちもやりづらい。一応先生だし。何より、学校の先生の息子や娘がこの塾に何人通っていると思ってるんだ。相当いるぞ。うかつに話題にもできやしない。斉藤、少しは気を使えよ。第一、お前の家は両親とも学校の先生だろうが。

5月28日

授業後、高3の宮本が話しかけてきた。

「ねえねえ、『デカメロン』って何なの？」

とても受験生とは思えない言葉を吐く。少しからかってやろう。

「あんなエロ本、どうでもいいじゃないか」

「え、『デカメロン』ってエロ本？」

「ああ、世界で最も有名なエロ本じゃん。歴史の教科書にも載ってるエロ本」

「へえー」

「お前も図書館かどっかで読んでみるよ」

「そうする」

ボツカチオさん、ごめんなさい。

5月29日

最近、学校から家に帰る前に塾に来て、学校の宿題をして帰る生徒がいる。中2の藤岡と林だ。宿題を見てやる代わりに、ジュースやアイスクリーム、時には弁当などを買に行ってもらっている。もちろんお金は出すし、おごりもする。まあ、藤岡と林にしてみれば日課みたいなものだ。そのうち、他の講師も便乗するようになった。一度に結構な量の買い物をしてくるようになった。大盛況だ。

だが、今日は腹が立った。林にアイスクリームを頼んだ。だが、量だけ多くて全然おいしくないあるメーカーのだけはよしてくれと念を押したのに、それを買って来たのだ。

「お前、絶対買ってくるなと言ったのをどうして買ってくるんだよ！換えてもらって来い！」

「え、絶対にこれだと言ったじゃないですか」

「これだけは絶対に買うなって言っただんだよ」

「でも……」

「『でも』も『しかし』もあるか！とつとほかのに換えて来いよ」

「でも、レシートもらってないんです」

「何い！役に立たないなあ。おい、これはお前にやるからすぐ食え。1分以内に食ったら許してやる」

「はい」

林は量だけ多くてまずいアイスクリームを食べ始めた。涙を流しながら食べている。泣くほどのことか。余計に腹が立った。

「お前よ、中学生にもなってお遣いがまともにできないようじゃ、受験はとてもしゃないがダメだな。『次の選択肢から間違いを選べ』っていう問題で、正しい選択肢を選んじやうタイプだよ。絶対に」

顔中ドロドロにしてベソをかきながらアイスクリームをなめている中学生。その横で悪態をつく塾の先生。すごい図だ。

「まあまあ、たかがアイスクリームで」

同僚講師の進藤が林の肩を持つが、何故かいきなり北が、

「たかがアイスクリーム1つまともに買えない奴には何も教えることはない。帰れよ。それとも何か、わざと買って来て、岸和田先生に嫌がらせしたんだろう。そうだよな？」

と言ったもんだから、林は号泣してしまった。

まあ、アイスクリーム1つでこうだからなあ。少しは大人になるうかな。

5月30日

林は昨日あれだけ泣かされたのに、懲りもせずお遣いをしに来た。「昨日はすみませんでした。もう大丈夫ですからお遣いに行かせてください」

こいつ、頭は大丈夫か？と思ったが、結局チョコレートを頼んでしまった。俺はチョコレートが好きなのだ。

「おいしいチョコレートを頼むぜ」

「はい、任せてください」

10分後、俺はチョコレートを前に不機嫌な顔をしていた。よりによって、とてつもなくまずいチョコレートを買って来たのだ。何故か、北が怒ったように宣言していた。

「今日からお前を『役立たずのリン』と呼ぶ」

6月1日

塾長と進藤が言い争いをしている。進藤が生徒の退塾をあつさり認めたとか、その生徒がライバル塾に移ったとか。塾長は「もつと粘って何とか引き留めるべきだった」と言いたいらしい。別に進藤の肩を持つわけではないが、いいじゃないか。生徒にとって塾はうちだけではない。うちが合わないと思えば、よそへ行くのが普通の行動だ。生徒のためでもある。北が口をはさんだ。

「塾長、もういいじゃないですか。下手に引き留めたって、それ以後は遠慮しちゃってこちらが譲歩することになるんですから。授業がやりにくくなりますよ」

「お前には何も言つてない！経営に口出しするんじゃない！」

と怒られたが、北も黙つてはいない。

「わかりました。二度と口出ししませんから。さあ、続けてください。どうぞ、遠慮なく」

さすがにばつが悪くなったのか、塾長は別の部屋に進藤を連れて行った。最初から人目につかないところでやれよ。現場の苦労も知らずに、「経営」「生徒数」「お金」っていうだけの思考は何かしろよ。きれいな事で済ます気はないけど、その生徒の教育つてことを考えたから、進藤だって退塾を認めたんだろ。ああ、気分が悪い。

6月2日

同僚の大久保が俺の隣で生徒の質問に答えている。

「いいかい、この県には『筑波研究学園都市』があるんだから簡単だろ。『いばらぎ』県だよ。だから答えはFだな」

敢えて何も言わなかったが、都道府県名もまともに言えない奴が塾で教えてるんだから、簡単な問題もわからない生徒がいて不思議

じゃないよな。まあ、俺も「生徒より5分早く理解すりゃ教えられる」なんて言ってるんだから大差ないか。でも「いばらぎ」県はないよなあ。怒るぜ「いばらぎ」県民が。

そういうや最近、「雰囲気」を「ふいんき」って言う生徒達が結構いるよな。もしかして大久保の影響か。

6月3日

中1の英語の授業で、曜日と月を教える。これくらいは教えるまでもなく知っている子が多い。試しに安田を指名して曜日を読ませる。

「……ウエンスデイ、サースデイ、……」

「おお、安田、さすがにいい発音だな。でも木曜日は『サーズデイ』だよ、『ズ』って濁るんだ」

安田は不思議そうな顔をしている。困惑気味の生徒も何人かいる。「でも、学校の先生は『サースデイ』って言ったよ」

安田が言い訳をする。

「うそだろ。そんなこと言う英語の先生がいるわけないじゃん。もしいたら『先生辞めてどつかの森で木の実でも採ってる』って言っとけ」

「でも本当なんだよ。『サースデイ』って」

安田が言い張る。何か本當っぽいぞ。

「その先生はお年寄りか？」

「ううん、若いよ。大学出て2年くらいの女の先生。横川って先生」

「そうか、でもそれはウソだ。いいか、安田だけじゃなくて全員注意しろよ。学校の先生が何と言おうと、木曜日は『サーズデイ』だからな。間違えるな」

いいよな、公立学校の先生は。間違いを教えても給料減らないんだから。

6月4日

授業後、宮本が話しかけてくる。

「先生、『デカメロン』読んだよ」

この馬鹿は、ホントに読んだのか。名前と作者さえ覚えておけばいいものを。何て時間を無駄にする受験生なんだ。しかも「デカメロン」で。まあ、読めと言ったのは俺だが。

「面白かったか？」

「うん、ホントにエロいところがあるね」

「だろ。あんなのが名作として教科書に載ってるんだからな。世界史なんてちよろいもんだろ？」

「そうだね」

「……帰ろうとしない。何なんだ、こいつは。」

「どうした？」

「ねえ、ほかにお勧めの本ないの？」

「ダンテの『神曲』でも読めよ」

「それもルネサンス期の作品だね」

ほう、少しは勉強になったのか。知ってて当然だが。しかし、宮本はこう続けた。

「『神曲』って、エロい？」

この馬鹿、俺はエロ本を推薦してるわけじゃないぜ。塾の先生なんだから。と思いつつも、

「ルネサンスとは関係ないけど『O嬢の物語』『新O嬢の物語』なんて名作だぜ」

と応じていた。

「わかった。読んでみる」

宮本は確実に受験生としての道を踏み外しつつある。

6月5日

藤岡が髪を切っていた。やけにおしゃれな髪型になっていた。

「おい、藤岡、かっこいい髪型だな」

「でしよう、『J』で切ったんだよ」

はやりのカットサロンの名を挙げた。

「『J』って高いんじゃないのか？」

「まあね」

だそうだ。男子中学生がたかが髪を切るのに大枚はたく時代か。俺なんか自分で切ってるのになあ。後ろなんか、ほとんど手探りの世界だぜ。

藤岡の髪型は女子生徒の間でも話題になっていた。元々、顔の造りの良い藤岡が、髪型までカッコよくなったもんだから大変だ。似合ってるとか、90点だとか、99点だとか。だが、ピクツとするような会話を聞いてしまった。

「でも『J』って高いんじゃない？藤岡の親ってよくお金出すよね」

「ううん、親からは3000円しかもらってないって」

「え、じゃ、残りは？」

「何か、お遣いして、お釣りを貯めたとか言ってたわよ」

あの野郎は、俺のお釣りをごまかしていたのか。雨の日も風の日も健気に来るはずだ。「J」は当然予約制だ。ということは、計画的にお釣りをごまかしていたということだ。なかなかたくましいが、落とし前はつけてもらおう。

6月6日

塾の前に犬がいる。結構高そうな犬だ。だが、何で看板にくくりつけてあるんだ？中に入って事務の片桐さんに尋ねた。

「え、まだいるんですか。わたしが来たときもいたんですよ。1時間ほど前ですけど。すごく人なつっこい犬で、頭を撫でたらしっぽ振って喜んでましたよ」

授業前に見たらまだいる。

授業中に気になって見に行ったらやつぱりいる。

授業後に見たらそれでもいる。

間違いなく飼いだ。だが、どうしよう。このままにしておくわけにもいかない。警察に届けに行くことにした。犬好きの中3の堀江が、「もし飼い主が現れなければもらいたい」と、俺と一緒に最寄りの交番まで犬を連れて行った。

交番にいた若い警官は、警官にしては珍しく丁寧に話を聞いてくれ、本署へ連絡を入れてくれた。その間、堀江は犬とじゃれて遊んでいる。本当に犬好きなんだ。

警官がハキハキと報告している。

「ハイッ、そうです。大きさは確認しました。ハッ、色は濃い茶色です。性別？ハッ、確認しますので少々お待ちください」

警官が堀江に尋ねる。

「ねえ、雄か雌かわかる？」

「うん、雄だよ」

「お待たせしました。性別は雄です。ハイッ。年齢？犬でありますか？」

警官は困ったように堀江の方を見る。と、犬は、前足を堀江の太ももに乗せ、堀江のむこうずねの辺りを後足ではさむように立ち、腰を振っている。それを見た警官、こう報告した。

「ハッ、年齢はわかりませんが成犬の模様」

6月7日

学校で英語の授業中、安田が「木曜日の発音」について、「塾の先生がウソだつて言った」さらに「『森で木の実でも採ってる』だつて」と、そのままを横川とかいう先生に言ったらしい。横川先生はその場で辞書をひき、ついでに顔もひきつらせていたそうだ。安田は横川って先生に嫌われる。絶対に嫌われる。俺は知らないよ。

6月8日

中1の授業の最初に、一番前の席に座っていた坊主頭を、何の気なしにとりあえず殴ってみた。鈴木だった。

「何するんだよー。何もしてないじゃないか！」

そついやそつだ。理由がない。

「いや、とりあえずな」

「家でいいつけてやるからな！」

「ああ、言いつけてみる。平気だぜ」

6月10日

鈴木が職員室に入ってくるなり進藤に訴え始めた。

「母ちゃんに『何もしてないのに塾の岸和田に殴られた』って言うたら、母ちゃんにも殴られた」

「えっ、どういふことなの？」

「だから、『あんたが何もしてないのにいきなり殴る先生がいるわけないでしょ！ウソつくんじゃないわよ！』って。進藤先生、何とかしてくれよ。何もしてないのに殴る奴がここにいるんだよ」

そつだよ、いるんだよ。ここに。

「鈴木君、ウソをついちゃいけないなあ。いくら岸和田先生が気が短くても、理由もなしにそんなことはしないよ」

鈴木がグシャツとくずれた。鈴木のところに行つてそつとささやいた。

「だから言つたら、平気だつて」

鈴木はタタタツと職員室から走り去った。

さすがに気がとがめて、授業の初め、みんなの前で鈴木に謝つておいた。謝罪はみんなが見てる前でしておかないと。

6月12日

書店で鈴木に会った。声をかける間もなく、「何しに来たんだ！」と叫び、鈴木は走って出て行った。面白い奴だ。

6月13日

授業後、宮本が話しかけてくる。

「『O嬢の物語』も『新O嬢の物語』も読んだよ」
だそうだ。自慢にもなりやしない。

「そうか、面白かったか？」

「うん。で？」

「『で』、何だよ？」

「次は？」

「するか！そんなこと。お前塾に何しに来てるんだよ。と思いつつも、

「『家畜人ヤプー』なんかどうだ。置いてる図書館はめったにないかも知れないけど」

と応じていた。

「インターネットで検索してみるよ」

ちようどそのとき、北が職員室に入って来た。

「宮本、インターネットで何を検索するんだよ」

「『家畜人ヤプー』って本」

「おお、お前、なかなか『通』だな」

「そうなの？」

「ああ、それを知ってるって、立派なもんだ」

北は宮本のところに行き、握手しながら、

「すごいな、宮本、先生は嬉しいよ」

なんて言ってる。うーん、北のストライクゾーンか。それを知ってる俺って、まずいかも知れない。北はなおも続ける。

「じゃ、宮本、次は『アムステルダムの小さな窓』を読んでみる」
「うん、わかった。『アムステルダムの小さな窓』だね」

目を輝かせて、宮本は帰って行った。
さすが、北だ。俺の知らない本まで知ってる。やっぱりこの領域では俺より上だ。

「北先生、すごいですね。その『アムステルダムの小さな窓』って、僕は知りませんでしたよ」

「ああ、あれ、思いつきで言ってみただけ。あるわけないじゃん、そんな本。もしあったら読んでみたいね。ハッハッハッ」
だそうだ。

「じゃ、『家畜人ヤプー』は知ってるんですか？」

「知らない。話を合わせただけ。ハッハッハッ」
恐るべし、北。かわいそうな宮本。

6月16日

藤岡の「ただ働き日々」が、今日で終わった。

6月17日

授業前、携帯に電話があった。親友、いや、悪友の安達智宏からだった。

「おい、大変だぜ」

「何が」

「驚くなよ」

「驚かないよ」

こいつは半月に1度は大変なことになるのだ。

「今日、昼間、恭子ちゃんを見かけた」

「恭子!？」

「ほら、驚いただろう」

「お前、冗談にもほどがあるぜ」

「冗談じゃないよ。俺もびっくりして、人違いかなと思って後をつけて行っただ」

普通、人違いで後はつけないと思うが、安達のやることだ、許そう。

「それで」

「『M』の日本支社に入って行っただ。受付の女の子と何か話してすぐ上に行っただ。で、その受付の子に『香山恭子さんはいつからここで働いているんですか？』ってかまをかけたら、2週間前に配属になったってさ。だからあれは恭子ちゃんだ。おい、聞いているのか？」

「ああ、聞いている」

胸の中に甘いものと苦いものが同時に広がった。胸で良かった。口ならひどい味で吐いてるぜ。アイスクリームとビールを一度に口の中に入れるようなものだ。

しかし、恭子が日本に……………。恭子。

6月18日

夕方、大きなスポーツバッグを肩に掛けた高校生2人とすれ違っただ。10秒7とか10秒8とか、スパイクがなんとかと言っただから陸上、恐らく100mの選手なのだろう。是非、頑張っただ競技を続けて欲しいものだ。さっきの記録が彼らのものならかなりのレベルにいるのだし。

俺も陸上選手だった。元々は道場に通う空手少年だったが、入学した中学校に空手部はなかったので、足腰を鍛えるために陸上部に入ったのだ。しかし、いつの間にか空手よりも陸上競技の方にのめりこんでいった。客観的な記録で、同学年で何位、地区で何位、全国で何位と、自分のランクがわかるのが励みになったのだ。そして、800mが専門になっていた。400mのトラックを2週、この中

途半端さが性に合っていたのだろう。中3で何とか全国規模の大会に出場できた。高校でも800mを走り、運よく1年でインターハイに出場できたが予選で落ちた。悔しかった。空手の道場通いもやめて800mに専念した。2年のとき、インターハイで決勝まで残ったが表彰台には上がれなかった。しかし、1年後には表彰台、うまくいけば優勝できるという手ごたえはあった。優勝はともかく、ちよつと目立てばどこかの大学に推薦で入学できる。頭鍛えるより、脚を鍛える方が大学への近道とは。中学のときに無理して勉強して公立の進学校にようやく入れたことを思えば、信じられない展開だった。

だが、うまくはいかなかった。高2の秋、腰を痛めて陸上はやめることになった。つまり、頭で大学に入らなければならなくなったのだ。とりあえず自分の学力を知るため、大手予備校主催の模擬試験を受けてみた。その会場で出会ったのが、恭子の姉、香山彰子だった。

第2章　　彰子

高校2年　11月16日

何とかゼミという大手予備校の模擬試験を受けてる。はつきり言
って時間と金の無駄だ。走ってばかりで脳みそまで筋肉になってた
ぜ。問題を読んでも、自分が何をすればいいのかわからないんだか
らお手上げた。寝よう。

誰かがつついてきた。せつかくいい気持ちで寝てるのに邪魔する
んじゃない。

「あの、起きた方がいいんじゃないですか」

俺はちよつとムツとして答えた。

「起きてても何もすることがないんだよ」

クスツと笑った後、有名女子大学の附属高校の制服を着たその子
は続けた。

「でも、答案用紙集めないと、時間になったから……」

「あんだ、S女子大附属だろ。何もしくたつて上の大学に行ける
のに、何でこんなところで試験受けてるの？」

答案を前の席に渡しながら尋ねた。

「自分にどれくらいの実力があるか、ちよつと試してみたくなくて」

「なんだ、俺と同じだ」

その子は声をあげて笑った。なんでそんなにウケルのかわからな
かったが、不思議と腹は立たなかった。

試験の帰り、電車を待つホームでさっきの子を見かけた。
「さっきはどうも。あんだもこの電車なんだ」

俺の顔を見てプツと吹き出しながらも応じてくれた。

「ええ、あなたもなんですね」

電車の中で少し話した。

「実力知りたいって思ったのは本当なんだ。思い知ったけど」

「わたしもこのまま上の女子大にしておいた方がいいみたい」

「その、このまま入れる女子大つてのを、全国の受験生は目指して勉強してるんだぜ。うらやましい限りだよ」

「でも、大学くらい共学に通いたいなつて。中学からずっと女子校だったから」

俺の降りる駅が近づいた。

「じゃ、次で降りるから」

「あ、じゃ、チヨコ持って行って。1人じゃ食べ切れないの」
カバンからチヨコレートを出して俺にくれた。

「ありがとう」

「わたし、香山彰子」

「俺は岸和田浩」

電車が駅に着いた。

「また会えるといいわね」

「うん。さよなら」

俺は試験にもまいったが香山彰子にもまいていた。黒髪を肩まで伸ばした、色が抜けるように白い、茶色っぽい瞳を輝かせて、よく笑う子だった。

チヨコレートは本当においしかった。

高校2年 12月18日

先日受けた模試の結果が届いた。ひどいものだった。国語は偏差値がぎりぎり50あったが、英語は35、数学・理科・社会にいたっては30だぜ。試験中ほとんど眠ってたから当たり前か。こりゃ、まともな大学は無理だな。でもなあ、行きたいよな。

高校2年 12月22日

信じられないことに毎日真面目に勉強してる。今まで走ってた時間が勉強時間変わったようなものだ。学力が少しはついたような気がする。また模擬試験でも受けてみようか。今度は眠らなくてもよさそうだ。前の試験で出会った香山彰子、元気だろうか。また会いたい。

高校2年 12月24日

高2の2学期も終わった。11月からの勉強の甲斐があって全体的に成績はアップしていた。もしかしたら俺はやればできるのかも知れない。冬休みも頑張ろう。死ぬほど勉強して国立大学に入って、親に少しは楽させてやろう。でも今日くらいは息抜きするか。安達に電話をした。

「おい、ちよつと出ようぜ」

「ダメだよ。今からデートだよ。クリスマス・イブだぜ、今日は」「何？クリスマス・イブだ、デートだ、お前、俺の知らないうちになんてことするんだよ。許さねえ」

「何言ってるんだよ。最近つき合いが悪くなったのはお前じゃないか。急に真面目に勉強なんか始めちゃって。らしくないぜ」

「うるさい。俺は国立大学に入って親孝行するんだよ」

「そうか、頑張りな」

冷たい奴だ。「お前も来るか？」くらいは言っても罰は当たらないだろうに。しかし、今日はクリスマス・イブか。気付かなかった。俺も誰かとデートしたいよ。いや、香山彰子とデートしたいよ。

高校2年 1月11日

今日はまた何とかゼミの模試を受けた。前回よりできた。全教科偏差値5はアップしただろう。俺にしたら大健闘だ。でも、香山彰子はいなかった。休憩時間にのぞける限りの教室をのぞいたがいなかった。がっかりした。

高校2年 1月13日

夕方、駅に向かって歩いてしていると、誰かが後ろから声をかけて来た。香山彰子だった。嬉しかった。本当に。

「久しぶりね。元気だった？」

「うん。また懲りもせず模試を受けたんだ。前よりずっと出来はいはずだけど」

声が弾むのが自分でもわかった。

「良かったわね。頑張ったのね。今度は眠らなかつたんだ」

「ちゃんとすることがあつたから」

「2か月で変わるなんてすごいのね。わたしなんてもうあきらめちゃった。上の女子大に行くことにしたわ」

「そりゃ、おめでとう。S女子大って、俺から見たら十分過ぎるほど立派だと思うよ」

「ありがとう。でも、真面目にしてないと推薦も取れないから大変よ」

「大丈夫でしょ。絶対入りなよ。S女子大に知り合いがいるなんて鼻が高いから」

「そんな風に言われると嬉しいな。あんまり気が進まなかったのに、本当にすごいことみたい」

「すごいんだって、間違いなく」

「ありがとう。岸和田君はどこに行きたいの？」

「まだよくわからないけど、教育学とか心理学とか勉強したい」
しまった、つい口から出任せを言ってしまった。

「岸和田君ならきつと狙ったところに入れるわよ。何かすごく集中

力ありそう」

「頑張るよ。香山さんは何が勉強したいの？」

「わたしは英語。通訳になりたいの。あ。そうだ、チョコ食べる？」

「食べる。いつもチョコを持ってるんだね」

「好きなのよ。太るとイヤだけど。じゃ、この先で友達が待ってるから。さよなら」

「さよなら」

香山彰子はまたもチョコレートを残して去って行った。

しかし、思わず出た言葉が「教育か心理」とは……。意
外なところで進路つてのは決まるものなのかも知れない。

高校2年 1月14日

午後の授業が始まった。現国だ。牛尾って先生のワケのわからない説明が苦痛だ。入試問題つてのは初めて目にする文章だろ？その
ときにいかに読めるかが勝負で、今、牛尾の説明聞いたって仕方が
ないじゃないか。聞くのはやめよう。

隣の席の安達に話しかける。

「安達よ、はつきり言った方がいいのかな？」

「何をだよ」

「好きな子に『好きだ』って」

「知るか！そんなこと！」

「それじゃ、お前達はどんな風にしてつき合い始めたんだよ。どっ
ちから告白したんだよ」

「俺達は気付いたら何となく一緒にいたんだよ。ここからつき合い
始めました、なんて区切りはないんだよ」

そんなものなのか。安達が続ける。

「お前はなあ、白黒はつきりつけたがるからなあ。きちんと告白し
た方がいいかもな。当たって砕けて来いよ」

「当たって碎けるのはお前達の勝手だが、少しは遠慮して話せ。今は一応国語の授業中だ」

牛尾が後ろに立っていた。

高校2年 1月16日

俺は決心した。あの子に、香山彰子に告白する。当たって碎けてもいい、はつきりと心の内を伝える。

「安達、決心がついたぞ。告白する」

「そうか、頑張れ。で、いつどこでするんだ。見に行ってやるから教えるよ」

「・・・・・・決めてなかった」

「電話で呼び出せよ」

「電話番号聞いてない」

「なに、アホかお前は！偶然出会うのを期待してんのか！」

「何も考えてなかった。ただ、告白するのを決めただけで・・・・・・」

・
」

安達はあきれかえっていた。自分でもかなりのアホだと気付いた。仕方がないから、今日の午後、S女子大学附属高校の前で彼女が出て来るのを待ってしよう。

5時限目の途中で「気分が悪い」と早退して、S女附属まで来るには来たが、いったいこの高校の授業終了はいつなんだ？4時前だというのに生徒がいる気配がない。今日は休みか？出直そう。

高校2年 1月22日

「S女附属詣で」は今日で何日になるだろう。各曜日の下校時刻が大体わかるまでになった。自分とこの学校は早退ばかりだ。しか

し、香山彰子には会えない。毎日正門のところをウロウロしていると、さすがに変に思う者も出てくるだろう。それでも香山彰子に会いたい。会って何とか思いを伝えなければ。だが、会えない。

今日もダメかと学校に背を向けたときに肩をたたかれた。こんなところで俺の肩をたたくのはあの人しかない！喜んで振り返ると、知らない人々だった。その中のリーダーとおぼしき、見るからに賢そうな顔をした1人が口を開いた。

「あなた、こここのところ毎日いるみたいだけど、いったい何の用なの？ 気味悪がつて子もいるのよ。何もないんだったら迷惑だからもう来ないで」

きつい言葉だ。何かすごい女だなあ……。

「はあ、すみません。でも、知り合いに会いたくて」

「誰よ、知り合いって」

「香山彰子っていうんだけど……」

「香山彰子って、あの香山彰子なの？」

「どの香山彰子かはよくわかりませんがねえ」

「うそでしょう。彼女色んな男の子に声かけられるけど、全部無視してるわよ。あなたみたいな知り合いがいるわけないでしょう」

「て、言われてもなあ」

「彰子につきまといただけなんでしょう。本人に聞けばすぐわかるからね。ほら、彰子が出て来た」

本当だ。久しぶりに彼女の姿を見る。嬉しい。この「すごいのがいなければもつと嬉しいのに」。

「彰子、この変なのあなたの知り合い？ のわけないわよね」

「いいえ、知り合いよ。それに変なのじゃなくて、岸和田君よ」

横の「すごい」は信じられないという顔をしたが、すぐに謝ってきた。

「ごめんなさい。てつきり変質者だと思って」

失礼なことを平気で言う。

俺を囲んでいた「人々」は解散した。が、なんでこの「すごい」

はいなくならないんだ？

「でも、あなた、彰子に何の用なのよ？」

「本人に直接言うよ」

「じゃ、言えば」

「……… あんたがいたら言いたいことも言えないんだよ」

香山彰子が割って入る。

「この人は吉村せつさん。わたしの親友なの。だから、一緒にいても全然気にしないでいいのよ。わたしのことは何でも知ってるんだから」

「そうなのかも知れないけど、俺の親友じゃないし」

「当たり前よ。あなたみたいなのと親友のはずがないでしょ」

頭に来る女だ。

「吉村さん、でしたよね。あんた、クラス委員長でしょ。でなければ生徒会長とか」

「なんでわかるのよ。生徒会長よ」

嫌味で言ったのに、当たってしまった。

「だと思った。絶対そういうタイプだよ」

「イヤな言い方。でも、わたしがいたら言えないことなんですよ。」

彰子に『好きだ』と言いに来たとか？

全てをぶち壊すような一言を平気で口にしたぜ、この「すごいの」、いや、吉村せつは。しかし、ここでひるんだら次の機会がいつ来るかわからない。よし！

「ああ、そうだよ。今から好きだって言うから、関係ないのはどっか言つてよ」

香山彰子を見る。笑っている。可愛い口が開く。

「ええ、じゃ話ができるところに行きましょう」

吉村せつといくら言葉交わした後、香山彰子は俺を近くの公園に案内した。砂場では幼児がトンネルを作って遊んでいる。母親がその傍らにたたずんでいる。落ち着いた公園だった。俺達は並ん

でベンチに座った。

「岸和田君、本当は何の用なの？」

砂場のトンネルが崩れた。

「・・・・・・いや、だから、好きだって言いに来たんだよ」

「冗談でしょ。もうせつはいないんだから本当のこと言ってもいいのよ」

「本当のことなの。何とかあんたに気持ちを伝えようと思って。でも、連絡先も何もわかんなくて。仕方がないから毎日正門のところで待ってたけど会えなくて。今日やっと会えたけど。・・・・・・なんか、あんたの友達に先に言われちゃって。まあ、悪気はなかったんだろうけど。ちょっと拍子抜けしちゃって・・・・・・」

香山彰子はびっくりしたように俺を見ている。砂場ではトンネルの復旧作業が始まっている。

「すぐく間が抜けた告白になっちゃったけど、俺、あんたが好きなんだ」

香山彰子は何も言わず俺から目をそらした。・・・・・・敗北だ。いいよ、何も言わなくても。俺はただ自分の気持ちを伝えただけだから。じゃ、俺帰るわ。もう来ないから。さようなら」

俺はベンチを立て歩き始めた。砂場では母親までもがトンネル工事を始めたようだ。いいよな、幸せそうで。想像の中でそのトンネルを踏みつぶしてみた。・・・・・・むなしいだけだった。

公園を出て夕日に向かって歩いてみると、何かサバサバしてきた。短い片想いだっただがいいや。当たってみて砕けたんだから。太陽がなくなるわけじゃなし。でも、この後だろうな。駅や電車の中で幸せそうな人を見ると落ち込むだろうな。その後で呪ったりするかも知れない、その幸せそうな連中を。多分今夜は眠れないぜ。中学校の卒業前に一瞬つき合ってた麻由美ちゃんに電話でもしてみようか。手紙でも書いてみようか。安達に話しても笑われるだけだろうな。いいよな、あいつは彼女とうまくいってて。そうだ、まずあいつを呪ってやろう。許してくれるはずだ。友達だもんな。

と、後ろから足音が追いかけてきた。

「待って！」

香山彰子だ。

「ちよつと待って」

息を切らして走って来た。

「あのね、岸和田君、もう一度言ってくれる？」

「何を？」

「もう、意地悪しないで。もう一度言って欲しいの」

「からかうなよ」

「違うのよ。わたし、何かびっくりしちゃって。それからブーツとして、気付いたらいないんだもの。必死で追いかけて来たわよ」

「それじゃ・・・」

「わたしだつてキチンと返事したいわよ。岸和田君も返事を聞きたいでしょ」

「わかった」

深呼吸をした後言った。

「香山彰子さん、あなたが好きです。つき合ってもらえませんか」

「はい！」

彼女がはつきりした声でそう言った。その後笑った。俺はどうしていいかわからず、万歳をしながらそこいら辺りを跳ねていた（ようだ）。

駅まで並んで歩いた。嬉しかった。が、胸がドキドキした。地面がフワフワしてた。

「俺、模擬試験で会ったときから気になってた。その後また駅で出会えて本当に嬉しかった」

「わたしも。今まで会ったことがないタイプの人だったし、面白いんだけど、それだけじゃなくて。何かあるのよ」

「いや、特別なものは何も。顔も頭も良くないし、背も高くないし・

「……」

「違うのよ。ずっと持ってた気持ち、って言うか予感なの」

「予感？」

「そう、わたしね、ずっと予感がしてたの。いつか誰かに会えて、その誰かと気持ちが通じるだろうって。その誰かなのよ、あなたはきっと。わたしと同じような人」

そして、香山恭子はひとり言みたいにつぶやいた。

「わたし達、どうして出会ったのかなあ？」

「さあ」

「でも、会えて良かったわ」

冬の夕方だというのに、世の中が輝いて見えた。

高校2年 1月24日

つき合い始めてはつきりしたのだが、彰子はハーフだった。母親がイギリスの方らしい。色が白いのもよくわかる。彰子は冗談っぽく言う。

「父親の血がほとんどみたい。もうちょっと母親の血が濃ければ、国際的な顔立ちになれてたのに」

「このままで十分だよ。いや、このままがいい！」

言いたかったが、言えなかった。

高校2年 1月26日

学校帰り、彰子と待ち合わせた場所に行ったら、あの「すごい生徒会長」が彰子と一緒にいた。吉村せつだ。

「こんにちは。岸和田君。初めまして、じゃないわよね。あなた、よく彰子を落としたわね。この子は今のところ誰ともつき合う気はないって言ってたのに。信じられないわ。あなたがねえ……」

「

相変わらず失礼な女だ。

「そりやどうも。自分でも信じられないくらいだから、あんたが信じられなくても仕方ありませんねえ」

「そうでしょ」

やっぱり失礼だ。

「せつ、わたしが好きなんだからよその人はどうでもいいのよ。ねっ、浩君」

彰子のおどけに吉村せつは声をあげて笑った。

吉村せつは、口は悪いがすごくさっぱりした人だった。

「最初はね、みんなわたしのことオツカナイと思うみたい。思ったことはポンポンしゃべるしね。でも、それだけなのよ。腹に隠すつてことができないのよ。でね……」

面白そうに話す吉村せつ。彰子とはタイプが異なるが、実は結構美人だと思った。

「……それで、彰子が話してくれるわけ、模試会場で出会ったおかしな人のこと。帰りの電車でも一緒になって、そのときはまともな人に見えたんだって。吊革にもつかまらずに、電車が揺れても平然とバランス取って立ってた、って。どこか遠い目をしてるの。『まさか恋?』ってきくと『よくわからないけど、また会いたい』って。それって完全に恋じゃない。『それが恋なのよ』って言うても『違うわよ』って。うそつきでしょ。まさか、その人があなただなんて……」

このよくしゃべる女の子は、将来医者になるのだという。S女子大に医学部はないので、とにかく勉強するしかないそうだ。

「じゃ、岸和田君。わたし塾に行くからこれで。あ、なんか色々言っちゃったけど気を悪くしないでね。わたし、あなたのこと結構気に入ったわよ。彰子をよろしくね。彰子、また明日ね」

吉村せつはしゃべるだけしゃべって去って行った。でも、俺も彼女のことは気に入っていた。彰子が尋ねてきた。

「浩君、せつっていい子でしょ?」

「ああ、きかなくても俺の知りたいこと勝手に話して、笑わせてくれて、何か気持ちがいいよ」

「違うわよ。せつが『勝手に』話すわけがないでしょ」

そうか。優しい、本当に頭の良い人だったんだ。

高校2年 2月2日

「そんなに見ないでよ」

向き合って話をしていると、突然彰子が言った。

「え、何のこと？」

「わたしね、右と左の目の色が違うのよ」

「本当に？全然気が付かなかった。よく見せて」

彰子は初めは渋ったが結局見せてくれた。

「本当だ。右目は茶色で、左目が何色だろう、灰色みたいな色だ」

「そうなのよ。イヤなの」

「視力は？よく見えないとか、そんなことないんでしょ？」

「視力そのものに異常はないんだけど……」

「えっ、色覚に異常があるとか？」

「ううん。でも、イヤなのよ。左右の目の色が違うなんて」

「カッコいいよ！絶対に。俺、その色、左目の方、好きだよ。俺は

元々灰色が好きだけど、もっと好きになった」

「無理しなくていいのに」

そう言いながら、彰子は嬉しそうだった。

高校2年 2月14日

彰子がチョコレートをくれた。

「いつも行くケーキ屋さんのなの。その味、わたし好きなんだけど、どうかな？口に合うといいんだけど」

「絶対おいしい」

「まだ食べてないのに？」

「彰子のくれるチョコはいつもおいしいから。今日に限ってまずいなんてことないよ」

「そうよね、いつもの3倍の値段で量は3分の1なんだから、おいしくなかったら二度と行かないわよ」

「でも、彰子もチョコが好きだよなあ」

「うん、割とうるさい方よ」

「じゃ、一緒に食べよう。実は食べたいんだろう」

「実はね」

彰子は笑った。広場の木の下に座り、包みを開けると、おいしそうな生チョコが出て来た。

「太りたくないからあんまり食べられないの。だから、おいしいチョコレートを少しだけでいいの」

俺は1つ口に入れた。

「こりゃおいしいや。こんなおいしいのは初めてだ」

「大げさね。……あら、ホント、いつものよりずっとおいしいわ」

「これで行きつけの店を替えなくてもよくなったね」

「そうね」

本当においしいチョコレートだった。

高校2年 3月10日

初めて彰子が家族について詳しく話してくれた。

「ウチはね、女ばかり3人なの。母と妹とわたし」

こう彰子は話し始めた。

彰子の父親、香山洋平は優秀なエンジニアだった。誰でも名前を知っている企業に勤めていた。その企業のイギリス進出時、香山洋平は技術面の責任者として妻子を日本に残し単身イギリスに赴いた。そして、後に彰子たちの母親となるマリアと出会い恋に落ちた。熱

烈な恋愛だった。香山洋平は妻子を捨て、香山の「家」を捨て、会社も捨てた。マリアも親・兄弟を捨て、祖国を捨てた。そして、日本で2人の生活が始まり、彰子と妹の恭子が生まれた。幸せな暮らしだったそうだ。

しかし、彰子が中学に上がった年、香山洋平は病気で亡くなった。残されたマリアは、英会話学校の講師や翻訳の仕事をして彰子たちを育てている。「香山家」やイギリスの実家の援助は一切受けずに、そして、彰子、恭子が一人前になるであろう6、7年後をめどに、マリアはイギリスに帰ることにしているのだという。「一度は捨てた祖国だけど、やっぱり祖国の土になりたい」のだそうだ。そして、彰子と恭子には「あなた達の祖国は日本よ」と言い続け、日本語で育ててきたのだという。

彰子と恭子は、そんな父親と母親を持っているのだ。

「母は口にはしないけど、苦労してわたし達を育ててくれたの。イギリスに帰ればそれなりの『お姫様』で苦労せずに済んだはずなのに……」。日本にこだわるのはやっぱり父を愛しているからなんだろうなって。父の国で、父と同じ国籍でわたし達を一人前にしたかったのね」

「すごいお母さんだね」

「ありがとう。わたしもそう思う。それとね、母にそこまで思わせる父もすごい人だったんだなって」

彰子の考え方が少しは理解できたような気がしたし、彰子が優しい、しっかりした女の子だと改めて確認できて嬉しかった。しかし、少し打ちのめされたような気もした。俺は、両親とか、家とか、国籍とか自分のこととして真剣に考えたことはなかった。全て一般論で済ませてきた。しかし、目の前にいる恋人は、生まれたときからそんなものを当たり前のように背負って生きてきたのだ。

高校3年になる前の春休み 4月2日

初めて彰子の家に行った。やっぱり緊張した。

彰子の母親、マリアはチョコレートケーキを焼いてくれた。1歳年下の妹の恭子は、どこからかアルバムを引っ張り出して来て見せてくれた。2人とも美人で優しそうだっただ。

内実は俺にはわからないが、涙が出るくらいに仲の良い、幸せそうな家族だった。

高校3年になる前の春休み 4月5日

彰子と歩いていると急に雨が降ってきた。それもすごい勢いで。当然傘などない。近くの公衆電話ボックスを借りることにした。狭いボックスの中に2人肩を寄せ合って入っていた。

「いきなり降ってきたね」

「うん、びつくりしたわ。すごい雨ね」

「天気予報では雨の『あ』の字も出てこなかったぜ。頭に来るな。あ、ちょっと弱くなってきた。もうすぐ止むよ」

「でも、わたし、もう少し雨に降っていて欲しいな……」
もしかしたら、こういうさりげない言葉にこそ、実は、幸せつてのがぎつしり詰まってるのかも知れない。

高校3年 4月6日

今年も安達と同じクラスだ。

高校3年 4月8日

彰子が路上でアクセサリを売っている外国人さんと(多分)英語で話し始めた。もちろん俺にはちんぷんかんぷんだ。

「この人オランダから来てるんだって」

「へえ」

彰子はまたそのオランダ人と話し始める。

「ねえ、指輪買って」

やっぱりそう来たか。俺にも経済状況というものがあるのだが・
・・・・

「どれがいいの？」

「これ！幸せが永遠に続くように祈ってあるんだって」

「ウソっぽい」

「いいじゃない。気に入ったの」

結局、鳥の羽をかたどった銀の指輪を、持ち合わせのほとんど全てをはたいて買ってしまった。しかも、彰子の左手の薬指にはめてやることになった。ちよつと、いや、かなり照れた。

「ありがとう。大切にする。わたしの幸せの象徴よ。いつまでも、死んだ後も幸せが続くのよ」

「大げさな」

彰子は本当に嬉しそうだった。

これが彰子への初めての贈り物だった。

高校3年 4月9日

決めた。俺は国立の東京G大学に行く。教師になって体育や国語を教えたい。安達に言つと、

「お前が行くつていうのは勝手だが、G大が断ると思うぜ」

だとさ。偉そうに。だが、実際、遊んではかりの安達が、勉強ばかり？の俺より出来がいいんだからイヤになるよな。俺も遊んでみようか。

高校3年 4月10日

安達が、あの安達が、予備校の現役生コースに通うという。

「M大を受けようと思ってよ。今のままでも何とかなと思うが、

念のために」

「M大か。頑張れよ」

「ああ。お前も一緒に行かないか？予備校」

「俺はいいよ。高校に入るときも自分で何とかしたし。大学はそんなに甘くはないだろうが、今更人様のやり方では勉強できない。俺は俺のやり方でいくよ」

「そうか。お前はそれで伸びてるもんな。それでいいかもな」

「うん、行き詰ったら考えるよ」

「馬鹿、行き詰ったときには遅いんだって」

「じゃ、行き詰らないよ」

高校3年 4月19日

俺は山羊座の生まれ、彰子は乙女座の生まれ。

「山羊座と乙女座って相性がいいのよ」

さすが女の子だ。星座にはうるさいみたいだ。

「だけど、確率的には12人に1人は同じ星座の生まれだろ？アテになるのかな？」

「さあねえ。確かに浩は全然山羊座には思えないわねえ」

「だろっ！」

「威張ることじゃないわよ。でも、わたし達は星座を越えようね」

「だって、相性がいいんだろ？」

「山羊座と乙女座じゃなくて、ヒロシとアキコの方がいいのよ」

何のことだかわかんない。が、幸せだけは感じた。

高校3年 5月8日

遠足だ。現地集合、現地解散。朝、出席を取った後、先生達もあきらめているのだろう、

「時間になったら勝手に引き上げる。じゃあな」

と帰って行つた。毎年、後はもう好き放題。家に帰る者、パチンコ屋の開店を待つ者、その場で酒盛りを始める者、雀荘に行く者、何をしてるかわからない者。今年は俺も安達も家に帰ることにした。帰りの電車で担任と同じ車両に乗り合わせた。

「おう、お前らもご帰還か？ま、他人様に迷惑かけないだけ立派だな」

だそうだ。わかってらっしゃる。

高校3年 6月1日

6月だ。センター試験まであと7か月ちよつとだ。1日1点ずつ得点をあげる努力をするとして、およそ200点ほど得点アップ。さて、今、何点くらい取れるのだろうか。国語がほぼ120点、英語がほぼ100点……。うーん、1日1点では間に合わないかも知れない。

高校3年 6月27日

期末試験が始まった。学校の教科書はほとんど勉強せずに試験を受けることになる。もう学校の勉強にはかまっていられないのだ。赤点をもらわなければ良しとしよう。

高校3年 7月9日

体育で水泳の授業があった。プールで好き勝手に泳ぐだけだったが。

授業が終わって更衣室に入ると人だかりができていた。何事だ、とのぞき込むと、人だかりの真ん中にパンツがある。しかもかなり汚れている。誰のパンツだ？ちよつと恥ずかしいよな。たとえ持ち主でも名乗れないよな。皆と一緒に「汚ねえな」とか「誰のだよ」

とか言っておくしかないよな。気の毒に。俺じゃなくて良かったよ。そのとき、松本が入って来た。

「どうしたんだよ？」

人だかりに参加する松本。次の瞬間、

「あ、俺のパンツだ」

事もなくパンツを拾って、さっさと着替えを始めた。

この日、「松本はすごい奴だ」という噂が学校中を駆け巡った。

高校3年 7月23日

夏休みだが勉強ばかり。親切なことに学校でも補習授業をしてくれるし、予備校や塾に行かなくてもいいよな、なんて、お気楽なのは俺だけだった。学校の補習が終わった後、皆どこかの予備校や塾に通っているとのこと。しまった。夏期講習だけでも受講すべきだったか。

高校3年 8月13日

家族は皆、母の実家に行ってしまった。墓参りだそうだ。5日ほどで帰ってくるらしい。俺は受験勉強でそれどころじゃない。でも、何で「盆」なんてあるんだろう。別に盆でなくても気が向いたときに墓参りすりゃいいじゃないか。まあ、俺が死んでも、墓なんて参ってもらわなくていい。それより、俺の写真を見て涙の一筋でも流してくれるとか、にっこり微笑んでくれるとか、そっちの方がうれしいぜ、彰子。ん？

高校3年 8月31日

夏休みが終わったよ。確かに勉強はしたけど、いったいどれくらい差を縮めることができたんだろうか。もしかしたら差が開いてた

りして。

高校3年 9月3日

夕方、彰子と歩いてると、繁華街の端っこにある公園のトイレの陰で、男女の二人連れが4人の若い男に囲まれているのが目にとまった。彰子は気付いただろうか。気付いてないといいけど。何も見なかったことにして通り過ぎたい。が、彰子が立ち止まった。あっちゃー、気付いたのか。

「ねえ、あれ」

「うん、囲まれてるね」

「どうする？」

「どうするって……」

「助けてあげないの？」

そう言われてもなあ。俺は決して正義の味方じゃないし、面倒に巻き込まれるのはごめんだ。殴られたら痛いし。でも、仕方ないよなあ、彰子が言うんじゃ。

「わかったよ。ちょっと行ってくるよ。俺が時間かせいでる間に警察呼んで来てくれよ。なるべく早くな」

「うん。手を出しちゃダメよ」

普通は「気をつけてね」だろう。彰子は走って行った。

だが、馬鹿なカップルだよなあ。この物騒な時代に物騒な街を歩くんなら「何があればどうする」って決めておけよ。2人仲良く囲まれることはないだろう。俺と彰子は決めてるぜ。まず、やり過ぎず。でなきゃ、2人で逃げる。ダメなら彰子1人でも逃げる。俺は何とか彰子を逃がす。そして。彰子は人を呼ぶ。1人で身軽になった俺は逃げることを考える。ダメなら人が来るまでなるべく時間をかせぐ。それでもダメなら一戦交える。で、落ち合う場所（俺の家か、彰子の家か近い方）に後で行く。2人とも逃げ切れなかったら、先制攻撃をかまし、隙ができたところで彰子を逃がす。ダメなら一

戦交える。云々ということになってる。まあ、結局、最後は一戦交えるんだけど。

「ねえ、何してるんですか？」

「あー、ダアレだよお、オメエ？」

「通りがかりの者ですが」

「ザケンだよ。カンけえネエンなら、イケよ」

「いや、その2人が可哀想かなって思ってた」

「ナニイー、カワイソーだあ。オメエもカワイソーうにしてヤローウか？コラあ！」

こいつ、何しゃべっても「漢字」があるように聞こえないから不思議なんだよなあ。

「勘弁してくださいよ」

「ウルセエんだよお、おラア、オメエもよ、カネだせ、カネ」

「イヤだね」

「ナニイー？やるのかヨ」

「やるね、俺は」

「アーイーッ、ナンだってえ、ヤアルーう？」

と言いながら、火のついた煙草を投げつけやがった。もう我慢はやめた。

「シヤベクってるヒマはないんだよお、オレにはあ」

いかん、俺まで漢字なしのしゃべりになった、と、思いながらも手が出ていた。いや、足だ。「漢字なし兄ちゃん」の股間を思いつき蹴り上げていた。

「グエイーッ」

兄ちゃんの変なうめき声をあげてうずくまった。うめき声まで「漢字なし」だ。あ、普通そうか。後はもう無茶苦茶だ。空手の心得があるったって、空手の試合をしてるわけじゃない。喧嘩なんだ。やり始めたからには、相手を叩きのめすか戦意を喪失させるかどちらかを目指す。目指すほどのことでもないけど。そのためには武器を持つのが一番だ。気付いたら、自転車のハンドルを持ってグルグ

ルと振り回していた。変な兄ちゃん達は逃げて行った。全然骨がない。もちろんないほうが助かる。最初に始末した兄ちゃんが動けずにいる。俺も目が回って座り込んだ。カップルは啞然として突っ立っている。もう安心だ。

「行っちゃいましたね」

声をかけると、男の方が言った。

「はい、でも、大丈夫ですかね、その人？」

「漢字なし」の心配するより俺の心配しろよ。と、そのとき、警官が走ってくるのが見えた。遅いんだよ。もう手を出し終えた後だよ。かなり後ろに彰子も見える。色々と面倒だから、

「じゃ、これで」

カップルに声をかけ、ふらつきながら走ってその場を後にした。公園をぐるっと迂回して彰子のところに行ったが、何故か警官が俺を追っかけてくる。そりやないだろう。

「お前も走れ」

彰子と一緒に逃げた。

「何で逃げるのよ？」

走りながら彰子が尋ねる。

「警察は面倒だから」

本当に面倒なのだ。たとえ「正義の味方」だったとしても「ちょっとお話を」で2時間は覚悟しなきゃならない。

どこかの店に走り込んでようやくやり過ごした。人助けも大変だよ。

高校3年 9月4日

朝、目が覚めると腰が異常に痛い。昨日の喧嘩とその後のランニングが腰に来てる。そうだ、俺は腰が悪い人だったんだ。

何とか我慢して授業だけは受け、学校帰りに病院に行った。「一週間ほど入院」だそうだ。慣れない人助けなんてするもんじゃない。

高校3年 9月5日

夕方、彰子とせつが花を持って見舞いに来てくれた。

「ごめんね、わたしが要らないこと言っただけに……」

いいんだよ、彰子。お前のせいじゃない。

夕食を食べていると安達が来た。

「よお、エロ本持って来てやったぜ」

いいんだよ、安達。お前は来なくても。

高校3年 9月7日

退院。「まだいろ」と医者に言われたが、駄々をこねて退院。

高校3年 9月9日

彰子の誕生日だ。俺より早く18歳になる。おめでとう。

高校3年 9月18日

体育祭だ。俺は走るのも殴り合いするのも得意だから、リレー、棒倒し、騎馬戦と引つ張りだこだ。腰も一応治ったし、走る方は別にどうでもいいんだけど、棒倒しと騎馬戦の前に、

「岸和田よ、こいつを頼むぜ」

色んな奴等が名前を書いた紙を俺に渡してくる。いったい何を頼まれてるんだ？俺は。わかってるけど。今日は「走る暴力」になつてやるぜ。でも、相手が敵方の奴なら期待にこたえられるが、味方の名前が書いてあっても困るよな。手の出しようがないじゃないか。

高校3年 10月15日

同級生の大宮は、通学途中に駅でよく見かける女の子に片想い中だ。F学院の子だ。

「ただ見てるだけじゃどうにもこうにもなんないぜ。早くデートに誘えよ。そうだ、うちの文化祭に誘えよ」

安達にそのかされて本当に文化祭に誘ってしまった。

「……じゃ、文化祭の日、正午に正門で待ってます」

そう言ったらその子はうなずいた、と大喜びしていた大宮。うなずいたんじゃないくて、うつむいたんじゃないの？ 本当かな、俺と彰子じゃあるまいし、そうそう簡単にうまくいくもんじゃないだろう。

高校3年 10月20日

文化祭だ。冷たい雨が降ってる。まあ、体育祭じゃないし構わないのだが、正門のところに立ちつくす大宮が哀れだ。

高校3年 10月22日

朝、駅で安達を待っていると大宮が現れた。かと思うと、ある女の子のところに走り寄った。「ああ、あの子か」と思いながら見てみると、いつの間にか安達が俺の横にいて、

「面白いことになりそうだな」

なんて言ってる。と、女の子は小走りに改札へと向かう。大宮がその後を追う。

「おい、行くぜ！」

安達も走り始める。行くのは勝手だが、そっちは俺たちの学校に行く路線じゃないだろ。俺は行かないよ。

安達が学校に現れたのは3時限が終わったときだった。
「お前、今まで何してたんだよ」

「決まってるじゃん、大宮の後を追ってたんだよ」

「で、その大宮は？」

「あいつ、警察に連れてかれたぜ」

「は？」

「あの馬鹿、電車の中で『なんで来てくれなかったんですか。なんで逃げるんですか』とか、あの子に言ってるの。それだけならまだしも、あの子の降りた駅で一緒に降りて後をついていくんだな」

お前も結果的に同じことしてたんだろよ、安達。

「で、あの子が走り出したら大宮も走り出して、『痴漢です！』なんて叫ばれて。で、近くのサラリーマン達に取り押さえられてさ。警官が2人来てパトカーで連れて行かれた」

「大宮は痴漢まではしてないだろ。お前、見てたんなら誤解だって言ってるやいやいいじゃないか」

「やなこつた。面倒だ」

大宮はこの日学校に来なかった。

高校3年 10月23日

大宮が学校に来た。何となくニヤついている。可哀想に、自嘲の笑いを浮かべるしかないんだろうな。

「昨日は大変だったらしいな。痴漢呼ばわりされたって」
声をかけると、

「おお、それが、痴漢が誤解だとわかってさ、警察を出たところですごく可愛い子に出会ったんだよ。思いつきり目が合ってたさ、いい感じなんだよ」

安達がいきなり現れて口をはさむ。

「やったじゃん。早くデートに誘えよ」

もつこいつと付き合うのはやめようか。

高校3年 11月4日

無茶苦茶勉強してる。本当に俺か？

高校3年 11月22日

模試の結果が出た。まずい。

高校3年 12月3日

彰子がS女子大学の英文科に推薦で合格した。おめでとう。彰子はすごく喜んでいた。夢に一步近づいたのだ。本当におめでとう。だが、俺にはすごいプレッシャーがかかる。彰子は大学生、俺は浪人ではちよつと惨めだ。何としてもG大に合格する。2人で大学生になるんだ。

高校3年 12月5日

受験が終わるまで彰子と会わない。本当は毎日でも会いたい。でも、大学進学が決まって遠慮なく残りの高校生活を楽しんでいいはずの彰子が、これから受験する俺に色々と気を使うのは目に見えてくる。気を使っているのがわからないようにさりげなく気を使ってくれるとは思うが、気の毒だ。電話も週に1度きりにしよう。

高校3年 12月6日

彰子に昨日の決心を伝えた。色々言わなくても理解してくれた。が、ちよつと悲しそだった。俺はその様子が嬉しくもあり、可哀想でもあり、複雑な気持ちだった。しかし、一旦勉強に打ち込むと決めたんだ。意地でもG大に受かる。2人で大学生になるんだ。

高校3年 1月1日

いつの間にか年が明けていた。

とりあえずおめでたいが、センター試験まであと2週間だ。畜生、時間がないぜ。いや、何とかする。意地でもG大に受かる。2人で大学生になるんだ。

高校3年 1月16日

センター試験が終わった。やるだけのことはやったぜ。だが、俺の「やるだけやった」が通じるとは限らないのがつらい。しかし、絶対にG大に出願するぞ。

高校3年 2月27日

終わった。俺の大学受験が終わった。もう二度としたくない。

彰子に報告した。彰子はねぎらいの言葉をかけてくれた。結果はどうあれ、明日から彰子と会える！

高校3年 2月28日

彰子と会う。3か月ぶりだ。嬉しかった。楽しかった。別れ際に、頭の片隅にある不安を口にした。

「ねえ、もし俺がG大に落ちて浪人することになったらどうする？」
「『どうする？』って、どうもしないわよ。また1年は会う機会が少なくなるけど、今まで通りあなたのことが好きよ。うっん、頑張ってる姿を見たらもっと好きになるかも」

「本当に？」

「本当よ。でもね、大丈夫よ。受かってるって。あれだけ頑張った

んだから」

「元々頭のいい奴とか、俺より頑張った奴なんて掃いて捨てるほどいると思うぜ」

「いいんじゃない、それはそれで。ほかの人のことなんて知らない。わたしにはあなたのことがわかれば十分よ」

もしかしたら俺は、安心して浪人していいのかも知れない。きっと、かなり恵まれた浪人になれる。

高校3年 3月9日

合格発表。

「！」だぜ。

これで彰子と一緒に大学生。
やったぜ！ザマミロ！

高校卒業後の春 3月11日

吉村せつはT医大に合格していた。安達も安達の彼女もともにM大に合格していた。おめでたいことだ。で、みんなで合格祝いをすることになった。恭子も一緒だった。

高校時代から気ままに遊んでいた安達の案内で店に入り、まずシヤンパンで乾杯した。その後は赤ワインだ。「初心者のために飲みやすいものをオーダーした」と安達が偉そうに言うだけあって、飲みやすいおいしいワインだった。からかどうかわからないが、皆おいしそうに何杯も飲んでる。安達は顔がひきつっている。俺のところに来てこんなことを言う。

「知らないぜ。最初はおいしただけだろうが、すぐに酔いが回ってとんでもないことになるぞ。大体、お前らは酒なんて飲み慣れてな

いんだからな……。それに、ここは『店』なんだからな。お金つてものを払わなきゃならないんだぜ。おい、聞いてんのか」「そりゃそうだ。とんでもないことする奴が出て来た上にお金足りません、じゃ困るよな。だから足立クン、君のお知り合いの店を使ってるんだろ。よろしくね」

「何言い出すんだよ、まったく」

安達の心配をよそに楽しく飲んで食べた。安達は「だから遊び慣れてない奴等と一緒にだといやなんだよ」とかなんとかブツブツ言っていたが、酒が進むにつれ絶好調で盛り上げてくれた。やっぱりいい奴だ。

そして、もう1人、絶好調の人がいた。恭子だ。自分だけが年下ということもあつたのだろう、あまり飲んでいなかった。しかし、1時間もすると、誰彼構わずからんでいる。彰子には「1人楽しんでるうーい。みんながギリギリしてるときに、サツて推薦、サツサツて先に推薦」、せつには「あんた、第一印象で患者に嫌われちゃ医者はおしまいだよ」、安達と安達の彼女には「きゃー、お似合い！あじさいとカタツムリくらいお似合い！桑の葉とカイコくらいお似合い！」、俺に対しては「頭の中で何かブーンっていったの、ブーンて」と言いながら頬をつねる始末。彰子も最初はたしなめていたがもうあきらめている。しかし、何故か憎めない。皆もそう思っているのだろう。悪態をつかれながらも笑っている。

電車は使わずに歩いて香山家に向かった。俺は恭子をおんぶしている。

「恭子がこんなに酒癖が悪いとは知らなかったわ」

彰子がため息をつきながら言う。

「楽しくていいんじゃない」

「今回はね。でも、いつもわたしやヒロシがそばについてるわけじゃないし。この先心配だわ」

確かにそうだ。俺の背中では眠っている恭子。完全に安らいでいる。

「ヒロシ、絶対に左を向いちゃダメよ」

彰子が急に言う。

「え、何で？」

「今左向いたら、恭子とキスしちゃうから。もう、大体どうしてわたしより先に恭子に背中を貸すのよ！わたし、おんぶしてもらったことまだないわよ」

俺は少し嬉しくなった。

「灰色の星」

彰子がつぶやく。

「え？」

「ヒロシのことよ。イメージなんだけど『灰色の星』なの」

「何で灰色なんだよ？いつも灰色の服を着てるからか？」

「それもあるわ」

彰子は続ける。

「いつでも北の空に輝いてる。でも、みんなには見えないの。だって、灰色なんだから。わたしにしか見えないの」

「・・・・・・」

「いつかは明るく輝く。みんなも気付く。でも今はわたしだけの星。だから『灰色の星』」

「何で北の空なんだよ？」

「何となくね。でも、北ってストイックな感じがするでしょ」

「お前、何か俺のこと誤解してないかい？」

「うん、してるかもね。でも、いいのよ」

北の空に輝く「灰色の星」か。俺は「星」なんてたいそうなものじゃない。せいぜい「灰色の虫」だ。虫が星になるのは大変だ。だが、とりあえず、虫なりに飛んでみよう。

第3章　　恭子

大学1年　4月6日

大学生だ。

昔は大学生になった自分なんて想像もできなかったぞ。でも大学生だ。そういや、ヒゲを剃ってる自分なんて幼い頃は想像もしたことはないのに、いつの間にか、当たり前のように毎朝ヒゲを剃ってるもんな。それと同じか。大きくなったもんだ。

両親に感謝。

大学1年　4月9日

俺は教員養成系の大学に入ったのだが、入りたくて入ったのだが、いいんだろうか？俺みたいな奴でも4年間いれば教員の免許がもらえてしまうのだ。俺が言うのも変だが、教員も、医師や薬剤師みたいに最終的には国家試験で資格を与えるようにした方がいいんじゃないかい？何となくそう思った。

大学1年　4月15日

S女子大の近くで彰子と待ち合わせた。さすがにS女子大、あの子も美人、この子も可愛い、っていう学生ばかり（ということにしておこう）。が、彰子の輝きはちよつと違うんだな。すぐにわかる。周りから見たら俺みたいなのは「馬鹿な男」なんだろうな。

でも、彰子と並んで歩いていると、男達が皆彰子を見ているのがわかる。すれ違った後振り返る奴もいるぞ。俺も振り返ったからわかるけど。目がそいつと合ったし。

大学生になって彰子はいつそうきれいになった。

俺はすごく幸せ。で、大馬鹿野郎かも。

大学1年 4月23日

恭子に勉強を教えることになった。「教員養成系の学部なんだから高校生くらい教えられるだろう」というマリアの無茶を聞く形になった。

「英語はね、まあまあなのよ。いざとなればわたしでも彰子でも教えられるし。でも、国語と社会が全然ダメなのよ。お願い、見てやって」

「僕は全然頭良くないし、自分勝手な勉強法しかしてこなかったの
で他人を教える自信はありません」

「その勝手な勉強法がいいのよ。実際にそれでG大に受かってるんだし」

今ひとつ気乗りはしなかったが、彰子と会う機会も増えるし、と引き受けてしまった。

恭子も彰子がそうだったように私立の高校に通っているが、違うのは上に大学がないということだ。進学するには受験勉強するしかないのだ。

「恭子、お前どこの大学に行くんだよ」

「R大かH大」

「英語だけで受かるつもりか？」

「だから、他の教科も勉強し始めたんじゃない。志望校に通してよ。落ちたら恨むからね。責任とってよ」

「無茶言うなよ。俺は魔法使いじゃない。お前が勉強して合格するの」

先が思いやられる。

大学1年 5月5日

彰子がイギリスに留学することが決まった。できるだけ早い時期に、英語だらけの環境に身を置きたいと言っていたが、まさかこんなに早いとは。

せっかく2人で大学生になったというのに、彰子は夏からイギリスに行ってしまう。向こうの大学は9月から始まるが、その前に一応語学研修を受けておくというのだ。

寂しいが、彰子が夢に近づくのは嬉しい。
行つて来い。でも、俺のところに帰つて来いよ。

大学1年 6月18日

恭子の国語、特に古文が驚異的な伸びを見せた。助動詞の活用を無理やり覚えさせただけなのだが、活用がある全ての品詞に応用する器用さが恭子にはあったのだ。驚きだ。

一番驚いていたのは恭子本人だった。模試の結果をまとめたデータ表を嬉しそうに見せてくれた。いいと言つのに「何かお礼するか」と聞かなかつた。

大学1年 7月8日

この2、3日ずっと雨だ。

勉強しながら恭子がつぶやく。

「梅雨なのね」

「ああ、うつとうしいな」

「でも、もっと雨が降らないかな。何もかも洗い流すくらいに」

「そりゃ、洪水だろう」

「洪水でも何でもいいわよ」

「お前、何か悩んでるのか？」

「悩みくらいあるわよ」

「俺は聞きたくないから、さっさと勉強しようぜ」

「するわよ」

大学1年 7月23日

明後日、彰子が日本を離れる。

「離ればなれだな」

「うん。だけど手紙だって書くし、電話だってするわ」

「ああ。だが、一緒にいられない。彰子は平気か？」

「平気じゃない。つらい。……ごめんね、わたしのワガママで……」

彰子は涙ぐんだ。

「悪かった。俺が変なこと言った。謝る」

「ううん、いいの」

「心配するな。どこにしようが俺は俺、彰子は彰子。俺達は俺達だ」

大学1年 7月24日

恭子の勉強を見た後、夕食を一緒にと、マリアが声をかけてくれた。明日は彰子がイギリスへ発つ。しばらくは食事を共にすることもない。家族水入らずを邪魔するのも悪いと思ったが、お言葉に甘えさせてもらった。

夕食後、お礼を言って香山家を出た。彰子が門の外まで送ってくれた。

「泣いちゃうから、明日は見送りに来ないでね」

「ああ、行かない。でも、誰か送ってくれるのか？」

「母と妹とせつが空港まで来てくれるの」

「その3人が一緒じゃ、俺がいなくても自然に泣けてくるだろ」

「いいえ、泣かないわ」

「絶対泣くって」

「泣きません。例えばヒロシがいても泣きません」

「さつきといってることが違うぜ」

「今決めたの、泣かないって」

「じゃ、俺も行く」

「いいえ、来ないで。来たら泣くわよ」

「行かないよ」

「それじゃ、お休み」

「お休み。ちゃんと帰って来いよ、彰子」

「お休み」の、そして「行つてらっしゃい」のキスをした。

大学1年 7月25日

じつとしていられなくなった。空港に来てしまった。彰子たちを見つけた。出て行くタイミングがわからず柱の陰から見ていた。4人で何か話していた。

出て行こうか、よそうか、迷っているうちに彰子と目が合ってしまった。ほかの3人は俺に背を向けているから気付いていないようだ。

俺は右手で拳を作って突き上げた。彰子も3人の相手をしながら右手を上げた。が、すぐに両手で顔を覆ってうつむいてしまった。マリアが、肩を抱きながらハンカチを差し出していた。言葉通り、俺が来たから泣いたのか。俺も泣きそうだった。彰子が顔を上げ、またこちらを向いたとき、無理に笑って手を振り、背を向けて歩き出した。涙が出る寸前だったのだ。

大学1年 8月7日

恭子の成績が全体的に伸びてきた。

恭子は夏休みだというのにうそみたいに一生懸命勉強している。志望校に行かせてやりたい。

大学1年 8月10日

彰子から手紙が来た。

「……わたしはこれから、あなたの知らないものを見て、あなたの知らないことを話して、あなたの知らない人と出会います。でも、決してあなたの知らないわたしにはなりません。わたしはわたしのままでいます」と結ばれていた。嬉しかった。

大学1年 9月20日

夏休みが終わる。彰子のいない夏休みだった。

大学1年 9月22日

恭子の偏差値が、R大のボーダーライン近く、H大の合格ラインを越すまでに上がった。これまでは漠然とした憧れでしかなかったものが現実味を帯びてきたのだ。恭子のモチベーションはいやでも高まるに違いない。

恭子が「お礼」のケーキを焼いてくれた。マリアのケーキと遜色なかった。「お母さんと変わらない腕前だ」と言うと、「大学生になっってお菓子作りにかかる時間が増えたら、お母さんを超えるから楽しみにしてて」と答え、マリアに鼻で笑われた。

だが、これからが勝負だ。もうひと伸びしてもらわなければ。

大学1年 9月26日

恭子の世界史が芳しくない。どうして覚えることが覚えることが一番多い世界史なんて選んだんだろうか。文句を言っても仕方がない。出来事の起こった順序が覚えられないという恭子のために、項目を並べかえるパソコン用のプログラムを書いた。やつつけ仕事で

味も素っ気もないものになったが、恭子は気に入ったようだ。

プログラムに名前をつける際、岸和田の頭文字Kを適当に3つ並べて「KKK」としたら、恭子はKu Klux Klanの略になるからと嫌がった。面倒くさいのでKyoko Kayama with Kishiwadaの「KKK」だと言いくるめた。

大学1年 9月27日

不気味な頭巾をかぶった連中に恭子が拉致される夢を見てしまった。やっぱり「KKK」という名前はやめておけば良かった。

大学1年 9月30日

自分の受験前に俺自身が試みたありとあらゆる勉強法を恭子にも試している。その中で、恭子が納得できて効果のありそうなものを継続している。

第三者が見たら「馬鹿じゃないの」と思うようなものでも、意外に効くことがあるのだ。

例えば、国語の文章の速音読だ。目で素早く字面を追うと同時に発声もしてみるのだ。声にできるということは、目で見た単語や句がしっかりと認識できているということなのだ。試せばわかる。簡単なはずの、平仮名が多い部分に結構苦労する。瞬時に認識したことを声に出すことで口を動かす神経も刺激され、自分の声を聞くと、という聴覚的な効果もあるのではないかという、デタラメな発想であり出したものだが、これを始めてからひと月ほど後に模試を受けたとき、自分の文章を読む速さに驚いた。しかも、目で読むだけなのに、頭の中に自分の声はつきりと響くのだ。問題の文章が読めなはずがない。更に読む時間が短縮される分、考える時間が増えるのだ。（俺の場合、「考える」方に問題があったのだが……）

また、恭子にはあまり必要ないが、英語の長文読解でも変なことを大真面目にした覚えがある。問題集の長文の部分を、句や節、文、段落と適当に切りばらばらに並べかえる。そのままだと断面の形で想像がつくから、コピーを取り、切ったときの記憶が薄れる次の日以後に、そのコピーを見ながら文章を整除する、というものだ。単語の意味や表現云々ではなく、流れをつかみ全体を把握するセンス（というより、直感か）はそれなりに磨けたと思う。

馬鹿馬鹿しいと思わない方はお試しあれ。ただし、結果には責任持ちません。

大学1年 10月2日

恭子が夏休み明けに受けた模試の結果が出た。英語が少し下がった。国語と社会しか勉強してないんだから仕方がない。本人はいぶん落ち込んでいる。

「どうしよう。頼みの英語がこれじゃ落ちるわよ」

「どこが悪かったんだ？」

「長文かな。時間が足りなかったわ」

「時間かあ」

「時間というより単語よね、やつぱり。今までタカをくくって単語の勉強をあまりしてないから、わかんないのがいっぱいあって読み切れなかったのよ」

「今から単語の勉強始めるのか？」

「遅い？」

「しないよりはいいけど、それだけに時間取るわけにもいかないだろ」

「どうしよう。落ちたら恨むからね。一生恨むわよ」

すぐに人を脅す。

「わかった。俺が去年作った単語集をお前用にアレンジしてやる」

「え、単語集作った！？普通買わない？」

「作っただよ。色んな入試問題見て、よく出てるものを1000くらいにしばってまとめた。それを覚えたというか、作り上げた時点でほとんど覚えちゃってたけどな」

「変わってるとは思ってたけど、ここまで変わってるとすごいわね」

「どうするんだよ。いらないうらいいぜ。面倒だし。市販の使えよ」

「それで実際に入試に出たの？」

「バッチリ」

「じゃ、作ってよ。何もしないよりマシよ」

俺の努力の結晶は「マシ」でしかないのか。

大学1年 11月23日

恭子が買い物につき合えという。コートを買っらしい。女のファッションはわからないのだが、まあ、息抜きだ。と思ったのが失敗だった。この女だけは、どうしてコート1着買うのに何時間もかけられるんだ、いったい。ゆうに2桁の店を廻ったあげく、最初に行った店で決勝戦をおこなうことになった。

「ねえ、このグレーとダークレッドとどっちがいい？」

「俺が着るならグレーだけだなあ。ちよっと着て見せてくれよ」

恭子は初めに灰色を、次にえんじを試着した。どちらもすごくよく似合っていた。

「ねえ、どっち？」

「どっちもよく似合うなあ」

「もう！どっちよ！」

どっちでもいいよ。本当にどちらもよく似合ってるんだから。自分の好きな方にしろよ。色やデザインで決められなきゃ、値段で決めるとかコイントスで決めるとかあるだろうが。俺に振ってくるなよ、まったく。ええい、俺の好きな灰色がいいか。いや、それじゃ面白くないよな。決まった。

「えんじ。えんじの方がお前の顔が引き立つ」

「本当？」

「ああ」

「じゃ、こっちにしよう」

というわけで、恭子はえんじ色のコートを買った。

大学1年 12月1日

大学でいきなり景山教授に呼ばれた。

「留学してみないか」という話だった。アメリカの大学、期間はほぼ1年。向こうでの勉強も単位として認めてくれるという。実は、留学する学生はすでに決まっていたのだが、その学生が都合で留学を辞退したのだという。いわば、ピンチヒッターの留学生だ。しばらく考える時間をもらうことにした。

大学1年 12月19日

12月になって、恭子は学校に行かず家で勉強することが多くなった。俺も時間が許せば勉強につき合った。

しかし、今日はびつくりした。

昼前に電話が鳴った。香山家にかかってきたのだから香山家の者が出るべきなのだが、恭子は動こうともしない。「出なくていいから」と言う恭子の制止を「そんなわけにはいかないだろう」と無視して、俺が受話器を取った。何と、恭子の学校からだった。

「あの、香山さんですよねえ。私、恭子さんの担任の稲葉と申します。実は、恭子さん、この一週間学校にお見えになっていないんですよ。何度かお電話差し上げたんですが、いつもご不在のようで……。いったい、どうなさっているのかなと思まして」

「はあ……」

「あの、恭子さんのご家族の方ですよ？」

将来はそうなるかもしれないが、今は違う。

「はい、いえ、あの……。今、本人と代わりますから」
受話器を手で押さえて恭子に伝える。

「おい、担任の先生からだ。学校一週間も休んで何してるのかって」
恭子は俺から受話器を奪い取り、大声で言い放った。

「何してるかって？決まってるでしょ！受験勉強よ！」

ガチャン。

「だから出なくていいって言ったのに」

「すみませんでした」

何故か謝ってしまった。

大学1年 12月24日

夕方近く、恭子の勉強を見に行く。

1時間ほどしてマリアが帰って来た。

「恭子、ちよつとだけでいいから教会に行つて来なさい。わたしは
帰りに寄つて来たから。ヒロシさんも一緒に行つてみる？クリスマス
の教会には行ったことないでしょ？割といいものよ」

俺はキリスト教徒ではないが、マリアのすすめに従った。

恭子と並んで教会まで歩いた。

「俺はクリスチャンじゃないけどいいのか？」

「もちろんよ。わたしが十字の切り方教えてあげる。右手貸して」

恭子は俺右手を取り、上下、左右とゆっくり動かしてくれた。

香山家を通っている教会に着いた。門から続く、煉瓦を敷き詰め
た小道の先に、白い美しい建物があつた。多くの人々が集まってい
た。キリスト教徒は意外に多いんだなと思った。

「お祈りだけしてくるね」

恭子は前に歩み出て、大きな十字架に顔を向けていた。十字を切
った後、両手を合わせて何事かつぶやいているようだった。その後、
身長2mはありそうな黒人の牧師と言葉を交わしていたが、手招き
してきた。前に出て行くと、大男の牧師に紹介してくれた。その牧

師は上手な日本語で話した。

「今日こうしてあなたと出会えたのは神のお導きです。お会いできて光栄です」

大きな手を差し出してきた。握手した。暖かな手だった。

教会からの帰り、俺は恭子に尋ねた。

「何をお願いしてたの？」

恭子は笑って答えた。

「初詣じゃないんだから。お願いはしないわよ。ただ、感謝してお祈りしてただけ」

「へえ、そうなの。でも、祈りと願いつてどう違うんだ？」

「難しいわね。でも、祈りは『お祈り』、願いは『お願い』。どっちの方が愛情や慈悲にあふれてるように聞こえる？どっちの方が利己的に聞こえる？」

「そっぴやそっぴだ。言われてみれば何となくわかるような気がする」

「でもね、ホントはね、ちょっとだけ『お願い』もしちゃったの」

「え、何て？大学合格？」

「違うわ。そんな自分の力で何とかすべきことは願いにも祈りにもしないわよ。もっと神様に力を貸してほしいこと」

「何なの？」

「教えてあげない」

香山家でクリスマス・ディナーをご馳走になり、のんびり歩いて家に帰ったら0時前だった。イギリスとの時差は9時間、今頃彰子は午後のお茶でも飲んでいるのだろうか。

入浴を済ませてボーツとしていると午前2時になった。彰子に国際電話をかけてみた。……。出なかった。教会に行っているのだろう。彰子は「お祈り」しているのだろうか。それとも何か「お願い」しているのだろうか。

大学1年 1月1日

新年だ。おめでたい。

しかし、自分の受験は終わっているのに、何故かまた受験勉強をしながら年を越してしまった。自分の受験じゃない分、責任を感じてしまう。

とりあえず神社に初詣に行ったが、すごい数の人だ。神様もいち願いを聞いてられないだろうな。来年になっちゃうぜ。その前に、誰がどんな願いをしたか覚えてられないだろう。で、俺はおもいつきり大きな音を立てて拍手を打った。恐らく、日本の神社の神様は、拍手の音、波長で誰なのかを判断なさるのだろうから（そうでなければ、お辞儀をして手を合わせるだけの参拝法になってるはずだから）、これでもかと大きな音を出して目立たなきゃ。拍手を打たない奴、手袋をしたまま打つ奴、お義理でペチペチと小さな音しか出さない奴、「どんなお願いか」以前に「誰なのか」わかってもらえないぜ。もちろん「拍手の音、波長」は、俺の勝手な解釈で、神主さんとかに教えてもらったわけではないから、正しいかどうかはわからないんだけど。神様にアピールできたぜ、と満足して家に帰った。

・・・・ん？形式にばかりこだわって、肝心のお願いをしていなかった。馬鹿だ、俺は。まあ、いいか。本来、神様は貴び敬うもので、頼りにするものではないからな。でも、後でまたお参りに行こう。

夕方から恭子のところに行った。恭子も「年越しで勉強した」と威張っていたが、当たり前だろう。お前の受験だ。でも、どの問題もかなりよくできてる。俺ごときに勝っても仕方ないけど、負けそうになるくらいキツチリと解けるようになってる。これは期待できる。

帰宅後、彰子に電話した。久しぶりに長い間話した。新年の挨拶、街の様子、友達のこと、マリアや恭子のこと、俺の家族のこと、そして、お互いの気持ち。アメリカ留学のことも相談してみた。彰子は留学に賛成だった。

「自分がしてるからよくわかるけど、絶対に留学したほうがいいわ。英語ならうちの母に教えてもらえばいいわよ、ネイティブなんだから」

「そうだな、そうするよ。アメリカか、全く実感ないなあ」

「今は日本にいるんだから実感も何もないでしょ。行ったら嫌でも感じるわよ、異国だって」

「彰子もそうだったのか？母親の国だろ」

「わたしの祖国は日本よ。だから、初めは『来ちゃった』としか思えなかったわ。今は、自分の居場所もあるから『ここにいるんだ』って思えるけど」

「俺もそうなれるかな」

「大丈夫よ。でもね……、わたしが帰国するのほとんど入れ違いでしょ、寂しいな」

「じゃ、やめようかな」

「やめちゃダメ！言ってみただけ。自分を磨けるときに磨いておかないゃ。時間はその後にもいっぱいあるんだから」

大学1年 1月8日

留学したい旨を景山教授に伝えた。英会話学校にも通うことにした。

大学1年 1月9日

恭子の受験間近。

英語は大丈夫。国語も出来上がってる。

あとは世界史だ。出来事、人物名など、暗記しなければならないことが限りなくある。暗記だけは肩代わりしてやれない。

ええい、もうクイズだ。

「『マツツイーニ』『カブール』『ガリバルディ』と言えば？」

「イタリア統一！」

こういう具合だ。お遊びにしか見えないだろうが、俺も恭子も必死なのだ。しかも、試験に出やすいところをクイズにするわけだから、前の日、俺は何時間も過去の問題等を研究しなければならない大変なのだ。

出来事の起きた順番や流れは、「KKK」のおかげか、ほぼ理解しているようだ。

大学1年 1月11日

恭子が誕生日がどうのこうのと言っていた。何故、明日が俺の誕生日だと知ってるんだ？ 彰子に聞いたのか？

「誕生日プレゼントに何くれるんだ？」

「は？ 誕生日プレゼントを『あげる』の間違いでしょ」

「え、尊敬する岸和田先生の誕生日に何かくれるんじゃないのか？」

「なによ、可愛い生徒の誕生日に何かくれるんじゃないの？」

「お前、いつが誕生日なんだよ」

「今日よ。1月11日」

「今日？ 俺は明日、1月12日」

「うそでしょ。ホントに？ ヤだあ」

「何がヤなんだよ」

「ヒロシの1日前なんて変な気分」

「俺だって、お前の1日後って、微妙だな……。で、何が欲しいんだよ」

「いいわ、もう。お祝いする気が失せちゃった」

失礼な奴だ。

「俺はお祝いして欲しいから、明日待ってる」

「ずーっと待ってれば」

かわいいげのない奴だ。

大学1年 1月12日

恭子が「一応ケーキを焼いたから食べに来い」と言うので、途中でマフラーを買って行った。えんじ色のコートに合う（と思った）ベージュのマフラーを選んだ。

ケーキはすごくおいしかった。恭子もマフラーを気に入ってくれた。

どたばたした誕生日だった。

大学1年 2月3日

明日は恭子がH大を受験する。ヒマなので「ついて行ってやろうか」と言うが、「友達と行くからいい」ということだった。頑張れ。

大学1年 2月8日

「もしもし、恭子か？」

「お早う」

「お早う。よく眠れたか？」

「うん」

今日はR大の受験日だ。朝電話してくれと言われていたので、6時過ぎにこうして電話したのだ。

「いいよだな」

「うん」

「どうだ、何とかなりそうか？」

「どうだろう・・・」

「やけに謙虚じゃないか」

「そう？でも、やるだけやるわよ」

「その意気だ」

「ありがとう」

「いいか、お前は俺の一番初めの教え子なんだからな。自信を持て」

「それが心配の種なのよ。まともな教え方じゃなかったから」

「今更遅いんだよ。あきらめて頑張つてこい」

「今までやってきたことを信じるしかないもんね。頑張ってくる」

恭子、俺という人間を信じないのは構わないが、少なくとも俺が教えたことは信じる価値があるはずだ。だって、俺はお前の「先生」だったんだから。

大学1年 2月15日

恭子がH大に合格した。

俺はH大は大丈夫だと思っていたし、恭子本人も自信があつたらしく、それほど嬉しそうでもなかった。だが、H大でも十分だよ。

大学1年 2月17日

恭子から、R大の合格発表を一緒に見に行ってくれと電話があった。

「H大は1人で見に行ったじゃないか。R大も1人で行けよ」

「嫌よ。1人で泣いてたら馬鹿みたいじゃない」

「まだ落ちると決まったわけじゃないだろう」

「泣くのは落ちたときだけじゃないでしょ！自分の生徒がそんなに信じられないの！」

「それじゃ、うれし涙を流して来いよ。今日は英会話学校に行かな

くちやならないんだよ」

「わかったわよ。1人で行くわよ。合格してたらいいわね。もし、落ちてたら何するかかわらないわよ」

これだよ。

一旦英会話学校に顔を出したが、レッスンをキャンセルしてR大に向かった。「姫」には勝てなかった。

R大の構内はすごい数の人だった。こんなにいっぱい受験した人がいるなら、正直なところ、恭子が落ちていても仕方がないと思った。しかし、肝心の恭子がいなかった。しばらく人混みの中を探し回るが見つからなかった。ふと見やると、隠れるように木の幹にもたれているえんじ色のコートがあった。そばまで歩いて行くと、その「えんじ色」はこちらを向き、こう言った。

「何しに来たのよ。落ちて泣くのを見に来たの」

「今朝の電話と言うことが違うじゃないか」

「だって……」

「行こう。そろそろ掲示だぜ」

恭子は目を閉じ十字を切ると、右手をそのまま俺の方へ差し出した。

「何だよ？」

「言えるうちに言っておくわね。今までありがとう、先生」

俺は右手で恭子の手を取り、握手しながら言葉を返した。

「どういたしました。初めての教え子様」

恭子の右手をそのまま俺の左手に持ち替えて、恭子の人混みへと引っ張って行った。

恭子は何も言わなかった。その代わりに、俺の手を強く握りしめてきた。顔を向けると、不安そうな目が俺を見つめていた。俺は思わず手を強く握り返していた。

それから数秒見つめ合っていたような気がする。一瞬だったけど、そこには「彰子の妹」という修飾語の付かない香山恭子がいた。

湧き上がった歓声が俺を現実に引き戻した。恭子を引っ張って掲示が見えるところまで連れて行った。

「あるか？」

「・・・・・・あるわ」

「ホントか！？」

「あるわ！ホントに！」

それからは周囲の歓喜の渦に同化していた。ただ、さっきまでとは違って変わった恭子の涙交じりの笑顔ははつきり覚えている。

「！！！！」だぜ。

お決まりの騒ぎをひと通り済ませてから恭子を送って行った。駅から香山家に向かって歩いていっていると、何だかしみじみとしてきた。もちろん、恭子の合格は叫びたいくらいに嬉しく、西日を浴びたいつもの家並みも何となく華やいで目に映っていたが、この道を通る回数も極端に減るのだなあ、と思ったのだ。

「こうやってこの道を通ることもなくなるんだよなあ」

「もううちへは来ないってこと？」

「いや、彰子も帰ってくるし、またお邪魔させてもらうよ。でも、今は英会話の勉強で忙しいし、何より、お前が合格したんだからもう教えに来なくていいだろ」

「そうよね、わたしは大学生になるし、姉さんも帰ってくるし、嬉しいでしょ？」

「ああ、嬉しいな。俺は夏の終わりにはいないけどな」

「姉さんとはすれ違いばかりね。もしかしたら、姉さんよりもわたしと一緒にいる時間の方が長いんじゃない？」

「確実にそうだ」

「それでいいの？」

「仕方がないじゃないか」

「そうか・・・・・・。姉さんもヒロシも、自分の道をしっかりと歩いてるって感じね。わたしはかなり後れを取っちゃった。1歳し

か年が違わないのにね。自分が何をしたいのかも曖昧だし」

「何言ってるんだよ。恭子はこれからだろ。何でもできるんだよ。何にでもなれるんだよ」

「何でもできる、何にでもなれる、か。そうだといいいけど」

「お前、合格したその日にいきなりブルーになってどうすんだよ」

「何よ、先にしんみりしたのはそっちでしょ」

「悪かった。じゃ、パーツとするか」

ワインとチーズと紙コップを買って公園に立ち寄った。

「どこか店にでも連れて行ってくれるのかと思った」

「盛大なのはお前の友達とやれよ。これは2人の打ち上げだ」

紙コップにワインを注いで乾杯した。それから俺たちはしばらく話した。昨日までのこと、明日からのこと、今日で先生ではなくなることに、生徒ではなくなることに……。

日が落ちかけ、ワインの赤色が周りに溶け始めた。恭子のコートも黒っぽいシルエットに変わった。

「そろそろ行こうか」

「少し酔っちゃったかも」

「げ、お前、酒癖悪いからな。去年のこと思い出したよ。彰子やせつと飲んだ後、お前をおんぶして今日と同じ道を歩いたんだよ。どうせ記憶にはないだろうけど」

「失礼ね。記憶ぐらいあるわよ」

「はい、はい。酔いが足に來ないうちに家まで帰ろう」

ゴミと空き瓶をくずかごに入れて、俺は公園を出た。「待ってよ」と恭子も追いかけて來た。香山家はすぐそこだ。再び並んで歩きながら恭子が言った。

「わたし、覚えてるよ、去年のこと」

「もういいから」

「あつ、信じてないんだ」

「信じるも何も、お前、思いっきり俺の背中で寝てただろうが。幸

せそうに」

恭子が何かつぶやいた。

「・・・はい・・・し・・・」

「え、何？」

「何でもない。ひとりごと」

香山家に着いた。

マリアが大喜びしていた。マリアにつられたのか、酔いのせいなのか、恭子もまたテンションが高くなってきた。

挨拶をして早々に香山家を辞すことにした。玄関先で恭子に尋ねた。

「さつき、何て言ったんだよ。『ひとりごと』ってヤツ。言いたいことならはつきり言ってくれよ。気になるよ」

「いいのよ。それより、本当にありがとう」

それから、しばらく無言で恭子見つめていた。ちよつとだけ長めの黒髪、大きな黒い瞳、気の強そうな口元。会おうと思えばいつでも会えるのだろうが、何故か、目に焼き付けておきたかったのだ。

俺は恭子の先生ではなくなった。

大学2年になる前の春休み 3月1日

留学費用の足しにするため、割のよいアルバイトをと、工事現場の作業をし始めたが、いつたい何なんだ「現場」って。ズブの素人の俺に何ひとつ教えずにおいて「アレしろ、コレしろ」だ。ワケがわかんないまま何かしていると、すかさず「何やってんだ!」と罵声が浴びせられる。理不尽だ。でも、すぐにやめたんじゃ「根性なし」って思われるから意地でもやめない。「足手まといだ」って言われとも、嫌がらせのつもりで春休みの間は居座ってやる。俺を雇ったことを後悔しろ。

大学2年になる前の春休み 3月5日

体中痛い。が、ここ2、3日現場で叱られる回数が減った。ザマ三口。

大学2年になる前の春休み 3月7日

休みだ。久しぶりの休みだ。現場、現場で毎日クタクタだ。ずっと寝ていたやろうと思ったが、ダメだった。マリアから電話が入ったのだ。ケーキを焼いたから食べに来いと言う。

およそ3週間ぶりの香山家だった。

「やっぱりマリアのケーキはおいしいわっ!」

こう言って恭子にジロツとにらまれた。にらむほどのことか。

友達と会う予定があるからと、恭子が出かけた。マリアが切り出した。

「ヒロシさん、彰子のことなんだけど……」

「どうかしたんですか?」

「別にどうってこともないんだけど、ヒロシさん、まだ彰子のが好きなのかなって思って」

「何言い出すんですか。好きですよ」

「そう。それならいいんだけど」

「何かあつたんですか?」

「何もないわ。彰子の気持ちも、あなたの気持ちも変わっていないと思うのよ。でもね、彰子はずっとイギリスだったし、今度はあなたがアメリカに行っちゃうでしょ。その間にね、気持ちは変わらなくても、2人の関係が変わることがあるんじゃないかと思って」

「何か難しいですね。例えば、僕が彰子さんを思う数値が100だとしたら、いつの間にか120くらいに思う人ができてるってことですか?彰子さんを100思いながら」

「面白いこと言うわね。でも、そういうこともあるかしら。ほかの

人を好きになる云々だけじゃないんだけど」

「お互い、相手には理解してもらえない経験をしたり、相手には隠しておきたいことができちゃうってことですか？」

「そうね。それも当たり前のことだと思っし、それであなた達が離れちゃっても仕方ないと思うのよ」

「僕達は離れませんよ。これから彰子さんのことが好きです。」

「変なこと言って悪かったわ。これからもよろしくね」

「こちらこそよろしく」

マリアは何が言いたかったのだろう。「関係が変わる」ってどういうことだ。関係ってのは相対的なもので、うーん、俺の彰子への気持ちは絶対的だとして。……絶対が1つだけとは限らない、か？絶対的なものAがある。もう1つの絶対的なものBが出てきた。そのときにAはBによって相対化されることもあり得る、よな。でも人間関係は相対化されるものばかりか？例えば、ある男にとって妻は誰よりも好きで、大切な、絶対的な存在だったと、少なくともそんな時期があったとする。で、子どもが生まれと、子どもは絶対的な存在になる。そのとき、男は自分の思いを妻と子どもに半分ずつ注ぐのか？いや、多分、思いは妻しかないときの2倍になってるよな。俺には妻も子もないからわからないけど。でも、それなら、離婚する夫婦なんていないよな。ましてや子どもがいれば。夫婦関係は絶対のうちに入らないのか。じゃ、親子関係はどうだ。これは絶対だろう。いつでもどこでも人は誰かの子だ。それは真実だ。相対化しようがない。でもなあ、子もいつか親になる。そうしたら、自分の親より自分の子だろう、普通は。新しい親子関係が古い親子関係を相対化していないか？してるよな。第一、彰子の父親だって、マリアに出会っちゃったから、それまでの夫婦関係はもちろん、親子関係まで相対化しちゃったんじゃないか。でも、親子関係は残るよな。この場合、関係が人間を絶対化してるよな。うーん、わかんない。ん？何より、俺の考えてることって、今の彰子

と俺の関係から思いつきりズレてないか？マリアは単に2人のことを心配してるだけだろ。だから、よけいに気になるんだよな。何がマリアを心配させるのか。恭子か。せつか。正直、2人とも好きだぜ。すごく魅力的だし。でもそれは俺と彰子の関係があつて初めて成り立つ「好き」であつて、ちよつと違う「好き」だ。え？また「関係」か。がーっ。体ばかり使つて頭は放つておいたから思考力がなくなつてゐる。でも、とにかく俺は彰子が好きなんだよ。

大学2年になる前の春休み 3月8日

今日も1日働いた。「現場」つてところにも慣れてきた。だが、俺の体は大丈夫だろうか。大体、腰が悪くて走るのやめた人間がするような仕事か。今気付いたけど。まあ、お金までもらえる激しいリハビリだと思えばいいか。

せつに電話した。マリアが俺と彰子の仲を心配してることを言う
と、

「馬鹿じゃない。あなたが恭子さんにばかり気を取られて、彰子のことほつたらかしにしているからでしょ」

厳しい言葉が返ってきた。

「でも、恭子は大学受験だったんだから、気を取られて当たり前だろう」

「それは彰子には関係ないことよ。妹さんのことだから、関係ないつて言うのも変だけど。とにかく、あなたと恭子さん見てて何か思うところがあつたんでしょ」

「勉強見ろつて言ってきたのはマリア本人だ。それに、恭子は彰子の妹だぜ。しっかり見てやつて当然だろ」

「ふうん。それならそれでいいんじゃない」

「全然よくなさそうな『いいんじゃない』だな」

「いいえ、いいわよ。お母様にしてみたら、あなたが長女とつき合

おうが、次女とつき合おうがどっちでも。いずれ義理の息子になるのはあなたで変わらないんだし。ただ、ちよつと家庭内がもめるくらいで」

「お前、話が無茶苦茶だよ」

「そう、無茶苦茶よ。だけど、お母様のおっしゃる『関係』ってほかに思いつかないんだけど」

「俺とせつとの関係じゃないか？」

「『無関係』っていう関係は気になさらないんじゃない？」

せつの声があまりにも冷静で困ってしまった。謝っておこう。

「はい、すみません」

「いい、彰子が好きなら彰子をみてなさい。ほかに好きな人がいるならその人のところに行きなさい」

「お前のところに行ってもいいか？」

また、要らぬことを言ってしまった。

「いいわよ。いつでも来てよ。その気があれば」

相変わらず冷静だ。怖いくらいに。

「やめとく。今まで通り彰子を見てる」

「それがいいわね」

「ありがとう。せつと話していると、何ていうか、こう、見通しがよくなるって言うか、元気になっちゃうんだよ」

「どういたしまして。とにかく、彰子が帰ってくればいいのよ。すつきりするわよ、どんな関係も」

大学2年になる前の春休み 3月26日

今日で「現場」のアルバイトが終わった。我ながらよく頑張ったものだ。事務所でアルバイト料を受け取った。二十日分で二十万円だ。税金分は引かれてたけど。だが、そばにいた現場監督が、「おまけだ」と、1万円もくれた。ありがたく受け取った。

「兄ちゃん、また、金が必要ときは来いよ。2度目からは日給も上

げてもらってやるよ」

ありがとうございます。

大学2年 4月7日

いつの間にか大学2年だ。俺はいつたい1年のときに何をしたんだろうか。何故か2度目の受験勉強はしたよな。単位も取った。それも人並み以上に。しかし、頭には何も残っていないような、それでも、ちよつとばかり偉くなったような。よくわかんない。今年は、はつきりわかるようになり偉くなってやるぜ。留学もするし。留学か、すでにずいぶん偉そうだ。

大学2年 5月10日

武道として柔道を履修した。空手や剣道の時間には他に履修しなければならぬ講義があったのだ。だが、やめておけば良かった。今回の履修者30人中、俺を含めて5人だけが初心者、残りは全員が有段者だったのだ。4月中は受身や基本的な型を教えてくれたが、5月の最初の授業、担当教官のひと言で地獄の時間が出現した。

「珍しいな、今年是有段者ばかりだな。教えることもない。やつぱり試合形式だな。そうだ、10連続勝ち抜きで単位を出すことにしよう」

体格のいい（どころではない、牛のような）奴等、しかも余裕の有段者を相手に勝てるわけがない。数名いる俺と同じくらいの体格の奴等も、高校ではそれなりに鳴らしていたらしい。そうなのだ、俺はそれとは知らずに、場違いなところに紛れ込んでしまっていたのだ。俺達、5人の素人は人気者だった。その中でも一番小さい俺はアイドルだった。俺と試合すれば確実に1勝があげられる。相手が俺と同じくらいの体格ならまだ粘れる。運が良けりゃ3分くらい

はもつ。しかし、牛を相手にどうしろと？襟をつかまれて力で転ばされて寝技で、ハイおしまい。上に100kgの奴に乗っかられてみる、下手すりゃ息ができない。100キロといえば10分の1トンだぜ。もちろん、100キロ以上の奴もいる。俺の体重の2倍だ。たまったもんじゃない。

全敗でも単位がでるんだろうか。

大学2年 6月14日

恭子が電話してきた。「今日ね、わたしにも彼らしい人ができたのよ」だそうだ。

恭子は恭子の大学生活を送り始めたのだ。

大学2年 6月17日

恭子が電話してきた。「今日ね、彼と別れたのよ」だそうだ。

恭子は恭子の大学生活を送っている、のだろうか。つき合い始めて3日目で別れるなんて荒業はちよつとできない。大丈夫かあいつは？心配になってきた。

大学2年 6月21日

梅雨だ。うつとうしい梅雨だ。

恭子に会った。ケロッとしている。

「お前、もう別れちゃったの？」

「うん」

「振られたのか？」

「うつん、振ったの」

「どうして？カッコイイ人だって喜んでたじゃないか」

「さあ、どうしてでしょう？わたしにもよくわかりませんねえ。あ

んまり好きじゃなかったみたい」

「変なの。まあ、落ち込んでもいないみたいだし、ちょっと安心した」

「落ち込んでるわよ」

「え？それでか？ずいぶん気分良さそうな落ち込みだな」

「・・・今年も梅雨真っ最中ね」

「雨で滅入っているのか？」

「うっん、雨が上がった後よ」

大学2年 7月1日

教育心理学のレポート、理科の教材研究、美術の作品提出、ピアノの演奏、視聴覚教材の作成、その他アレもコレも・・・忙しい。受験勉強してるときと変わらないくらい忙しい。これに教育実習が重なったらどうなるんだ？

大学2年 7月17日

家で野球のナイター中継を見ていると電話が鳴った。

「ただいま。今、家に着いたの」

彰子の声だ。

「お帰り」

後の言葉が続かない。本来俺が尋ねるべきことを、彰子の方から尋ねてくる。

「元気だった？」

「ああ。彰子は？」

「元気よ」

「良かった」

「家に来る？」

「いや、今日は彰子も疲れてるだろうから。明日の午後行ってもい

いか？」

「うん、待ってる」

「それじゃ」

俺の中では、今日は正月よりおめでたい日だ。

大学2年 7月18日

彰子の顔を見たら、関係がどうのこうのとグジグジ考えてたことが馬鹿らしくなってくる。いちいち確かめなくてもわかった。離れていても、2人の思いは変わっていない。関係も変わっていない。

彰子はイギリスの話をいっぱいしてくれた。写真もいっぱい見せてくれた。俺も日本でのことを色々話した。マリアも恭子も色々話した。

図々しく夕食をこちそうになり、夜9時過ぎに香山家を出た。彰子と一緒に来た。公園でブランコに腰掛けて2人の話をした。

「ねえ、正直に言うわよ。わたしね、向こうにいてもそれほど寂しくなかったの。行く前は、絶対に寂しいって思ってたのにね。ヒロシは？」

「そう言えばそうかも。まあ、恭子の受験とか、自分の留学準備で忙しかったってのもあるけど。少なくとも寂しくて泣いたことはないな」

「わたしはね、会いたい、声を聞きたいとは思ってたわよ。毎日のように。でも、寂しいのとはちょっと違うのよ。何か、どこかで安心なのよ。わたしがそうだと思うことはヒロシも多分そうだと思う、ヒロシが違うと思うことは多分わたしも違うと思う、そういう安心感がね、あるの。離れててもそれがよくわかった。価値観が一緒なのかな？」

「価値観とは違うと思うよ。例えば、俺が気に入ってるスニーカーだって、彰子は『汚い』のひと言で済ませちゃったりするだろ。」

「ただ、そんなことどうでもいい」

「そうよね、言葉にする以前にもうわかつちゃってる」

「うん、自分じゃないのに彰子の考えがわかつちゃうんだよね。一瞬で」

「そうそう、ヒロシの考えが、フツと飲み込めちゃうの」

「俺達は似た者同士なのかな？」

「ううん、どちらかと言うと同じ人みたい。ヒロシはちょっと変わってるわたし。わたしはちょっとまともなヒロシ」

「お前、今、さりげなくひどいこと言わなかった？」

「言ったかも。でも、わたしの考えがわかつちゃうんでしょ？」

「今のはわかんない。わかりたくない」

「あーあ、ついにケンカだ」

「俺が日本にいる間に仲直りしような」

「うん」

「それじゃ、俺、帰るわ」

「気をつけてね」

「お前こそ、家まで送ってやろうか？」

「いいわよ。何かあったら大声出すから」

「じゃ、5分ほどここにいろよ。その間に彰子の声が聞こえなかったら帰る」

「うん、お休み」

「お休み」

1人、ブランコに腰掛けて、ゆったりと流れる安心感、一体感に包まれていた。俺がアメリカに行っても俺達はやっぱり俺達なんだろうなあ。また、1年後、同じように彰子といるんだろうなあ。

何故か、俺達がつき合い始めた日、彰子が言った言葉を思い出した。

「わたし達、どうして出会ったのかなあ？」

出会ったと言うより、還ったのだ。お互いが、お互いへと還って

いったのだ。そんな風に思っていた。

第4章　あゝ夏の夏

大学2年　7月21日

書店でせつと出会った。恋人とおぼしき男と一緒にだった。

「久しぶり」

「ホント、久しぶりね。あ、こちらは本庄さん、同じ大学の同級生。これは岸和田君、彰子の彼よ」

向こうは「こちら」で「さん」、俺は「これ」で「君」。えらく差をつけられたものだ。しかし、この本庄さん、同級生とは思えぬ風格がある。つい「さん付け」してしまう。同級生っていうだけで年齢は上なのだろうか？

「こんにちは。岸和田浩です」

「こんにちは。本庄マサトです」

しばらく間の抜けたことを話した後、その場を離れた。

「ちょっと、ヒロシ」

せつが後ろから歩み寄って来た。

「いいのかよ、本庄さん待たせて」

「いいのよ。それより、彰子とはどう？」

「うまくいってるよ」

「彰子は4日前に帰って来たばかりでしょ。本当に大丈夫なの？」

「ああ、何の問題もない」

「それならいいけど。でも、今度はヒロシがアメリカでしょ。何かありそうで心配なのよ」

「俺達は大丈夫だから。ほら、本庄さんが待ってるよ」

「いいってば、とりあえずつき合ってるだけの人だから」

「とりあえずって……。恭子といい、せつといい、男はお人形さんとは違うんだぜ。真剣につき合えなんて言うつもりはないけど、『とりあえず』はないんじゃないか？」

「あら、恭子さんも『とりあえず』派なの？」

「いいよ、恭子のことは」

「わたしのこともいいわよ。じゃ、行くわね。あ、ヒロシ、送別会してあげるね。『とりあえず』も連れて行くから、一緒に飲みましょ」

どうなっただ？せつ一流のジョークも入っているんだろうが、『とりあえず』は本庄さんに失礼だろう。「これ」「君」より失礼だ。

だが、せつは俺達のこととは心配して色々言ってくれるが、自分のことはあまり教えてくれない。恋人ができたんなら教えてくれりゃいいのに。

大学2年 7月23日

彰子と海に行った。2人で海に行くのは初めてだった。また、来年、俺が帰ってきたら来ようと約束した。

帰りの車中、彰子が言った。

「恭子も連れてくれば良かったわ」

「なぜ？」

「しばらくヒロシと会えなくて可哀想だから」

「おかしいこと言うなよ」

「わかるのよ、妹だから……」

大学2年 8月2日

約束通り、せつが送別会を開いてくれた。彰子、安達、本庄さんも一緒だった。俺と安達が一緒に酒を飲むとひどいことになる。彰子とせつは毎度のことだから驚きもせず、一緒になって喜んでいたが、本庄さんは最初びっくりしていた。しかし、すぐに馴染んで、いや、汚染されてきた。

会は2軒でお開きとなった。せつが俺を呼んだ。

「ありがとう」

「何言つてんだ。俺がお礼言わなきゃならないのに。ありがとう。楽しかったよ」

「うっん、本庄も、世の中にはこんな人達もいるんだって、ちょっとはわかったんじゃないかな」

「『こんな人達』なのか、俺達は？」

「まあね。元気でね。勉強はともかく、無事に帰って来てね」

「おう、行ってくる。せつも元気でな」

「ええ、それじゃあね、ヒロシ」

せつは本庄さんと歩き出した。

俺は彰子と安達と3人でもう1軒行った。が、終電を逃し歩いて帰るハメになった。

大学2年 8月9日

明日はいよいよ日本を発つ。大した量ではなかったが貴重品以外はまだアメリカに送っている。かばん1つで出発だ。正直、不安もあるが、期待の方が大きい。

彰子と昼ごはんを食べた。

「見送りには行かないわよ。泣いちゃいそうだから」

「そっぴゃ、お前、去年泣いたよな」

「来ないでって言つたのに来るんだもの」

「だが、俺達みたいに1年ずつどっちかがいなくなるってのも珍しいよな」

「ホントね、その前は受験勉強で3か月ほど会わなかったわ」

「ごめんな」

「いいのよ。ちゃんと帰って来てね」

夕方、母親がいつにないごちそうを作ってくれた。父親が何も言

わずにコニヤツクの封を切ってくれた。心配ばかりかけて済まない金ばかりかかって悪いな。いつか、氣と運が向いたら親孝行してやるぜ。

ありがとう。

夜中、自転車で香山家に行った。体に当たる風が心地よかった。さすがに香山家に着く頃には汗ばんでいたが。彰子の部屋にも恭子の部屋にも灯りがついていた。何をするというわけでもなく、ただ見ていた。

いつの間にか口笛を吹いていた。SING LIKE TALKINGというグループの「きつと 一つの日か」という歌だ。恋人を残して遠くに行く男の気持ちを歌ったものだ。柄にもなくはまってしまった。想像（空想、いや妄想か）の中では、俺も絵になっっているんだけどなあ。

玄関のドアが開いて、彰子が出て来た。びっくりした。ジーンズにポロシャツ姿だった。

「やっぱりヒロシだ。口笛が聞こえたから」

「おう、よく気付いたな」

「気付くわよ、わたしは。それに、絶対来ると思ってたから、ほら、散歩の格好。歩こう」

自転車を置いて、彰子と並んで歩いた。

「ねえ、口笛で何を吹いてたの」

「『きつと 一つの日か』っていう歌。結構今の心境に合ってたから、何となくな」

「どんな歌？歌ってよ」

「ちよつと勘弁してくれ。俺が行ってからCDでも聞けよ。安達が持つてる」

「ふーん。じゃ、楽しみにしておくわ。ヒロシの今の心境ね」

最初は色んなことを話しながら歩いた。でも、いつの間にか、何も言わずにただ2人でゆっくり歩いていた。そして、また、香山家

が目の前に……。もう1度、2人が離ればなれになる時がやってきたんだ。

「妹や母に会って行く？まだ起きてるわよ」

「いや、いい」

「どうして、2人とも喜ぶわよ」

会いたい、とも思ったが、やめた。彰子だけでいい。

「出発の前の夜、最後の夜に会うのはお前だけでいい」

彰子の目に涙が光った。俺は彰子を引き寄せた。彰子がどこかに行ってしまうそうだった。行くのは俺なのに。ついこの前まで一体感に包まれていたのに。

「どこにも行くな」

「行かないわ」

キスをした。彰子の唇が離れた。

「ねえ、何て言って欲しい？」

「何でもいい、お前の声なら」

「いっぱいあって決められない」

「じゃ、何も言うな」

また、唇を合わせた。そして、また、唇が離れた。

「決めたわ」

「何？」

じつと見つめ合った。

「愛してる」

その夜3回目のキスをした。つき合い始めてから、一番長いキスだった。

大学2年 8月10日

あれほど来るなと言ったのに、空港まで安達がついて来た。

「俺だけかよ。いくら何でも寂しすぎるぜ」

「いいんだよ。来られても困る」

「とか、言つて、内心、彰子ちゃんには来て欲しかったんだろう」
「いや」

「正直になれよ」

「正直だよ、俺は」

「お前、どうせアメリカで浮気するんだろう？日本を離れるその瞬間までは、うそでもいいから『彰子がいなくて寂しいよ』くらいのことは言えよ」

「大きなお世話だ。それに俺は浮気はしない」

「『俺はいつでもどこでも本気だぜ』って？」

「うるさいんだよ。だから来るなつて言つたんだよ」

「照れるなよ。俺とお前の仲じゃないか」

「はいはい、ありがと。じゃ、ここでね、仲良しの安達君」

「仲良しの岸和田君、これを預かってまいりました」

「何だよ？」

「彰子ちゃんからだ」

銀の十字架だった。彰子、ありがとう。

「愛は宗教を越える、よな。この幸せ者が！それと、これ」

一枚の便箋だった。「顔くらい見せる。明日から日本はまた鎖国するんだからね。帰ってくるな。もし帰る気なら無事でいてね。馬鹿！」と乱暴な字で書いてあった。

「何だこりゃ。ここまで見事につじつまが合わない文章も珍しい」

「誰だかわかるか？」

「字を見りゃわかる」

「今朝、その十字架を預かるときに、彰子ちゃんの横で書き殴つたよ。なかなかの名文だと思うぜ……。じゃ、ちゃんと渡したからな」

「お礼を言っておいてくれ。わざわざご苦労だったな、メッセンジャー安達」

「来たくて来たんだよ。誤解するな」
「言ってくるわ」

「おう、元気でな」

しばらくはお別れだ、日本。そして、……………。

アメリカ留学 8月10日

アメリカはロサンゼルスに到着。

ここで俺の新たな人生が始まる。のはいいんだけど、この人達、いったい何語しゃべってるんだ？英語か？英語だろうな、ここはアメリカなんだから。こりゃ、下手に英語を話すより、身振り手振りを交えて日本語でわめいたほうが絶対に意思が伝わるぜ。イヤになるなあ。

何とか入国手続きを済ませて、大学に行き、予定通りコーディネーターに会えた。ひと安心。

アメリカ留学 9月5日

アメリカに着いたときは、周りが何て言ってるかわかんなかった。と言うより、みんな雑音を発していると思えなかったけれど、慣れると一応言葉に聞こえるから不思議なものだ。

でも、初めての授業は半分以上が雑音のままだった。まずいかも知れない。

アメリカ留学 9月9日

英語が母語ではない留学生向けの集中語学研修が厳しい厳しい。一般的な学術用語、学部ごとの専門用語が現れては消え、講師の叱責が乱れ飛ぶ。第二次世界大戦中に使ってたという「鬼畜米英」って言葉が頭の中に浮かぶくらい、これでもかと鍛えてくれる。おかげで雑音がなくなってきたけど。

アメリカ留学 9月19日

国が大きいと人までおおらかになるものなのか。概しておおらかだ。良い意味でも悪い意味でもおおらかだ。

だが、みんな真面目に勉強するよな。もっとおおらかになれよ。この国では、勉強におおらかな奴は大学なんか来ないのかも。

アメリカ留学 10月2日

面白い奴がいた。講義中にやたら熱心にノートを取っているのだ。教授の話にうなずいたり、相づちを打ったりしながらも手は動き続けている。すごい熱心な奴がいるもんだと、ノートをそつと覗いてみた。何と「ドラえもん」の絵が描いてあった。彼は、その絵に色をつけている。つまり、塗り絵だ。

講義の後、彼に声をかけてみた。

「『ドラえもん』、上手に塗れたかい？」

「ああ」

「でも、どうして『ドラえもん』なんだい？」

「日本文化じゃないか」

これがBrian Ross ブライアン・ロスレア Slareとの出会いだった。

アメリカ留学 10月4日

「ちょっと『お茶』しに行こう」

ブライアンが日本語で話しかけてきた。びっくりしたがそのままついでに行った。すると、カフェの前を通り過ぎて、キャンパスの隅にある建物に入って行った。中の1室が和室、しかも茶室になっていた。自分の家みたいに、ブライアンはお茶の道具を引っ張り出した。

「お茶の用意をするから、ヒロシは花を飾ってくれよ」

床の間の前の花器と花を指差した。幼いときに一応母親に教えてもらった（無理矢理仕込まれた）から、「お茶」も「お花」もひと通りこなせはするが、人様に披露できるようなものではない。しかし、この状況では花を生けないとまずいよな。見たこともない花だけど。何とか体裁を整えて床の間に飾ると、ブライアンが座れと言う。

「僕は『裏』なんだけど、ヒロシの流儀で楽しんでもくれればいいから」

「僕も『裏』なんだ。『裏』しか知らない」

ブライアンは慣れた手つきでお茶をたててくれた。

「結構な御点前でした」

お茶を飲み終え、そう言うと、ブライアンは嬉しそうに言った。

「お粗末さまでした。でも、ヒロシ、結構日本人だね」

このアイルランド系アメリカ人に、日本人であることを褒められてしまった。どうやら、俺は彼の試験に合格したらしい。

ブライアンは大の日本好きで、「茶道」「華道」のほかに「剣道」も習っているという。理想は「風流を解する武士」だというから恐れ入る。俺はブライアンにわかる限り日本について教えるという約束をさせられた。彼も俺の留学生生活ができる限りサポートしてくれると言う。

アメリカ留学 10月10日

英語がある程度理解できて使えるようになったら、調子がいいこと、いいこと。勉強だけじゃなく体の調子もいい。

アメリカ留学 11月18日

ブライアンが冬の休暇を利用して旅に出ようと誘ってきた。 格安

のチケットが手に入るから、とりあえずインドに行くことにした。

アメリカ留学 12月15日

いま、インドのベナレスにいる。ガンジス川がでか過ぎる。日本のみみっちい川とは違う。そりゃ、こんな川にずっと接してりゃ、ガンジス川並みの思想が生まれても何の不思議もない。

だが、旅行者を狙うみみっちい犯罪が多発してるのはどういふことだ？

アメリカ留学 12月21日

今、イスラエルのエルサレムにいる。1人で。

インドからの移動に俺はバスを使うことにした。それが一番安いのだ。でも、途中にはイランがある。日本人の俺は問題ないが、イランの「敵国人」のブライアンは無理だ。エルサレムで落ち合うことにして、ひとまず別れた。エルサレムに着き約束のホテルに行ったが、ブライアンはまだチェックインしていない。何かあったのだろうか。

アメリカ留学 12月23日

やっとブライアント合流。船で来たという。そりゃ遅くなるよ。予定変更、面白そうなのでしばらくイスラエルに滞在することした。宗教について真面目に考えた。色々な宗教の人の話を聞くことができた。

アメリカ留学 12月25日

宗教や国家そのものを基準に考えると、日本人ってのは情けない

ものだ。語る言葉がない。もしかして、日本はまだ独立すらしてないんじゃないかと思えるほどだ。今の日本は他の多くの国々とは違い、独立を「戦って獲得」したわけじゃない。独立を「何かの拍子に与えられた」のだ。そして、その独立は「守るもの」でもなければ「守ろうという意志」に支えられたものでもない。自分の国をけなしすぎだろうか。

アメリカ留学 12月26日

ブライアンがイスタンブールに行きたいと駄々をこねる。でも、イスラエルでの滞在が予定より長くなり金が心配だ。仕方ないので非常用にとこっそり持ってきた日本の某メーカーの寿司の「素」に活躍してもらおう。ご飯に混ぜるだけってヤツだ。市場で米と適当な具材、安い皿を買い、炊いたご飯に「素」を混ぜ、いい加減な具をのせた「ちらし寿司」の完成。皿に盛って、市場の端っこで売った。物珍しさもあってか、意外と売れた。いいよな、寿司の味がわかんない人々に寿司を売るっていうのも。”Japanese best food”なんて言いながら、具にオレンジや名前も知らない魚がのつてるんだから大した寿司だ。でも稼がせてもらった。まだ、おにぎりの「素」もあるし、その気になれば稼げるぞ、こりゃ。

アメリカ留学 12月29日

ボスポラス海峡を渡ってイスタンブールに到着。新年はここで迎えることになる。

アメリカ留学 1月1日

明けましておめでとう。

イスタンブールも面白い。はまってしまった。様々な人種、民族がいて互いにうまくやっているのだ。少なくとも俺の目にはそう映った。各々が個性を主張し合っているのだが、それが独特の活気を生み出していた。俺も日本民族の個性を発揮しよう。

アメリカ留学 1月18日

予定よりずいぶん遅れてアメリカに帰った。

大学の休暇はとづくに終わっていた。当然、授業は始まっていて、その間のレポートや、ちょこちょこ実施される試験等、全てパス。「留学生の分際でいい度胸してる」と、担当の、白人なのに何故かこのときは真つ赤な顔してた教官にお褒めの言葉をいただいた。

そりやそうだ。イスタンブールでひと儲けして余裕ができて、調子に乗って南アフリカ共和国まで行ったんだから。

喜望峰やアガラス岬はとにかく雄大で美しかった。なんせ、大西洋とインド洋が接してるんだから。アパルトヘイトの影響など、考えさせられることも多かったが気に入った。新婚旅行はできることなら南アフリカ共和国に行きたい。

いつになるかわかんない新婚旅行の前に、大学の課題をこなさなきゃならない。また「いい度胸だ」と言われてしまう。「度胸」だけでは認めてもらえない現実がある。当分勉強漬けだ。ブライアンはすでに留年を覚悟していた。

アメリカ留学 3月15日

ヒエー。勉強、勉強で毎日が過ぎていく。受験勉強の方がまだ好きになれる。

アメリカ留学 4月28日

彰子の言ってた「居場所」ってヤツが俺にもわかってきた。だが、この「居場所」にいられるのもあと2か月余りだ。無駄にはしない。

アメリカ留学 6月11日

ブライアンと別れる日が近付いている。

「ヒロシ、ずっとアメリカにいるよ。大学生じゃなくてもいいだろう。仕事なら何とか世話するよ。こっちでヒロシの子どもができれば、アメリカ人の父親だ。市民権だつてもらえる。そうだ、アメリカ人と結婚しろよ。ずっといろよ」

ブライアンは本気で言っていた。本当にいい奴だ。

アメリカ留学 7月6日

ブライアンとお互いの国のことを話した。過激だけど、本音も話した。

「ブライアン、アメリカ合衆国にはすごいところもいっぱいあった。だけど、自分達の価値観が世界の価値観だと思ってる。まあ、世界の中でそれだけのことをしているんだろうけど。そして、世界中どこもかしこも『アメリカ』にしようとする。それだけの力もあるんだろうけど。俺の偏見かな」

「そうかもな。でも実際『強い』。いいところも悪いところもその『強さ』なんだよ。ヒロシ、日本はいい国だよ。でも『弱い』。アメリカが飲み込みに行くよ。アメリカだけじゃない。中国や韓国、北朝鮮、ヨーロッパの国々、イスラムの国々、色んな国が、お前の国は簡単に落とせると思ってる」

「ああ、そうだろう。だけど、どうせならアメリカの州の1つにな

りたいよ」

「何言い出すんだよ」

「そうしたら、その16年後には黄色人種が合衆国の大統領してる。もしかしたら岸和田って奴が。東京が合衆国の首都だ」

こんなこと言えば普通のアメリカ人なら怒るだろう。少なくとも不快な顔をする。だが、ブライアンは違う。

「ヒロシ、アメリカはそんなにヤワじゃないよ。だけど、アメリカに喧嘩売ってるみたいだな。買うよ」

こう言って笑う。

「でも、ヒロシ、僕はアメリカが好きだ。ひどい犯罪が起きても、貧富の差が激しくても、時には弱い国をいじめても、ヒロシに嫌われようとね。努力してでもアメリカを好きでいるよ。いいところもあるし」

「お前がそこまで言うんだから、アメリカってやっぱりいい国なのかな」

「そうかもな。ヒロシは日本が好きかい？」

「ああ、好きだ」

「弱くて、甘い国でもか？」

「ああ、好きだ。何しろ、好きな女がいる国なんだから」

「じゃ、やっぱり、アメリカ人とは結婚しないんだな」

「ああ、俺は日本人でいるよ」

「ブライアンこそ、日本人と結婚しろよ」

「それいいね。誰か紹介してよ。でも『大和撫子』だよ。なにしろ、僕は『侍』なんだから」

「今の日本に『大和撫子』はめったにいないよ」

「そう？ つい半世紀前はそんな人達ばかりだったんじゃないか。アメリカに戦争ふっかけてくるくらいなんだから」

「違う、と思うけど……」

アメリカ、悔しいほど大きくて強い国だった。その悔しさが心の底からアメリカを好きになれない理由なんだろうな。小さくて弱い

国の民の齒ぎしりか。

でも、アメリカ人は好きだ。ブライアンも好きだ。

アメリカ留学　7月13日

ついにアメリカを去る。色んなことを教えてくれた。色んな経験をさせてくれた。そして、ブライアンに会わせてくれた。本当にありがとう、アメリカ合衆国。いつかまた来る。次は本当に喧嘩を売りに来るからな。首を洗って待ってる。

空港までブライアンが見送りに来てくれた。

「ブライアン、ありがとう。楽しかった。また来るよ」

「ああ、待ってる。僕もいつか日本に行くよ。『大和撫子』をいっぱい用意して待っていてくれ」

「何とか揃えておくよ」

「ヒロシ、会えて良かった。寂しくなるよ」

「俺もだ。でも、また一緒に色んなことができるよ」

「ああ、僕もそう思う」

俺達はガシツと抱き合った。

チェックインの時間が来た。

「じゃ、行くよ」

「ああ、元気で。My Brother」

10歩ほど歩いて振り返ると、ブライアンが大げさにお辞儀をしてきた。この野郎！俺もブライアンに向かって、思いつきり投げキスをしてやった。ブライアンは両手を広げて呆れたように笑った。俺は右手の親指と人差し指でピストルを作り、ブライアンに向かって撃つ真似をした。ブライアンは右手で作った拳を左腰にあて、そのまま、右斜め前方に動かして構えた。その後、バットを握るように右手の拳の下に左手の拳を添えた。そして、大上段に構えてから振り下ろした。そうだ、日本刀で俺を斬ったのだ。俺達は、互いが見えなくなるまで撃つ、斬る、の殺し合いをしていた。

さよなら、アメリカ。さよなら、ブライアン。

大学3年 7月13日

帰ってきた。自分の国だ。大好きな、大切な人達がいる国だ。父、母、姉、弟、せつ、マリア、恭子、その他、あ、安達もいたよ。（ま、安達はその他に含もう）そして、彰子。

大学3年 7月14日

昨日は帰国の報告を色々な人にした後、疲れてすぐ寝てしまった。お昼前、彰子が来た。母が寿司を取ってくれたので、3人で食べながら話をした。彰子と母は2人で、俺が留守にしていた間のこちらでの出来事を楽しそうに話して聞かせてくれた。まるで親子のようだった。全然顔は似ていないけど。

昼食後、彰子と一緒に、ちょっとだけ高い丘の上にある寺に行った。

「ここにはよく来るの」

「たまにね。時間があるときは散歩がてら」

「散歩って言うには少しハードね。ハイキングよ」

「だが、景色がいいだろう。街と海が見渡せる」

しばらく眼下に広がる景色を眺めていた。天気が良かったので、街の向こうに見える海の青も鮮やかだった。彰子が口を開いた。

「ヒロシ、お帰り」

「ただいま、彰子。十字架ありがとう。おかげで悪魔の誘惑に勝てた」

「どんな悪魔だったのかしらねえ。小悪魔ってモノかしら？」
話題を変えねば。

「さあねえ。でも、寺と十字架は合いそうにないな」

話は尽きなかった。離れていた時間などなかったかのように、いつでも一緒だったかのように、俺と彰子はそこにいた。埋めなければならぬものなど1つもなかった。それがかえって奇異に感じられるほどだった。

大学3年 7月15日

彰子と買い物に出かけた。久しぶりの街の様子が知りたかった。

「やっと、2人の時間がそろったね」

「時間だけはたっぷりあるわね。これからどう使おうか？」

「ねえ、今度は2人で外国に行こう。どこがいいかな？」

彰子は歩きながら嬉しそうにあれこれ話しかけてきた。いささか答えに窮するものもあったが、本当に嬉しそうだった。

大学3年 7月16日

大学へ行った。景山教授に呼び出されたのだ。

「岸和田君、率直に言うけど、ずいぶん楽しんだみたいだね」

「はい、すみません」

「いや、いいんだよ。君に、例えば、合衆国の教育制度や、家庭教育と学校教育の関係か何かを学んで欲しいっていつでもねえ。無理だろ？」

「はい。よくご存知ですね」

「・・・ま、それより、色んな人に出会い、色んな経験をする、そのことの方が大切なんだよ。君も実際にそう思うだろ」

「はい、そう思います」

「結構。じゃ、後期から死ぬ気で単位を取れば大丈夫かな。いずれ何とか卒業できるよ。できれば中退はしない方がいいからね」

大学3年 7月19日

安達と久しぶりに飲んだ。馬鹿話をして、馬鹿なことをして、気分が良かった。

駅に向かって歩いていると、安達が立ち止まった。

「おい、あれ。恭子ちゃんだろ」

恭子が男と歩いていた。安達が言った。

「彼かな？」

「さあ、1年会ってなかったからな。よくわかんないけど彼くらいはいるだろ」

「けどよ、お前が向こうにいるときに彰子ちゃんが言ってた。『恭子は色んな人とつき合うけど長続きしない』って」

「大学に入って最初の彼と3日で別れたのは知ってるけど、それからずっとそんなことしてたのか。何でだろ」

「具体的なことは知らないよ。彰子ちゃん、お前には話さなかったのか？」

「ああ」

「そうか。お前に言ってもな、何の解決にもならないよな」

大学3年 7月20日

「ゆうべ見たぞ。男と歩いてたろう。彼か？」

恭子に尋ねた。誰と歩こうが俺の知ったことじゃないが、安達が言ったことが引っかかっていた。

「ゆうべまではね」

「ゆうべまではって。お前、この1年でいったい何人彼がいたんだよ？」

「さあね、20人くらい」

「ちよつと多くないかい？」

「じゃ、ゼロ」

「は？」

「誰も好きじゃないのよ」

「じゃ、つき合うなよ」

「つき合ってるつもりはないけど、周りがそう言うから、知らないうちにいつの間にか『彼』ってことになっちゃうのよ。大体『つき合うな』なんて言われる筋合いはありません。それこそ『彼』でもないくせに」

「ああ、そうだな。ごめんなさいね、お節介で」

知るか。やたらと腹が立った。

大学3年 7月26日

恭子のことかどうも気にかかる。電話をした。

「おい、どこか行こうぜ。海か、山か、遊園地か、動物園か。テニスでもするか？」

「海。泳がないけど」

「わかった。明日朝8時、お前の家の近くの公園で待ってる」

「早いわねえ」

「遅いくらいさ。渋滞に巻き込まれるぞ。ぶうぶう言うなよ」
「うん」

大学3年 7月27日

やっぱり渋滞に捕まった。世の人々よ、俺がめつたにしない遠出をする日くらい車に乗らないでくれよ。せめて金持ってる奴は今日くらい有料道路使えよ。サイドブレーキを何度も引いたり戻したりしながら恭子と話す。

「恭子、言いたくないけど、好きでもない男とつき合ってどうすんだ？」

「だから、つき合ってるつもりはないのよ。ただ、ちょっと仲がいいだけ」

「男は単純だから、それでもうつき合ってる気になるんだよ」
「『つき合う』って、わたし、友達くらいにしか思っただけなのに。」
「男友達は1週間もたてば恋人に変わっちゃうわけ？馬鹿じゃないの」
「男はみんな単純馬鹿なの」
「ありもしない恋愛なのに。雇気楼を見てみたいね」
「お前よ、本気で好きになった男はいないのかよ」
「いるわよ」
「そいつとは何で別れたんだよ？」
「その人とは『雇気楼』すらないの。その人には恋人がいるから」
「なんだよ、結局片思いか。でも、それじゃ仕方ないよな。別なの見つけないきゃ」
「それが大変なのよ」
「そいつは忘れられないほどいい男なのか？」
「別に。普通の人」
「わかんないな。お前に言い寄ってくる連中の中にもいい男はいるだろ。さっさと切り替えるよ」
「無理よ。忘れられない」
「じゃ、そいつに正直に気持ちを伝えろよ。振られたらあきらめがつくだろう」
「できるくらいならもうとくにしてるわよ」
「じゃ、きっぱり思いを断ち切れ。また、本気で好きな男が現れるまで待つしかない」
「そうね、頭ではわかってるんだけど。あーあ、どっちか死んじやわないかな」
「穏やかじゃないな。その、どっちかって、好きな男かその彼女がつてこと？」
「うん。その男が死ねば本当にあきらめがつくし、女の方が死ねばわたしにもチャンスが巡ってくる」
「こわいねえ」
「女はそれくらいのこと平気で考えるのよ」

「恭子だけだろ」

「どうだか。姉さんだつてわかんないわよ」

「彰子はいつたい誰に死んで欲しいんだ？」

「さあね、3人くらいいるんじゃない、ヒロシのほかに」

「何で俺が死ななきゃならないんだ？」

「姉さんだけのヒロシが心の中にずっと生き続けるから」

「文学的過ぎて喉が卡くなってきた。そんな愚かな願いは絶対に聞いてやらない。もし、俺が死んでもさっさと次の男見つけるように言つてこつ」

「……でも、本当はどっちにも死んで欲しくない。その人にも、彼女にも」

「わかつたよ。もう、いいつて。お前が割と普通の人で安心したよ。病的に色んな人とつき合つてるんじゃないかつて、本気で心配してた。だが、男の勘違いは恐いぞ。気をつける。勘違いさせないのも女の実力だぞ」

「ありがとう。気をつける」

海に着いたのは10時頃だった。砂浜はすごい数の人だった。人を見ていても仕方ないので、人はちよつとは少ない岩場に行つて、時間は早いが恭子がつつて持つて来てくれた昼食を食べた。その後、帰るまでには醒めるだろうと、ビールを飲んだ。恭子も飲んだ。「頼むからジュースにしてくれ」と言つたのにビールを飲んだ。しばらくはおとなしかったが、海に突き出した防波堤を歩いているとき、いきなり人格が変わつた。

「わたしは泳がないけどお、せつかく海まで来たんだからあ、ヒロシは泳いでいいのにい。わたしに遠慮しないで、ほらあ」

笑顔で俺を防波堤から突き落とした。すぐ下が海水で良かった。テトラポットや岩、コンクリートだったら怪我してるぜ。防波堤の上でケタケタ笑っている恭子。本当にこいつは苦しい恋に悩んでいるのだろうか？

防波堤に上がり、寝転がって服を乾かした。

太陽はどこにもかしこにも降り注いでいる。仰向けになれば視界いっぱい青い空、白い雲、鳥まで飛んでる。うつ伏せになれば、視線の先に青い海、水平線、船まで浮かんでる。時折風が吹いてくる。夏だ。これ以上はないほどの夏だ。

恭子は俺の隣に座り、どこか遠くを見ている。さつきとは別人だ。白い帽子から黒髪がこぼれて風に揺れてる。

「恭子、お前、そうしてりやいい女だな」

「今頃気付いたの？」

お互い顔は見ずに話した。

「いい女なんだから、焦るな。絶対いい男が見つかる。もしかしたら、お前の好きな男もいつか振り向くかもな」

「ヒロシなら振り向く？」

「ああ。言っただろ、男は単純馬鹿だって。いい女には弱い」

「その人は単純馬鹿じゃないわよ」

「それなら、尚更、お前の良さに気付くさ」

「あーあ、こうしていると気持ちいい。ずーっとこうしていたい」

「うん、気持ちいい」

「こんなに長く話したの久しぶりね」

「そうだな、俺もこっちにいなかったしな。何も解決するわけじゃないけど、話ならいくらでも聞くよ」

「いいのよ。ありがとう。わたし、決めたから」

「どう決めたんだ」

「片想いを続ける」

「つらくないか？」

「つらいけど、時々嬉しいこともあると思うし。そのうち、何とも思わなくなる日が来るわよ。それまでは今のままでいいわ」

「そうか」

夕日を見てから帰った。恭子は帰りの車中でうとうとしている。

こうしておとなしくしてりや天使みたいなのに、どこがどうなると世話を焼かせてくれるんだろうか。酒を飲んだら悪魔になるのはわかってるが。でも、何故か放っておけないのだ。彰子が俺に心配をかけることは全くない。どちらかと言えば俺が心配させてる。姉妹でこうも違うものなのか、姉妹だからこそ違うのか。

大学3年 8月12日

「ねえ、あの口紅の色、良くない？」

彰子がどこかの化粧品メーカーのポスターを指しながら聞いてきた。

「俺は化粧品はよくわからないからなあ。口紅って大体赤じゃないのか？」

「赤だけじゃないわよ。ピンクとか、紫とか、オレンジとか、いっぱいあるのよ。でね、例えば同じ赤でも微妙に違う色がこれまたいっぱい。その中から自分に似合う色を見つけるのって結構大変なのよ」

「女は色々と苦労するんだな」

「そうよ。苦労って言うより努力だけだ」

大学3年 8月15日

ブライアンから旅行中に撮ったビデオテープが届いた。きちんと編集してあった。その中でも、特に印象深かった南アフリカ共和国のビデオを見ながら、彰子にたくさん話を話した。新婚旅行で行きたいと言わなかったが。

「……………で、すごく綺麗なんだよ。俺が今までで一番感動した風景なんだよ。ビデオじゃこれくらいだけど、実際はもっともつとスゴイ。自分の目で見なくちゃわからないよ。絶対見に行こうな。彰子も感動するって」

「行き先が決まったわね。今度は絶対2人で一緒に行きましょね。約束よ」

大学3年 8月17日

デパートの化粧品売り場に決死の覚悟で足を踏み入れ、この前彰子が言っていた口紅を買った。少し落ち着いた感じの、赤ワインのような色だった。

大学3年 8月18日

彰子、が、死んだ。

何が「2人の時間がそろった」だ。何が「時間だけはたつぷりある」だ。何が「約束」だ。うそじゃないかよ。

彰子。

大学3年 8月19日

交通事故だった。彰子は明け方、散歩に行くと言って家を出た。そして、横断歩道を渡っているときに自動車にはねられたのだ。事故を目撃した人が彰子に走り寄って行ったときには、もうこの世にいなかったという。運転していた男は居眠りをしていたらしい。

ありふれた言葉だが、心には何もなかった。ポツカリと、本当にポツカリと穴があいていた。

朝、香山家に行った。マリアはもう教会へ行っていた。恭子はいた。2年前のクリスマス・イブに2人で歩いた道をまた同じように2人で教会へ向かった。しかし、今日は2人とも黙っていた。恭子はずっと下を向いていた。

教会に着いた。マリアのところに行って挨拶だけはしたが、その後、どう話を続けられれば良いかわからずに口ごもっていると、

「彰子に会ってやって」

マリアの方から言ってくれた。

棺に眠る彰子に会わせてくれた。白い花がいっぱい入っていた。花に囲まれた、美しい、可愛い寝顔だった。少し微笑んでいるように見えた。いつもの彰子だった。いつ起きて「お早う」と言ってくれるのだろうか。ポケットからまだ渡していない口紅を取り出した。俺には上手に塗ってやる事ができない。マリアに頼んで、彰子の白い唇に塗ってもらった。彰子の顔によく似合う色だった。マリアが口紅を差し出した。受け取って棺の中に入れた。彰子の頬に触れてみた。冷たかった。その冷たさが「わたしはもう起きないのよ」と語っていた。胸のところで組んでいる両手、その左手の薬指には、鳥の羽をかたどった銀の指輪がかすかに光っていた。心に何か湧き起こった。悲しみだ。何もなかったはずなのに、悲しみてヤツがいきなり心に現れた。

いきなり現れたんだから、いきなり消えてもいいはずなのに、しばらく時間が経っても悲しみは消えなかった。人々が集まって来た。牧師が彰子を送る儀式を始めた。

「・・・・・・この世での役目を果たし、天に・・・・・・」

などと牧師が言った。うそだろ、おい。彰子は俺との約束をまだ果たしてないぜ。俺達の約束ってのは「この世での役目」の中に入っていないのかよ。俺もまだ彰子にやっていないことがいっぱいあるぜ。それなのにどこかに行くなんてことがあるのかよ。大体、不公平だろ？彰子の神様よ、あんたんとこに召される人ってどうやって決めるんだよ。くじ引きか？気まぐれか？それとも、本当に役目を果たした者から順番か？それなら、役目を果たした褒美にこの世に置いておけよ。彰子を置いておけよ。

悲しみは消えるどころか大きくなっていた。誰かが何かを言っていた。大勢で何か歌っていた。すすり泣く声が聞こえた。すごく悲しいのに、涙は出なかった。

葬送式が終わった。人々が去り始めた。ふと前を見るとオルガンがあった。

「彰子に歌を歌ってやろう」

これまで彰子に歌を歌ってやったことは1度もなかった。せめて彰子が彰子の形を保っているうちに彰子のために歌いたかった。”
LET IT BE”を歌おう。「母」としか言わない彰子があるときに限ってこう言ったので印象深かった。

「LET IT BE”って好きなのよ。歌詞がね、うちの『お母さん』のことみたいだなって思うのよ」

鍵盤を押さえながら歌った。そして、祈った、「届け」と。絶望的な祈りだとわかっていても祈らずにはいらなかった。祈っていないと、指が動かなくなるから、声が出なくなるから。

歌い終わると、大男の牧師が俺のところに来た。

「無駄に人生を終える人など1人もいません。彰子は何か善きものを残して旅立ったはずです。いつか、きっと、彰子が残してくれたものを見つけてください」

肩に大きな手を置いてくれた。優しい手だった。

安達とせつがいた。安達が手招きしたのでそちらに行った。

「馬鹿！あの歌はピアノの伴奏で歌わなきゃダメだよ。オルガンなん……」

安達の声が聞こえなくなった。安達は下を向いた。そして、顔を上げようとしなかった。

せつは何も言わずにハンカチを渡してくれた。俺は知らないうちに涙を流していたのだろうか。

「せつ、俺、泣いてるのか？」

そう尋ねたら、せつは後ろを向いた。背中が震えていた。

安達が泣いてる。せつが泣いてる。今、はつきりわかった。俺も泣いてる。彰子がいなくなって、俺は泣いてる。やっぱり彰子はいなくなっただんだ。

しばらくして3人で外に出た。木々の緑が目には痛かった。

マリアと恭子がいた。マリアが言った。

「今日はありがとう」

誰よりも悲しいのはマリアだろう。夫を亡くし、今度は娘を亡くしたのだ。それでもしっかりと彰子を送り出したのだ。強い人だ。どこに強さを持っているのだろうか。そして、時として、強さは悲しさを際立たせる。

恭子はうつむいたまま何も言わなかった。

大学3年 8月20日

悲しい。何を見ても、何を聞いても悲しい。

だが、俺だけではない。せつも、恭子も、そして、誰よりもマリアが悲しんでいる。強がらなくては、俺は男だ。

大学3年 8月22日

怒りが湧いてきた。俺から、マリアから、恭子から、せつから、彰子を奪い、遠い存在にした男、何より、彰子本人の時間を突然止めた男が許せないと思った。恭子からその男の住所を聞き出した。恭子が言った。

「ヒロシ、くれぐれも無茶なことはいしないでね」

「それなら住所なんか教えるな」と思ったが、口には出さなかった。そうだ、俺は何をするかわからない。男を殴るかも知れない。「土下座しろ」と言うかも知れない。家に火をつけるかも知れない。「人殺し」と罵声を浴びせるかも知れない。「お前も死ぬ」と迫るか

も知れない。ただ、行ってみなければならなかった。

怒りが悲しみを超えていた。悲しみを忘れるには別の感情で心を満たさなくてはならない。激しい怒りが深い悲しみを追い出すのだ。丘の上の閑静な住宅街に男の家があった。ひっそりとしていた。

インターホンのボタンを押そうと思った。が、結局押せなかった。門のところに”FOR SALE”の文字がプリントされた真新しいプラスチックの板を見つけたのだ。それでも尚、10mほど先の曲がり角から男の家を見ていた。玄関のドアが開き、奥さんらしき女の人が姿を見せたかと思うと家の裏手に消えた。すぐに自転車を押して出てきた。門の内側で辺りをうかがうように見渡した。化粧つきのない疲れ切った顔が俺の方にも向けられたが目は合わなかった。彼女は通りに出てゆつくりと自転車にまたがり、しばらく地面を見つめていたが、思い切るようにペダルをこぎ出し、緩やかな坂を降りて行った。

怒りが失せた。

彰子をはねた男も、その家族も、マリアも、恭子も、せつも、俺も、何かを背負ってしまった。そして、それを背負ったまま、これから生きていく、生きていかなばならないのだ。死ぬまでは。それにどんな意味があるのか定かではないが。そうだ、人間、死から逃れられないのと同様、生からも逃れられないのだ。

再び悲しみに侵されつつある心に、かろうじてこう言い聞かせた。「同じ生なら価値ある生を生きたい。いや、生きる。そうだよな、

彰子」

大学3年 8月23日

恭子が電話してきた。

「昨日はどうしたの？」

「別に。ただ行ってきただけ」

「何もしなかったの？」

「うん。何か悲しかった。俺も悲しかったけど、向こうは向こうで悲しかった」

「そう。……ごめんね」

「なに謝ってるんだよ」

「何となくね」

「恭子」

「何？」

「俺達はしっかり生きていこうぜ」

恭子は返事をしなかった。

夏が終わる。彰子がいなくなった夏。

第5章 く それぞれの道

大学3年 10月7日

教育実習が始まった。忙しい。

大学3年 10月9日

研究授業（という名の「いけにえ」授業）を俺が担当することになった。ついてない。俺より優秀な学生は掃いて捨てるほどいるのに、何故、俺なんだ。何か間違ってる。

大学3年 10月11日

うちの大学の附属校の生徒は下手に頭が良いから、楽な面もあれば苦労する面もある。だが、頭が良いよりは性格が良い方が俺達教育実習生にはありがたいのに。つまり、それ程ありがたいくない状況なのだ。

大学3年 10月12日

毎日、朝早く起きて、電車で揺られて学校に行く。そして、また、電車で揺られて帰り、遅い夕食をとってから寝る。この繰り返しだ。

大学3年 10月17日

実習生とは言え、生徒達に接するときは先生だ。しかし、生徒達と接すれば接するほど、自分の力量不足を思い知らされる。知識や

授業の仕方が云々という前に、俺は本当に生徒が好きなんだろうか？先生になってもいいんだろうか？そこから考え直す必要があるかも知れない。

大学3年 10月19日

生徒から悩み事の相談にのってくれと言われた。多聞に漏れず、恋愛相談だった。普通は自分の体験の1つも話してやって、「お前も頑張れよ」とか「ぶつかるだけぶつかれ」とか言うものなのだろうが、そんなことは何も言えなかった。聞いてやるだけで精一杯だった。

大学3年 10月24日

研究授業だ。よりによって俺だもんな。附属校、特に俺の指導教官は可哀想だ。仕方ないよな、俺を選んじやったんだから。まあ、俺のやり方でさせてもらったが、授業後の討論会では侃々諤々のすごいことになった。知るか。その後、附属校の先生達との話し合い。大学の教授や助教授の顔もちらほら見える。つるし上げ状態だ。「今の自分にできる精一杯の指導法と問題提起です」と発言し、「その問題提起とはどういうことか」と詰問された。正直に答えた。

「授業は生身の教師が行います。しかし、授業は1つのシステムでもあります。そして、今の僕には、教師がシステムを補い、システムを支えるために授業をしているようにしか見えませんでした。でも、システムというのは、教師、そして、何よりも生徒のために存在するべきなのではないかと。授業という場に居合わせる、教師と生徒を補完するのがシステムなのではないかと。だから、敢えて、一般的な授業の枠を逸脱しても構わない、というより、逸脱する気で授業を行ってみました。つまり、現在のシステムを無視して、システムの及ばない場を作ってみたんです。生意気なもの、力量不足

なのもわかっています。生徒にも迷惑だったと思います。でも、やってみなければわからなかったので、やってみました。もう、2度とやろうとは思いませんが」

先生達は笑った。

大学3年 10月27日

教育実習がやっと終わった。長かった。

実習が終わるに当たったので、実習生の多くは「生徒がますます好きになりました」とか「教師として生きていこうと改めて思いました」とか、臆面もなく言っていたが、俺はそういう気にはあまりならなかった。変なのだろうか。

大学3年 10月28日

景山教授に呼ばれた。

「岸和田君、また、話題を作ってくれたね」

「はあ、実習の授業のことですか？」

「そうだよ。今まで学んできたことを少しでも生かして授業をしたのかね？」

「少しは。でも、学んできたことだけが正しいことだとは思いません」

「ほう？」

「色々な方法があつていいはずですよ」

「各論にこだわることかな？」

「総論は、正直、よくわからないんです。『教育とはかくかくしかじかだ』って言われたら、『立派だな』とか『理想的だな』とか『その通りだな』とか思うんですが、それを消化しようとするところの方法も僕には合いません。完全に実行し切れません。だから、僕には各論も役に立ちません」

「それが君の言った『システム』のことに通じるのかね？」

「はい、多分。僕が授業をするからには、僕のシステムで授業をすべきなんです。でも、教える技術そのものを習得する必要は痛感しました」

「結構。岸和田君、君のシステムを作りなさい。結果的にそれが誰かのものと同じだったとしてもいいじゃないか。でも、君のシステムを作るために、まずしなければならぬことは何ですか？」

「既存のシステムを破壊することです」

「・・・・・・。はっはっはっはっ」

「どうしました？」

「いや、『習得すべきことは習得すること』とか、『現在のシステムを研究・分析すること』っていう答を期待していたので」

「すみません」

「いや、君らしくていいんですよ」

大学3年 10月30日

学校教育だけが教育なのだろうか？

大学3年 11月16日

毎日大学に通ってる。当たり前のように。

何の疑いもなく、教員になるための勉強をし続ける多くの学友達。もちろん、全員が教員になれるわけもないが、少なくとも目指しているようだ。

俺も、色んな講義を聴き、演習を繰り返す。実験をし、レポートを書き、作品を作り、論文を書く。

まあ、充実した毎日だ。

大学3年 12月7日

日常の繰り返しに埋没している。それはそれで幸せなのかも知れない。

大学3年 12月21日

もうやめた。ごまかし切れない。今の俺の心は、勉強では、日常では、目指すものでは癒せない。埋められない。

悲しい。何もする気が起こらない。ここから始める。

大学3年 12月24日

クリスマス・イブだ。

気がついたら香山家へと足が向いていた。家の前で長い間ぼーっとしていた。恭子が出て来た。思わず物陰に隠れてしまった。最後に恭子を見てから10年くらい経っているような気がした。本当に懐かしかった。

恭子は教会へでも行くのだろうか。声をかけようと思ったが、かけられなかった。恭子の後姿が拒んでいた。そして、輪郭がぼんやりしていた。曖昧だった。

恭子も壊れている。そう思った。言い様のない情けなさがこみ上げてきた。恭子だけは悲しみから守ってやりたかったのに。彰子のいない悲しみとはまた違う悲しみが生まれていた。

大学3年 12月25日

彰子を失ってから俺に付きまとっているのは何だろう。

自分の心をどこかに取られてしまった、そんな感じた。彰子とは他人ではなかった。時間や距離を超えて、いつでも意識せずに分かり合える存在だった。元々あるべきものが失われた、そうだ、喪失感

だ。

だが、昨日、恭子を見たときに感じたのは何だったんだろう。

大学3年 1月8日

恭子に会いたかった。合って、また、無茶を言って欲しかった。彰子は決して言わなかった無茶を。

大学3年 1月11日

恭子の誕生日だ。それを口実に、思い切って恭子に電話してみた。意外に明るい声だった。

「・・・・・・ありがとう。明日はヒロシの誕生日ね。おめでとう」
「ありがとう。明日ヒマならちよつと会わないか？」

「明日は予定があるの」

「そうか」

「ごめんなさいね」

「いや、いい。ちよつと顔が見たかったんだ」

「わたしも会いたいわ。でも、無理だわ」

「元気にしてるのか？」

「元気よ。ヒロシはどう？」

「こつちもそこそこ元気だ」

「そう。じゃあね」

大学3年 2月2日

せつから電話があった。

「ねえ、最近恭子さんに会った？」

「いや」

「わたし、昨日たまたま見かけたんだけど、ひどいわよ。ギスギス

に痩せちゃって、ほんと、蹴ったら折れそうなくらいだったわよ」
「前に電話したときは元気だつて言ってたぜ」
「うそに決まってるでしょ。恭子さん、彰子が死んでから全然元気がないわよ。だんだん弱ってきてるって感じよ。まあ、ヒロシも元気なかったけど」
「そうか。よほどショックだったんだろうな」
「当たり前よ。でも、あれは異常よ」

大学3年 2月6日

マリアにお願いがあると呼ばれた。恭子は食事をとらず、病的に痩せてしまって、マリアが病院へ行くように言っても聞かないのだという。無理矢理にでも病院に連れて行くから手伝ってくれということだった。

恭子に会った。せつの言う通りだった。泣けてしまった。

「恭子、どうしたんだよ。お前……」

「何も食べたくないの。食べてもどうせすぐにもどすし」

「恭子、病院へ行こう」

「いやよ」

「お前、このままじゃ死んじゃうよ」

「いいわよ」

「力ずくでも病院に連れて行く。頼む、恭子、お前まで死んじゃったら、俺は……」

「何？」

「どうしていいかわからない」

恭子はうつむいて、つぶやいた。

「わたしにもどうしていいかわからないのよ」

「とにかく、病院だ」

「行かないわ」

恭子を抱きかかえた。恭子は抵抗したが、あまりにも無力だった。

本当に軽かった。そのまま、マリアの運転する車に乗せて病院まで連れて行った。

大学3年 2月7日

彰子に何もしてやらなかった。恭子にも何もしてやれない。ただ、そばに突っ立っているしかない。

大学3年 2月10日

病院のベッドで恭子は横になったまま雑誌を見ている。何も話さうとしない。

大学3年 2月13日

恭子が退院する。車で迎えに行った。マリアと一緒に歩いてロビーに現れた。顔色も良く、体つきも多少ふっくらしていたが、相変わらず何も言わなかった。

香山家に着き、荷物を下ろしトランクを閉めたとき、恭子がそつとささやいた。

「ありがとう。……さようなら」

大学3年 2月14日

恭子が初めて「さようなら」と言った。「さようなら」と。じわじわと効いてくる。

大学3年 2月18日

恭子に電話した。マリアが出た。恭子に代わってもらおうとした

が、

「恭子は出られないって。ごめんなさい」

「そつとしておくしかないんですね」

「今はそうみたい。本当にごめんなさいね」

「いえ、いいんです」

本当に「さようなら」なのか。

大学3年 2月19日

自分とは違うものがある。それが自分に向かって来る。最初は受け入れるどころか、拒みさえするかも知れない。しかし、それでも向かって来る。何度も何度も。そのうちそれを認めて受け入れたら・・・。また、逆に認めて受け入れてもらえたら・・・。初めから自分の中にいるものを感じる一体感。互いをぶつけ合っ
てその果てに感じることもできる一体感。どちらも同じか？対象として見つめる分だけ、自分とは違うものに最終的に感じる一体感の方が大きいのでは・・・。

理屈ではない。彰子が「俺の中」からいなくなつて、俺は悲しい。そして、恭子が「俺の前」からいなくなつたら、やはり悲しい。

俺は恭子が好きだったのか。でも、彰子が好きだったじゃないか。

大学3年 2月20日

気付かなければ良かった。姉を、妹を、2人を好きだったなんていや、俺は恭子が好きだったのかも知れない。彰子は好き嫌いを超えた存在だったのかも知れない。

大学4年になる前の春 3月8日

早春、雪の影も消えてしまふ。俺の影は恭子から消えるのか。恭

子の影は俺から消えるのか。彰子の影はいつまでも消えないのに。

大学4年になる前の春 3月10日

景山教授から電話があり、駅で待ち合わせをした。何と、教授はカラオケに俺を連れて行った。

「今日は日本語の歌は禁止です」

そう言いながら、教授は古い英語の歌を次々と歌っていった。俺はカラオケが嫌いなので、ずっと教授が歌っていた。どうしても歌えと言われて、テンポが緩やかで歌しやすい”COUNTRY ROAD”と”HEY JUDE”と”TIME AFTER TIME”を歌った。

3時間後解放された。その後、うつて変わって静かなバーで酒を飲みながら、教授と話した。

「どうでしたか？カラオケは」

「はあ、僕はあまり好きではないので」

「僕の歌は気に入りましたか？正直に答えてください」

「”MY WAY”と”IMAGINE”は良かったと思います」

「そうですか。少しは気持ちが良かったんですね」

「はい」

「僕は、君の歌には感動しました。特にあの”TIME AFTER TIME”、いいですね。教育者はああでなくちゃいけない。いつまでも、いつまでも、何度でも、何度でも。岸和田君、君は自分の教え子を信じて、いつまでも待ち、何度でも手を差し伸べることができますか？」

「わかりません。でも、そういう気になる教え子もいるはずですよ。相変わらず正直ですね。でも、いいですよ。少なくとも君は可能性を否定しませんでしたし。ところで、僕は歌っているときは大変に気持ちがいいんですよ。変ですかねえ？」

「いや、そんなことはないと思います」

「そうですか。カラオケは気持ちいい。でも歌っている人ばかりが気持ち良くて、も仕方がない。だから、カラオケは居合わせる人みんなが歌ってこそ意味があるんです」

「そうですね」

「そういえば、プロの歌手はカラオケに行くんでしょうかね？」

「遊びでは行くこともあると思います」

「ほう、遊びでね。では、お金の問題を別にしたら、遊びと本気の違いは何でしょう？」

「歌で何を伝えるか、何が伝わるかじゃないでしょうか。プロなら遊びで歌ってもすごいと思いますが、本気で歌えば聴く人の心に響くものがあると思います」

「伝えたい、伝えるべきものを、歌という媒体を通じていかに伝えられるかですね、プロの価値は。もし、プロがカラオケで本気で歌えば心に響きますかね？」

「恐らく」

「みんなが気持ち良く歌える、そして歌っていないときに聴く歌は心に響く。同じカラオケでもそんなカラオケだったら素晴らしいですね」

「はい」

「今の教育現場では、限られた時間内に、居合わせる人みんなにマイクを回すことなどできません。だから、みんなが能動的に一度に気持ち良くなる頻度は低いのです。でも、プロがそこにいれば何人をも圧倒する感動はそこその頻度で生み出せるかも知れませんが。もちろん、いずれはみんなに歌ってもらわねばなりません。君だけの『システム』、見てみたいですねえ」

「先生……」

「カラオケも経験しないと、良さも悪さもわかりません。もしかしたら、君や僕のカラオケの歌を聴いて泣く人もいるかも知れませんか。実際、君自身は嫌いだという君のカラオケで僕は感動したんですから。嫌いなこと、つまらないことの中にも、大切な何かがある」

あるのかも知れませんよ」

「はい、そういうこともあるかも知れません」

「結構。君は、何かを伝えようという意志を持っています。後は、伝え方の問題です。どうか、プロとして君の教え子に伝えてください。いや、感動させてください」

「はい」

「いいですねえ、”TIME AFTER TIME”。君のテーマ曲にしないさい」

「します。でも、僕は気が短いんで、待ちきれずに怒ったり飛び出したりするかも知れませんが」

「はっはっはっ。どちらかと言うと、それは君を受け入れる側の度量の問題ですね。ま、またカラオケにも行ってみてくださいね。カラオケで歌を練習してプロになる人もいるみたいです」

カラオケは多分、一生好きになれないと思う。だが、俺は、素晴らしい先生に巡り会った。

大学4年 4月10日

4年だ。奇跡的に卒業のめどがたった。景山教授のご尽力のおかげだ。教授はこの春、異動でT大の大学院に移られた。ありがとうございました。

大学4年 5月7日

また教育実習だ。今度は普通の日本語が通じないホントの子ども、小学生相手の実習だ。憂鬱だ。だが、俺に研究授業や何かをさせようとは誰も思っていないだろう。もし、くじ引きで俺に当たったとしても、絶対にくじ引きをやり直すに違いない。

大学4年 5月9日

悪魔だ、子ども達は悪魔だ。よくわかった。俺も悪魔になってやる。悪魔同士仲良くやろうぜ。

大学4年 5月11日

子ども達と一緒に並んでいる。そして、俺の前には校長がいる。子ども達と一緒に校長室で叱られる教育実習生はそうはいない。

担当の指導教官は「ハア」とため息ばかりついている。

校長室から解放された俺に、指導教官が言った。

「理科室の水槽で子ども達と一緒に熱帯魚釣りをした教生は初めてです。叱る気にもなりません」

大学4年 5月14日

駅から自転車で通勤する（実習生も一応通勤と言うのだ）途中、ウチの自動が2人、必死で走っていた。「遅刻するよお」と今にも泣きそうだった。仕方がないので、1人は俺の肩に手を置かせ荷台の前のほうに立たせ、もう1人は二台の後ろの方に座らせて学校まで連れて行った。が、校門を入ったところで校長に見られてしまった。校長は顔をヒクヒクさせている。まずいなあ。

「校長、後で謝りに伺います。今は早く行かないと、ほら、遅刻になっちゃいますから、失礼します」

2人の子どもと一緒にそくさと校舎の中に入って行った。

昼、思いつきり叱られた。今度は校長室に俺1人、いや校長と2人きりだった。かなり怖かった。

教育実習の単位、出るかなあ。きわどいなあ。

大学4年 5月21日

教育実習最後の日だ。子ども達が歌を歌ってくれた。下手くそな歌だった。悪魔の歌。

ありがとよ、みんな。立派な悪魔になりなさい。

大学4年 6月6日

恭子に会った。いや、恭子を見かけた。友達らしき女の子と一緒に買い物をしていた。声はかけなかった。3か月前に比べればずいぶん元気そうだった。笑っていた。安心したが、寂しさも感じた。彰子が亡くなってから、俺には笑顔なんか見せてくれたことはなかった。

もう、恭子は俺とは関係のない人になったんだろうか。彰子の死と共に、恭子との関係も無くなったんだろうか。彰子を失ったのと同じくらいつらい。

大学4年 7月3日

マリアから電話があった。

「ヒロシさん、恭子がね、アメリカに行くことになったの。わたしのいとこがボストンにいるんだけど、そこに行くのよ。8月の終わりに発つわ」

「いつまでですか？」

「わからない。1年かも知れないし、10年かも知れない。ずっと向こうにいるかも知れない」

「え、もう日本には帰らない気なんですか？大学はどうするんですか？」

「大学はね、やめるの。せっかくヒロシさんに入れてもらったのに、ごめんなさいね。多分、向こうで入り直すとは思っただけど」

「そう……ですか」

「ごめんなさいね、混乱させちゃって。でも、あなたにはお知らせ

しておかないとね。それと、わたしもイギリスに帰ることにしたのもう、香山も彰子も恭子も日本にはいないんですもの、日本にいる必要がなくなっちゃったから」

「何て言えばいいのかわかりません」

「ごめんなさい。でも、今はこうするしかないみたい。恭子にしても考えに考えた末に出した結論なのよ」

「……わかりました。でも、僕は……」

恭子が好きです、と言いたかったが、飲み込んだ。恭子の母親には言えても、彰子の母親には言つてはいけないような気がしたのだ。「あなたみたいな息子も1人産んでおけば良かった。落ち着いたら手紙を書くわ。元気でね、ヒロシさん」

「あなたも、お元気で」

恭子が俺の目の前から消えたら、俺は耐えられるだろうか？多分、耐えられる。彰子が死んだときと同じくらいには。

大学4年 8月2日

大学院に行くことにしていた。大学入学時から漠然と考えてはいたが、教育実習時にその思いは決定的になっていった。このまま教師になってはいけない。何より俺に教えられる子どもが可哀想だ。景山教授のいるT大の大学院を受けることにした。また受験勉強だ。

しかし、その前に一応、教員採用試験も受けることにした。親がうるさいのだ。大学院のことはまだ話していない。まあ、大学までは出してもらった約束だったから、大学院ということになると自分で学費を出すことになるだろう。多分、家にもおいてもらえないだろう。覚悟はしている。塾とか予備校でアルバイトしよう。

大学4年 8月9日

教員採用試験の1次試験が終わった。学科、実技、小論文、どれもそこそこだ。他の受験生と違いどうでもいいと思っていた分、力が抜けていて、かえってできたかも知れない。本当にどうでもいいけど。

大学4年 8月18日

彰子が死んでから今日でちょうど1年だ。さすがに1年経つと悲しみも随分和らいでいる。時間は偉大だ。だが、彰子はまだ俺の心の中に生きている。恐らく、一生心の中に生きているだろう。ほかの誰かを好きになっても、恭子が好きでも、それは変わらない。

彰子の墓に行った。見晴らしのいい場所だ。十字架が刻まれた灰色の墓石の前に白い花が置いてあった。そして、恭子がいた。

「恭子、来てたのか」

「ええ、やっぱりヒロシも来たのね」

「1年経ったんだな」

「うん。でも、もうずっと昔のことみたい」

「ああ」

しばらく目を閉じて祈りを捧げた。色々な思い出があふれてきた。出会い、チョコレート、公園、告白、大学合格、お互いの留学、海銀の指輪……。

恭子が話しかけてきた。

「ねえ、いっぱい思い出した？」

「ああ」

「わたしも。生まれてからずっと一緒だったんだから、多分ヒロシの10倍以上思い出があるわ」

街を眺めていると、恭子が近寄ってきた。俺の横に並んで、街の方に顔を向けた。2人とも街を眺めたまま話した。

「行くんだろ。よく見ておけよ。これが俺達の街だ」

「そうね、わたし達の街」

「いつか帰って来るのか？」

「わからない」

「そうか」

「あのね、今日ここに来ればヒロシに会えると思ってた。ヒロシを待ってた」

「会ってどうしようって思ったんだよ？」

「心に刻みつけるのよ」

「俺はどうしようか迷ってる」

「何を？」

「恭子を心に刻みつけようか、よそうか、迷ってる」

「なぜ？」

「刻みつけたら忘れられなくなる。いなくなるお前を忘れられなかったら、つらいだけだろう？」

「でも、きちんと刻みつけてよ」

どちらからともなく顔を近付けた。俺と恭子はキスをした。初めての、そしてさよならのキスをした。

恭子がささやいた。

「あの夜は左を向いてくれなかったのに、今やっとキスしてくれたわね。ありがとう、『灰色の星』」

「恭子……」

「ヒロシは姉さんだけの星じゃなかった……さようなら」

恭子は微笑み、そして背中を向けて歩き出した。

俺は、立ったままで、ゆっくりと小さくなっていく恭子の後ろ姿を見ていた。止められなかった。また、大切な人がいなくなった。

大学4年 9月20日

教員採用試験、1次試験の合否がわかった。「合格」だった。親

は大喜びしてるが、俺は憂鬱だ。

大学4年 10月18日

2次試験を受けた。全くやる気はないのだが、スーッと終わってしまった。

大学4年 11月25日

教員採用試験に合格してしまった。教育委員会は、いったい、どこを見て採用してるんだ。ふざけてるぜ。

父親は笑ってる。母親は涙ぐんでる。あらま。どう責任取ってくれるんだよ。

大学院 4月8日

今日からT大の大学院に通う。景山教授のところだ。

昨年、秋、教員採用試験に受かっていたが辞退した。親は激怒したが仕方ない。その日のうちに荷物をまとめて、とりあえず安達のところに移り込んだ。学習塾でアルバイトしながら、卒論を書き、大学院の受験勉強をした。合格がわかってからすぐにワンルームを借りた。挨拶をしに景山教授のところに行くと、こう言われた。

「やっと君から逃れられたと思ったのにねえ、来ちゃいましたねえ」

研究の日々が始まる。金も稼がなきゃならない。予備校・塾でのアルバイトをいくつか掛け持ちするか。

安達は家電メーカーで営業をしている。本当は出版社に入りたかったのだが、就職試験を受けた2桁の出版社全てに振られて今の仕

事をしている。「いつかは出版社、いつかは編集長」と言いながらも、あちこちの小売店を飛び回っている。

せつは内科医になるために頑張っている。「2年後に国家試験、その後研修医として修行。一人前になるにはまだ何年もかかるわ。おばさんになっちゃう」と言いながらも、充実した日々を送っているのだろう。

それぞれの春。それぞれの道……。

大学院 4月10日

町の学習塾と大手予備校、2か所で講師をすることになった。学校とは違ってなかなか面白い。

大学院 9月7日

マリアから手紙が来た。イギリスで落ち着いたらしい。恭子はこの9月からアメリカの大学に通い始めたということだった。

恭子。遠い名前。でも、決してなくならないであろう名前。黄昏てても仕方ない。俺は俺の闘いを続ける。

大学院終了 3月3日

論文が通り、はれて修士課程を修了。一応俺もマスターだ。4月からは私立の小学校で先生をする。

小学校教師 4月9日

異常だ。この小学校は。世間的に見ればお坊ちゃん、お嬢さんの学校かも知れないが、実際の子ども達はいたって普通（普通に悪さ

もすれば、喧嘩もするし、泣くし、笑うというレベルでの普通）なのだ。何が異常かと言うと、先生達なのだ。「この小学校は名門なのだ」「ウチは上流階級の子女をあずかっているのよ」という、どうでもいいプライドが見え隠れ、じゃない、見え見えしているのだ。

俺なんか本当にプライドが高いから何でもできる。必要があれば裸踊りだつてつするし、頼まれれば靴だつて磨いてやるぜ。だつて何をしようが俺は俺で、他人がどう思おうが俺という人間に変わりはないんだから。自分に自信を持つ、それが本当のプライドで、他人からどう思われるかはプライドの本質から外れている。そう思いませんか？（誰に向かって尋ねてるんだろう）

小学校教師 4月13日

掃除の時間に遊んでいる子どもを見つけたので叱ったら、他の先生がグチグチ言ってくる。おいおい、どうなつてんだ。

「まあ、ウチはいいとこの子女が多いから、掃除なんてしたことないのよ。家政婦さんなんかがやってくれるから。掃除の必要性なんて感じてないのよ。実際必要ないしね」

「掃除なんて単なる作業はね、どうでもいいんですよ。勉強してくれば」

何だよ、単なるサギョウって？「サシスセソ」か？呆れてもの言えない。

小学校教師 4月16日

昼食の時間、嫌いなものは全く食べない子どもがいた。もしや、と思い、様子を見ると、クラスの大半が食べ残している。理由を聞くと、「まずい」「嫌いなものが入っている」「お腹がすいていない」からだそうだ。

嫌な予感はしていたが、同僚に話してみると、
「まあ、当たり前のことですね」
にべもない。

小学校教師 4月17日

ぶち切れた。食べ物を食べないのは本人の勝手だが、食べ物を投げておもちゃにするのは許せない。ありとあらゆる人、物に対して失礼だ。叱りとばした。が、やはり、問題になった。知るか。

大体、本当にいいとこの子どもは食事のマナーくらい身につけてるぜ。はしもきちんと使えれば、好き嫌いは言わないし、最後まで残さずにきれいに食べる。もし、残すことがあっても申し訳なさそうにしてるぜ。食事中に立ち歩くななんてことはしない。ましてや、食べ物を投げるなんて真似は絶対にしない。

もし家で食事のマナーを教えていないのなら、気付いた大人が注意したり教えてやるべきだろ？それは教師や学校の問題ではなくて、社会として当然のことではなからうか。

小学校教師 4月25日

親達と話していて気が狂いそうになった。他人と話すときに、どうして自分の子どもを「マサノリちゃん」なんて言えるのだ？家では何とでも呼んでくれ。「マーちゃん」でも「マサノリさま」でも。しかし、他人に「マサノリちゃん」はあるまい。「愚息」とまでは言わなくても「マサノリ」や「息子」くらいにしておけよ。

「ウチのマサノリちゃんが……」「カナエちゃんはね……」
「……」「ヨックンは」「ユミちゃんが」「ピーちゃん」「マミマミ」……みんな母親、いや、馬鹿親の口から出てくる言葉だ。話す相手は俺、つまり担任教師。
ふざけるな！

小学校教師 4月26日

親も親なら子も子だ。

「ウチのくそババアが」「はげ親父が」「サチコ（母親の名前）さんが」「ツトム（父親の名前）が」「あいつ（父親か母親）が」「ご両人（父親と母親）が」……。

小学生だ、「父」「母」と言え、とまでは言わないが、いったい自分の親を何と置いてこういいう言い方ができるのだろうか。

小学校教師 5月7日

何が名門だ。何が一流だ。何が上流階級だ。

校長以下、教師が変だ。何か勘違いしてる。親が勘違いし、子ども本人が勘違いし、本来、その勘違いに気付かせてやるべき教師までが勘違いしてるんだからどうにもならないぜ。

小学校教師 5月10日

もうやめた。こんなろくでもない学校、辞めてやる。

校長室に辞表を出しに行った。PTA会長もいたが構うものか。

「校長、短い間でしたがお世話になりました。辞めさせていただきます。では」

辞表を机の上に置き、出て行こうとしたら、PTA会長が声をかけてきた。

「ちょっと、待ってください。お辞めになる理由は何なのですか？」

「一身上の都合です」

と答えると、

「いいんですよ、正直に言ってみてください」

景山教授みたいなことを言う。校長はおろおろしているが、わか

つたよ、正直に話してやろう。

「この小学校に通う子ども達は普通のこども達です。でも、この学校の先生達は何か勘違いして、子ども達にちやほやして、子ども達を甘やかしています。だから、子ども達も自分達は何か特別なんだと勘違いをしているんです」

校長が口をはさむ。

「岸和田先生、それはないでしょう。ウチは実際に立派なご家庭のお子さんばかりおあずかりしてるんですから」

「は？」

「だから、ウチはね、イギリスの上流階級が子女を……」
イギリスの上流階級がどんな教育をしてるかわかって口きいてんのか、この日本人は。彼らはまず、自分達には、恵まれた生まれの者には、「責任」があるってことを子どもに叩き込むんだぜ。もちろん、上流階級全てが立派とは言わないが、少なくとも、上辺だけ飾るような愚かなことはしない。マリアを見ていたらよくわかる。頭にきた。

「わたしはあるイギリスの貴族階級出身のご婦人を大変よく存じ上げております。わけあって日本にいらっしゃいましたが、彼女は、ご自分の2人の娘さんに、まず、日本の社会で守らなければならぬ義務をお教えになりました。もちろん日本語を第一とし、英語は後に勉強するように配慮なさいました。そして、他人に対する優しさ、気遣いがマナーの本質であると、愛情をもって、それはそれは厳しく、優しくお教えになりました。そして、人間には果たすべき責任があることも。ウチの学校の先生達とは全く違う教育でした。」

「君、失礼じゃないのかね！」

いつの間にか校長と喧嘩してるぞ、俺は。

「いいえ、少なくともその方はご自分のお子様に『ちゃん』はおつけになりません。悪いことをすればお叱りになり、良いことをすればお褒めになりました。目に余れば、よそのお子様でも注意をされていました。お子様が大きくなりテーブルマナーを身に付けるまで

は、外食にお連れになることもありませんでした。その方のお子様は、食べ物の好き嫌いは言いません。食べ物を粗末にはしません。挨拶もきちんとしてます。自分の親を馬鹿にするようなことは言いません。掃除も熱心にします。勉強も頑張ります。自分の主張はしますが、他人の話も聞きます。はい、いいえと返事も………」

「わかりました」

PTA会長が俺をとめた。

「岸和田先生、でしたね。いやあ、親としては耳が痛いことばかりです。おっしゃりたいことはわかりますよ。色々と考えてみなければいけませんねえ。自分で言うのもおかしいことですが、確かに、この学校には金持ちの家庭の子女は多くても、本当の意味で品のある家庭の子女は少ないかもしれませんね」

話のわかる会長だ。会長だけのことはある。この人のお子さんはマリアの娘達並みかも知れない。

「言い過ぎました。すみませんでした。失礼します」

出て行こうとすると、会長がまた尋ねてきた。

「岸和田先生、あなた、下のお名前は？」

「浩です」

「岸和田浩……。さっきの、その、イギリスのご婦人は、もしかしたら、『香山』というお名前ではないですか？」

「はい。ご存知なんですか？」

「ええ、一番上の娘が中学からS女子にお世話になっていましたね。同級生に『香山彰子』さんがいらつしました。そうですか、あなたが香山さんの……。岸和田浩という名前、娘から何度も聞いていますよ」

「はあ、わたしは存じ上げないのですが」

「ははは、そうでしょうね。でもね、吉村せつさんと香山彰子さんは娘の学年では有名でね、そのお2人と仲の良い、岸和田浩君の話もよく出ていましたよ」

「馬鹿なことばかりしていましたからね」

「あなたがそうだとはね。娘に教えてやらなくては。ああ、彰子さんはお気の毒でしたね」

「いえ」

校長はわけがわからず、会長に尋ねた。

「何ですか、その香山さんとか娘さんとか？」

「いいんですよ、校長。こっちの話です」

思わぬところでマリアと彰子を知ってる人に出会ってしまった。

驚きだ。だが、ここは俺のいるべき場所ではない。

「それでは、ご迷惑をおかけいたしました。失礼いたします」

校長室を出た。せいせいした。

最後にあの会長に出会えて良かった。

さあ、これから何して生きていこうか。

無職 5月17日

塾の常勤講師を募集していたので履歴書を送ったらすぐに面接となった。「栄明塾」という名の中堅の進学塾だ。

塾長が尋ねた。

「どうして小学校をひと月でお辞めになったんですか？」

うーん、答えにくいなあ。

「色々と合わなくて。校長とも喧嘩しましたし」

しまった。言わなくてもいいことを言ってしまった。取り繕わねば。

「つまり、小学校自体が僕には合わないんです」

「で、その合わない小学校にどうしてお入りになったんですか？」

この人は割と追求してくるなあ。

「カラオケみたいなものです」

「カラオケ？それが小学校とどういう関係があるんですか？」

「話すと哲学的になりますからやめましょう」

「カラオケと小学校と哲学ねえ」
そりゃ、理解できないだろうな。俺と俺の「先生」以外には。

無職 5月20日

栄明塾に採用していただいた。6月から中学生、高校生の文系教科を担当することになった。

無職 5月27日

せつは医師の国家試験に受かり、研修医として母校のT医大の附属病院に勤めている。内科のお医者さんだ。

「俺は塾の先生、お前は病院の先生。同じ先生でも響きが全然違うよな」

「今更何言ってるのよ。研究者にも、普通の学校の先生にもなれたのに。それにね、わたしは言ってみればどっか壊れちゃった人を『治す』先生だけど、ヒロシは人を『育てる』先生でしょ。どっちが創造的な先生かしら」

「そういう考え方もできるな」

「でもね、自分の思いをそのままぶつけたらダメよ」

「ああ、わかる。俺の持つてるものをそのままぶつけたら、たいていはつぶれるよな。受け取るだけの気力や能力がある生徒ならいいけど。だから、生徒に対しては自分をセーブすることは覚えた」

「生徒に対してはね。ほかのものもつぶさないようにしなさいよ」

「さあね。それはこれから覚えるよ。お前も患者さんをつぶさないようにしろよ」

「患者をつぶすって、どうするの？」

「色々あるんじゃないか。ただの胃潰瘍なのに、『胃がんの疑いもあるのかな』ってわざとひとり言のようにつぶやいて患者に聞かせるとか、何でもないので、患者さんとカルテを見比べながら首を傾

「げてみるとか」

「よくそんなことすぐに思いつくわね。やっぱり性格に問題があるわね」

「治してみるか？」

「内科医の仕事じゃありません」

「何言ってるんだよ。医療もトータルで考える時代だろ。精神科医でなくても心のケアはするんだろ？」

「心のケアはしても、ねじ曲がった性格をまっすぐにするなんて、わたしには無理。どちらかと言うと教育の仕事でしょ」

「そうか。まあ、お互い頑張ろうぜ。病院の先生」

「そうね、塾の先生」

第6章 封印

6月17日

せつは研修医の期間を終えてある総合病院に内科医として勤めている。

「ようやく本当の医者よ。でも、まだ一人前って言うには早いわね。もつとしなきゃならないことがあるわ」
相変わらず立派だ。

安達のアホは、家電メーカーを辞めてある出版社でアルバイトをしていた。で、何故か仕事ぶりが認められて、この度、正式に社員として採用された。奇跡だ。

「やっぱり、才能ってのは見る人が見ればわかるんだろうな」
とは安達の弁だ。何の才能だよ。

だが、そのアホが恭子を……………。

6月18日

せつが電話してきた。

「ちょっと、安達君から聞いたわよ。恭子さん帰って来てるんだって？ ヒロシ、どうするのよ？」

「何をどうするんだよ？」

「知らないわよ。ヒロシ自身のことでしょ」

「そうだな」

「のんきね。会っくらい会ってみれば？」

「そうしてみようかな」
「あまり乗り気じゃないみたいね」
「ああ。今更って気もするし」
「会わない勇気もないでしょ」
「どうかな」
「ヒロシ、大学4年のとき、大学院のとき、つき合ってた子がいたじゃない？」
「ああ」
「両方とも長続きしなかったけど」
「何が言いたいんだよ」
「心の奥底では恭子さんのことが好きなんだろうなって」
「よくわからない」
「わかってるくせに」

6月24日

安達に聞いた「M」の日本支社を訪ねてみた。本当に恭子がいた。少しなら時間が取れると言う。
ロビーに恭子が現れた。俺の前の椅子に座った。2人ともしばらく何も言わずに互いを見ていた。声にならない思いがこみ上げてきた。俺が先に沈黙を破った。
「久しぶり。元気だったか？」
「ええ、ヒロシは？」
「見ての通り、元気」
「よくここがわかったわね」
「安達が見かけたって教えてくれた」
恭子はアメリカで大学に入り直した。在学中に研修で受け入れてもらったことが縁で「M」と契約しているという。アメリカでの仕事有一段落し、しばらくは日本で仕事をするのだという。状況にもよるが、数か月から1年でまたアメリカに戻るらしい。景気が良く

ても悪くても証券業界は忙しいみたいだ。

日本では、前に住んでいた家はもうないので部屋を借りているという。せつが勤めている総合病院の近くだった。

「ヒロシは塾の先生をしているのね。大学院に入ってたって聞いてたから、てつきり学者になる道を選んだと思ってた」

「色々やってみないと」

「ミイラ取りがミイラって言う言葉があるじゃない？そこそこしないと、本当にミイラになっちゃうよ」

「そうかもな」

最後に会ってから何年も経っている。だが、恭子は変わっていない。少なくとも外見は。時間が後戻りしそうだった。

受付の女の子が恭子を呼んだ。恭子は仕事に戻らなければならないうだ。携帯電話の番号を教え合い、2人とも立ち上がった。

「お前……」

「何？」

「まあ、いいや」

つき合っている人はいるのか？好きな人はいないのか？尋ねたかったが、止した。

「じゃ、わたしが訊くね」

「ああ」

「結婚は？」

「してない」

「恋人はいるの？」

「いない」

「グズグズしてると、おじさんになっちゃうよ」

「大きなお世話だ」

「そうよね。じゃ、仕事があるから。ヒロシ、すごく嬉しかった。すごく懐かしかった」

恭子が行こうとしている。

「恭子……」

恭子の名を呼ぶのはいつたい何時以来だろう。口が上手に動いていないような気がした。

「恭子、お前、幸せか？」

「少なくとも不幸じゃないわね。だって、ヒロシのことが懐かしく思えるんだもの」

6月27日

3時過ぎ、せつが血相を変えて塾に乗り込んで来た。

「ちよつと、恭子さん、結婚するの？」

「いや、初耳だ」

「今日、夜勤明けでお休みだったのよ。でね、お昼食べに入った店で恭子さんに会ったのよ。すぐくカツコイ男の人と一緒にだったのよ。背もあなたより10cm以上高いし、顔もいいし。同じ会社の人だって。きっと給料もいいわよ。しかも、恭子さんのアメリカの大学時代からの知り合い。英語も日本語もペラペラ。どう考えてもあなたに勝ち目はないわよ」

ちよつと落ち着けよ、せつ。俺だってそいつより10cmもこじんまりまとまってて、目も鼻も口もある。違う会社の人で、給料だってもらってる、一応。しかも、恭子の日本時代の知り合いだし、日本語はペラペラだぜ、多分そいつより上手い。……ああ、みじめだ。

「そいつはアメリカ人か？」

「国籍はね。でも日系の3世だとか」

「名前は？」

「山添、何だっけ。カードをもらったんだ」

せつはバッグからコーリングカードを取り出した。

「えつとね、山添カズマだって」

「ヤマゾエカズマか。画数は何画だ？」

「そんなことどうでもいいのよ！『恭子』、『カズマ』って呼び合

う仲よ。大体、この山添さんが日本に転勤になったのを、恭子さんが追いかけて来たらしいじゃない」

「そんなこと知るか！俺も恭子とファーストネームで呼び合っし、恭子だつて俺がいるから日本に帰ったのかも知れないじゃないか。第一、何で2人が結婚するってわかるんだよ」

「おめでたいわねえ。山添さん、『恭子には、そろそろ日本でいう、給料の3か月分ってヤツを贈ろうかなって思ってるんです。僕もしばらく日本にいるし、祖先の国の習慣通りにゴールするのもいいかな』とか言ってたわよ。恭子さんもニコニコしてたし。あれはどう考えたって結婚前のカップルよ」

「そういう会話をしたんなら、それを早く言えよ」

「いいの？ヒロシ」

「いいも悪いも、恭子がそいつを好きなら仕方ないよな」
せつはいきなり冷静になった。

「あなた達、離ればなれになったとき、お互いの思いは知らなかったんだっけ？」

「いや、お互いわかった」

「やっぱり、日本とアメリカに離れてた月日が大きかったのかな。あなた達もそれには勝てなかったか」

時間なんて問題ではないと思っただが、敢えてこう答えた。

「まあね、人は変わる。人の心も変わる」

「ヒロシの心は変わっちゃったの？」

「どうだろう、でも……」

「でも、何？」

「恭子は色んなこと考えたあげくアメリカに行っただ。これは恭子の望んだ結果じゃないのか。それに……」

「それに？」

「俺も苦しんだ」

6月28日

気分がむしゃくしゃするまま飲みに出た。酔いたかったので、ウオツカ、テキーラ、ウオツカ、テキーラ、ウオツカ……と順番に飲み、フワフワしてきた。

店を出て歩いていると、向こう側から歩いて来た女の人が俺のほうをじっと見てる。誰だ？もしかして俺に気があるのか？まあ、どうでもいいや、誘ってみよう。

「あの、もしよろしければ一緒に飲みませんか？」

「うふふふふ、イヤですねえ」

「あ、イヤですか。僕は全然イヤじゃないんですけど」

「何をおっしゃるの？酔ってらっしゃるんでしょ、先生」

「どうして僕の正体を？」

「うふふふふ、しっかりしてくださいよ。坂根ですよ。ほら、先生のとこで世話になってる坂根健志の母ですよ」

お、か、あ、さ、ん？何てことだ。よりによって教え子の母親を誘おうとした。あ、もう誘った後だ。

「あ、健志君のお母さん。すみません、てつきり……」

「てつきり、何ですの？」

こんなとき何て言えばいいんだろうか？

「てつきり、大学生さんかと」

「まあ、お上手、うふふふふ」

その、「うふふふふ」って、やけに色っぽく笑うのやめてくれない。

「うふふふふ、先生、女子大生がお好みなんですの？」

「いえ、そうではなくて、若い女性の代名詞というか……」

「それなら、女子高生って言うてくださいよ、うふふふふ」

それは何何でも無理があるだろ。

「いえ、お母様はそこまで幼くないでしょ？」

「うふふふふ、ものは言い様ね」

結局、坂根の母親の経営する店で何杯かただ酒を飲ませてもらっ

た。

「先生、今晚のことは秘密にしておきましょうね」
だって。別に誰に話してもらってもいいけど。

6月29日

酔って坂根の母親に声をかけた話を北にした。北はウケていた。

「僕も同じようなことがあるんですよ。あまり言いたくないけど」

「何ですか？教えてくださいよ」

「僕もね、酔っててね、声かけてきた女の子をホテルまで引つ張って行っただですよ。だって、向こうから声かけてきたんですからね」
確かに、北は、思考が結論に向かって突っ走るタイプだ。酔ってりやおさらだろう。

「で、初めは笑って『冗談はやめてください』とか言ってた女が、ホテルに近付くと抵抗し始めたんですよ。僕にも意地がありますからね。力づくでホテルに連れて入っただですよ」

どんな意地だよ。犯罪じゃないか。

「ホテルに入ったらひと安心じゃないですか。でね、落ち着いてよく聞くと『先生、やめてください』って言ってるんですよ、その女が」

普通は落ち着く前にちゃんと聞くんて。

「顔をよく見たら、ウチの塾の、高2の市川だったんですよ。ハハハハハ」

笑い事じゃないだろう。

「……………それって、ずいぶん気まずくないですか？」

「別に。よくある勘違いですよ。ことには及んでいないし。今も市川のクラスで授業があるけど、市川に気合が入ってないときに、『一緒にホテルに入った仲だよな』ってささやくと、やたら必死で問題に取り組むんですよ」

この人の「勘違い」って、どこからどこまでを指すんだろう。
だが、何故か、この人だけは敵に回したくないと思った。

6月30日

元塾生が亡くなった。19年の人生を終えた。
同僚の杉下と一緒に葬式に参列した。我慢していたが、耐え切れず泣いてしまった。ご両親の心情、他の身内の方々の心情、友人の心情、そして恋人の心情、何より、本人のことを思うとダメだった。涙が勝手に出て来た。

一旦帰宅し、着替えて塾に行ったら、杉下が「岸和田先生が泣くなんて思わなかった。びっくりした」なんて言ってるのが聞こえた。俺はどういう人間だと思われているんだろうか。そういう人間だと思われてるんだろうな。

だが、自分の教え子が犯罪者になることと、自分より先に逝くことが、先生として一番悲しいことだ。
安らかに眠れ。

7月1日

雨が降っている。憂鬱だ。

恭子に会うべきではなかったのかも知れない。過去のままにしておけば良かったのかも知れない。

7月4日

おれは、やはり恭子が好きだ。ずっと好きだった。その恭子がほかの男と結婚するかも知れない。それは仕方がないことだ。だが、

最後に自分の思いを伝えるくらいはしておこう。

恭子に会った。

「恭子、今更って気もするけど、言えるうちに言っておく。お前が人妻になってからじゃ言えないからな。俺はお前が好きだ」

「待ってよ。その『人妻』って何よ」

「お前、山添って人と結婚するんじゃないのかよ。山添さんを追いかけて日本に来たって話も聞いたし」

「山添さんときき合ってるわけじゃないし、日本に来たのもたまたまよ。でも、山添さんはすごい人なんだもの、好きは好きよ。一番好きじゃないけどね。幸せにはしてくれと思う。だから、プロポーズされたらどうするかわからないわ。受けるかも」

「そんなの幸せじゃないだろ」

「あなたにわかるの？未来がわかるの？わかるわけないでしょ。もしわかるなら、姉さんの命を救えたでしょ」

何も言えなかった。

「ヒロシ、もうこれ以上苦しめないで」

恭子の言葉に打ちのめされた。

7月7日

恭子に電話した。打ちのめされようが嫌われようが伝えずにはいられなかった。いきなり話した。

「恭子、俺とお前とはちよつと変わった関係だ。それはよくわかってる。互いに悩んで、苦しんで、今はそれぞれ自分の道を歩いてる。でも、そんなことはどうでもいい。今の俺はお前が好きなんだ」

「あなたにはどうでもいいことでも、わたしには大変なことなのよ」

「お前、俺が嫌いなのか？」

「いいえ」

「じゃ、山添さんが本当に好きなのか？」

「わからない。でも、あなたを見てると、あなたと一緒にいると、

想い出すのよ」

「何を？」

「あなたの心にも棲んでるでしょ」

7月8日

山添カズマさんが俺を尋ねてきた。勝利宣言でもかましに来たのか？会いたくないけど、会った。挨拶の後、山添さんが話し始めた。「恭子にプロポーズしました。一週間以内に返事がもらえます。その前にあなたにお会いしておきたくて。恭子からよくお名前はうかがっていましたし」

「はあ、でも、僕に会っても仕方ないでしょ。僕は恭子に振られてるんですから」

「振られても、あなたは恭子が一番好きだった人なんでしょ？わかりますよ」

「どうでしょうか。好きでも振られちゃおしまいでしょうが。それとも、恭子があなたを1番好きでないとイヤですか？」

「いいえ、何番目でも構いませんよ。僕の1番は恭子なんだから。

僕には恭子を幸せにする自信があります。恭子がプロポーズを受けてくれさえしたらね」

「大丈夫でしょ」

「さあ、どうか。もし、断られるにしても、その原因くらいは知りたいでしょ。だからこうしてあなたに会いに来たんです」

「でも、恭子はあなたにプロポーズされたら受けるかもって言いましてよ」

「それから気が変わってなければいいけど。でもね、好きだからわかるんです。恭子は幸せになろうとしていません。心がないって言うか。まあ、僕は恭子を幸せにできたらどうでもいいんです。できれば、恭子と幸せになりたいけど」

「幸運を」

「あなたにそう言われるのもおかしな気分ですね。でも、ありがとう」

7月14日

山添さんに会いたいと言われた。夜、山添さんの行きつけの店で会うことになった。授業後に駆けつけると、山添さんはもう飲んでいた。

「すみません、呼び出しちゃって」

「いえ、おごつてくれるんでしょ？」

「もちろん。今日ね、恭子の返事を聞きに指定された場所に行っただけです。どこだと思えますか？」

「わかりません」

「教会です」

「教会？」

「はい、教会。そこで式を挙げるんだなって思いました。いい感じの教会でした」

もう挙式の話かよ。山添さんが続ける。

「そこで、恭子が話をしてくれました。以前、クリスマス・イブに好きな人と2人でそこを訪れたこと。いつか、その人に思いが伝わるように祈ったこと。でも、その同じ教会でお姉さんを葬送したと。そのときに、好きな人への思いも封印したこと」

「・・・・・・」

「そして、見事に断られました」

「そうですね。なんて言っているのかわかりません。可哀想だなとも思うし、ザマミロとも思うし」

「はっはっはっ、正直な人ですね」

「すみません」

「いいえ。次はあなたの番ですね。でも、あなたは僕以上に大変ですよ。さっき言ったように、恭子は自分の心を封印しています」

「封印ですか？」

「そう。恭子は封印とは言わなかったけれど、封印です。封印って何のためにするかわかりますか？」

「いいえ」

「いつか誰かに解かれるために封印するんです。頑張ってください。幸運を」

この山添カズマは案外いい男かもしれない。いや、絶対いい男だ。俺が女なら、俺みたい男よりこいつに惚れる。何か、あらゆる点で俺に勝ってる気がする。

「山添さん、今夜はやっぱ僕がおります。飲みましょう」

山添さんと一晩中あちこち飲み歩いた。山添さんと別れた後、始発電車に乗り「教会」に行った。門から続く煉瓦の小道、庭の木々、白い美しい建物。妙に懐かしかった。

7月16日

恭子に会った。

「山添さんのプロポーズを断ったんだって？」

「ええ」

「あんなすごい男、滅多にいないぜ」

「山添さんが云々って問題じゃないの」

「何が問題なんだ」

「わたしの心」

「おまえ、その心が色んな人を振り回してるんだぜ」

「わかってる」

「大体、お前の心の中には誰がいるんだよ？俺はいないのか？」

「いるわ。あなたは大好き。もしかしたらと思って、かすかに期待して日本に帰って来たわ。でも、ダメだった。時間が経てば変わると思ったけど、変わらなかった。あなたにまた会えて、すごく嬉しい」

かった。わたしはあなたが大好きなのよ。こんなに好きなのになぁ……でもね、やっぱりダメなのよ。……どちらかが、心の中のどちらかが変わってくれればいいのにね。ごめんなさい」

彰子よ、お前、恭子の心にもいるんだよな。変わらないまま。二十歳のまま。

7月18日

高2の瀬川綾子が音楽に専念するために1学期いっぱい退塾する。偏差値70をはじき出すトップクラスの生徒がいなくなるのは残念だが、「がんばれ」と快く送り出してやった。塾長は例によってブツブツ言っている。まあいい。

瀬川のことに触れよう。すごい高校生なのだ。

彼女は勉強もすごいが、音楽、ピアノもすごいのだ。1度演奏を聴かせてもらったことがある。モーツアルトの曲だった。見栄や格好で弾いているのではなかった。将来何かの役に立つから弾いてます、というレベルのものでもなかった。鳥肌がたつほど見事だった。「何故モーツアルトなのか」と尋ねると、「好きなんです」と答え、瀬川は続けた。

「でも、美しすぎます。ちょっと音楽を知ってる人なら嫌になるくらいに」

「お前は嫌にならなかったのか？モーツアルトを聴いて」

「初めて聴いたときは理屈抜きにすごいと思いました。でも、幼かったからそのすごさの意味はわかりませんでした。何となく意味がわかった頃にはもう音楽にとっぷりでした」

「意味がわかった今でも音楽の道を選ぶんだな？」

「はい。わたしの才能なんて知れてるから、新たな音楽を作れるなんて思っではいません。でも、せっかくコンピュータがある時代に

生まれてきたんだから、もしかしたら新たなアレンジくらいはできるんじゃないかと思って。だから、コンピュータに必須の数学や英語も勉強しなくちゃならないけど、今は演奏に力を入れておかないと。芸大に入れないから」

「どうしてピアノなんだ？」

「それは、何故、琴やケーナなんかを選ばなかったかということですか？」

例えにバイオリンやフルートでなく、琴やケーナを出してくるところがすごい。質問の意図を把握しているのだろう。

「そうだ」

と言うと、瀬川は笑って答えた。

「多分、先生が空手じゃなくて陸上競技を選んだのと同じですね。体格や、向き不向きだけの問題じゃないでしょ？」

音楽にもスポーツにも多種多様なものがあり、優劣はないと思う。しかし、全てがメジャー（スタンダードと言ってもいい）なものではない。そして、メジャーでないもののほとんどは、民族のとか伝統的なとか郷土のとか呼ばれていないか？それをメジャーにしようと尽力している人もいるし、特殊な事情で一部のものにしておくべき儀式的なものもあるが、とにかく、世界中の皆が競おうと思うよりは保存しようと思うものだ。（それに価値がないと言っているのではない。一流であれば何者をも感動させると思う。誤解のないように）

瀬川は、音楽、それもピアノという超メジャーなものを、明確な自分の意志をもって選んだ。どれくらいの間がこの意志をもって生きているのだろうか。瀬川はモーツァルトではないから苦勞するだろうし、その苦勞が報われないかも知れないが、とにかく、自分の意志で戦おうとしている。

瀬川の空手と陸上競技の例えに、俺はこう答えた。

「そうかもな。誰にでもわかる表現手段を選ぶのは結構つらいけどな。俺は体を壊してダメになったけど、お前は行けるところまで行けよ。多分、3、4年後、お前は日本にいないと思うけど、応援してるよ」

「ありがとうございます。でも、先生は何故普通の学校や大学で教えないんですか？」

「確かに、今はそっちの方がメジャーだよな」

「何となくわかります。……この先、お互いどこにいるかわからないけど、わたしも先生を応援してます。ピアノを聴いてもらって良かった」

瀬川は微笑んだ。

俺の目の前でブツブツ言っている塾長に言った。

「塾長も瀬川のピアノを聴いてみたらどうですか」

「ピアノの良し悪しはわからない」

「いや、瀬川のピアノは誰にでもわかりますよ」

「そうなのか」

「はい」

「そうか。じゃ、仕方ないな」

あっさりと引き下がった。ウーン、もしかすると塾長は侮れない人なのかも知れない。

7月19日

ああ、忙しい。保護者との面談が組まれている。95%母親が来塾する。内容は言うまでもなく、成績、進路だ。他人の子どものことまで知るか（もちろん、俺自身の子どものなどいないのだが）と言いたくもなるが、俺もプロだ、キツチリ面談をこなしている。

具体的な個人のことは親の方がよくわかっているのは当然だ。「ウチのは××だ」というわけだ。しかし、全般的な中学生、高

校生のことなら俺の方がわかっている。中でも成績、進路のことなら、確実に俺の方がよくわかっている。だから、この面談は家庭と塾、双方の情報交換の場でもある。互いに得るものは多い。特に俺達には塾生の家庭での様子や思いがけない性格、行動がわかり、指導に活かせる。忙しいが大切な面談なのだ。

ところが、中には驚くような母親もいる。話そのものや言葉遣いがとんでもない母親や、格好がとんでもない、いや、ぶっ飛んでいる母親にはもう驚かないが、槇村の母親はすごかった。

面談は分刻みで入っているので、決まった時刻に相手が来ないと後の予定がずっと狂ってしまうのだ。しかし、槇村の母親は約束の時刻を15分過ぎても現れない。控え室を覗いてもいない。槇村家に電話したら母親はとくに家を出たと言う。おかしい。途中で何かあったのだろうか？

仕方ない、ひとまずキャンセルだ、と、次の面談の資料を取りに職員室に戻ったら、杉下の机で誰かが突っ伏して眠っていた。いびきまでかいていた。槇村の母親だった。

学生の時分から割と長い間塾の先生をしてるけど、面談に来て、勝手に職員室に入って眠っちゃった人はこの人だけだ。多分、この先もこの人だけだろうな。

後で杉下がぼやいていた。

「変だなあ。机の上に置いていたプリントが水でにじんでるんですよ。岸和田先生、意地悪してないですか？」

してないよ。俺はね。

7月22日

夏期講習が始まった。朝から晩まで忙しい。ああ、忙しい。

でも、忙しいと色んなこと考えなくて済むから、悪いことばかりじゃないよな。

7月25日

宮本が3日ほど講習を休むという。何でも、放送コンクールで全国大会に出場することになったのだそうだ。

「お前にそんな才能があつたのか」

「うん、汐里が丘高校の校内放送は僕が仕切ってる」

「うそだろ？」

「ホントだよ。だって、放送部の部長なんだから」

意外だ。意外すぎる。

「僕の放送、評判いいよ。昼休みに放送するんだけど」

「お前がどんな評判を取ってるって言うんだよ」

「この前なんか、お奨めの本のコーナーで、教えてもらった『O嬢の物語』『新O嬢の物語』『家畜人ヤプー』の紹介したら、先生達から絶賛された」

どんな先生達だよ、いったい。頭が痛くなってきた。

「そうそう、『アムステルダム小さな窓』がどうしても見つからなくて。学校の先生から見つけろってせかされてるんだ。見つけなくてよ」

宮本、お前は先生に恵まれたよな。塾でも学校でも。

8月2日

高2の三井が相談があるという。普段はめちゃめちゃ明るい三井が暗く沈んでいた。余程のことだ。

「どうした？」

「先生、わたしね……、赤ちゃんができたの」

「赤ちゃん？」

「うん」

うわあ、こりゃヘビーだ。いや、ベビー（くだらない！）か。俺

に相談されても困るよな。俺の赤ちゃんならともかく。

「何て言っていていいかわからないけど……」

本当に何て言っていていいかわからないのだ。

「おめでとう」

「……」

「どうしたんだ？」

「うん、『おめでとう』なんて言われるって思ってたから」

「そうか？新しい命が宿ったんだぜ、お前の中に。めでたくないか？」

「変なの。何かおめでたい気がしてきた」

「だって、好きな男の赤ちゃんなんだろ？」

「うん」

「相手はこのこと知ってるのか？」

「まだ」

「早く話せよ。俺よりもそいつに相談したほうがいいと思うぜ」

「だって、まだ高校生なんだもの。受験もあるし」

「高3なのか？」

「うん。同じ学校の先輩」

「ありがちな」

「悪かったわね、ありがちで。でも、どうしよう？」

「俺の赤ちゃんなら産んでもらうけどなあ」

「もう、真面目に考えてよ」

「俺はカトリックじゃないけど、お腹の中にいる赤ちゃんも命に変わりないと思ってる。だから、普通なら産んで欲しい。でも、お前も相手もまだ高校生だ。普通じゃない」

「同じくらいの年で母親してる子もいるわよ」

「ああ、だけど、これから二十歳前後の時が、人生で一番面白い時、俗に言う『青春』の中心になる時だろ？そのときにお前は子育てをしなきゃならない。同じ年齢の女の子達が、恋とかファッションとか旅行とか楽しんでるのに、子育てだぞ」

「うん」

「そんな楽しみと引替えていうんじゃ、お腹の赤ちゃんも浮かばれないだろうが、やはり、そんなことも考えてしまうよな」

「どうしよう?」

「お前次第だ」

「彼の気持ちは?」

「彼には必ず話せよ。だけど、まず、間違いなくうつらたえる」

「そうなのかな?」

「絶対。だが、その後だな、そいつの価値が本当に試されるのは」

「うん。親は?」

「相談したほうがいいと思う。いや、しなきゃダメだ」

「怒られるわ」

「当たり前だ。それくらい覚悟しろ。だが、俺はお前の味方だ。お前が決めたことなら俺の考えと違ってても絶対に尊重する」

「先生……」

「だから安心して結論を出せ」

8月5日

三井、一時休塾。

8月18日

夕方、恭子から電話があった。

「今日、姉さんのところに行ったの。チョコレートがいっぱいお供えしてあったわ。ヒロシでしょ?ありがとう」

彰子はチョコレートが大好きだった。彰子の声が甦る。

「太りたくないからあんまり食べられないの。だから、おいしいチョコレートを少しだけいいの」

そう、俺が供えたのだ。ほかの誰がチョコなんか供えるか。

もう太る心配などしなくていいから、いっぱい食べる。

授業と授業の合間に片桐さんがやって来た。

「ついさっき、先生に会いに綺麗な女の人がいらっしゃいました。『今は授業中ですけど、もうすぐ終わりますよ』って申し上げたんですが、『元気で授業してるならいいわ』って、お帰りになったんです。お名前をうかがう間もなくて………。一応、お知らせしておこうと思って」

「ありがとうございます。きっと、知り合いのお医者さんですよ」

仕事の後、安達が飲みに誘ってくれた。バーで安達がピアノを弾き始めた。

「最近弾いてないからな。もしかしたらお前より下手になっちゃったかもしれないけど、まあ聴いてくれ。今夜くらい、いいだろ」

Eric Claptonの”TERRA IN HEAVEN”だった。生徒に聴かせたら仮定法の勉強になるなあ、何てことを思いながら口ずさんだ。

安達の弾くピアノの音色は優しかった。

俺は死んだら彰子に会えるんだろうか。しっかり生きてきたよと、胸を張って会えるんだろうか。

今日は彰子の命日だ。

9月3日

生徒達が中学校で使っている英語の教科書に、ある物語が出ている。「戦時中、幼い姉弟が傷つきながらも郊外に逃れて来る。弟は母親を恋しがって泣くが、母親は死んじやってる。そこで、姉が健気にも母親代わりになり歌を歌ってやりながら弟を抱きしめる。そのうち弟は息絶えるが、姉はずっと歌い続ける。そして、姉も死ん

でしまう」という内容だ。

英文を読みながら日本語訳を進めていく。

「ここは学校の試験じゃ単語くらいしか出ないんじゃないのか？ただの読み物だし」

そう言つと、白井が代表して答えた。

「うん、学校の先生は『感動的でしょ！先生はこのお話が大好きです。次の試験はこのお話を中心に出题します』って言つてたよ」

何でこんなありふれた話に感動するんだよ、その先生は。感動するのは勝手だが、このレベルの感動を生徒に押し付けてもなあ、対処に困るぜ、生徒も。

（抗議されても困るのですが、平和に対する思いや祈りを茶化すつもりは毛頭ございませんので。あらかじめお断りしておきます）

それで、よせばいいのにやってしまった。

「そうか。でも、どうして弟が死んだかわかるか？」

「戦争で傷ついたからでしょ」

と、白井。

「違うよ。戦争は関係ないんだよ。実は、お姉ちゃんが強く抱きしめすぎて窒息死しちゃったんだよ、弟は」

「うそだあ」

「本当だよ。ほら、ここに書いてあるだろう。held tight」

「あ、ホントだ」

「わかったか。ザマミロ。学校の先生にも教えてやれ」

「うん、そうする」

（何度も申し訳ありませんが、決して平和への思いを茶化しているわけではありません）

9月5日

俺としたことが、先日の白井の目の異様な輝きを見落としていた。あの悪魔はホントに学校の先生に俺のくだらない解釈を教えてしまったのだ。「なんて塾なの！通うのはやめなさい！」と言われたらしい。更に「どういう名の先生なの？」と訊かれて、白井は俺の名前を言ってしまったのだ。「岸和田」という名を聞いて引きつっていたそうだ。その先生の名は横川。またも、横川。向こうは「またも岸和田」って思ってるだろうな絶対。

ま、あまりくだらないことは言わないようにしよう。学校の先生だけじゃなく、最近は日本中に小うるさい人が多いから。

9月6日

授業が終わって、生徒達を送り出して、してもしなくても生徒達には何の影響もないけど、「しろ」って塾長が言うから仕方なくしてた雑務が終わったらもう11時前だ。帰ろうと思ったがまだ残っている生徒がいるみたいだ。教室を覗いたら、数学の甲斐が高校生に何か教えていた。

11時を回った頃に生徒達は帰って行った。

「じゃあ、甲斐先生、僕達も帰りましょうか」

帰り支度を始めると、さっき帰って行ったはずの井上和宮が走り込んできた。

「先生！大変！涼子が、変な人達に捕まっちゃった！」

「何！どこだ！」

「そのスーパ―の駐車場」

そっぴゃ、夜になると、たまにおかしな連中が車を止めてるよな。「何人だ？変なのは」

「3人。いきなり声かけて来て、無視して行こうとしたら、抱きついてきて。私達は逃げられたけど、涼子が……………」

うーん。この2人じゃなくて青山涼子を捕まえるとは、変な奴らも見る目がある。いかん、そんなこと考えてる場合じゃない。

「車はあったか？」

「うん」

まずい、まず過ぎる。青山が危ない。

「わかった。すぐに110番しろ」

スーパールの駐車場まで歩いて3分ほど、今から走っていけば間に合うか。が、車が走り出してたらアウトだ。

「先生、行きますよ」

甲斐に声をかけたが、

「僕はここで警察に連絡します。この子達も落ち着かせなきゃ」

だそうだ。ええい、1人で行こう。甲斐のようなのはかえって足手まといだ。入り口の傘立てから、忘れ物の傘を1本取って走り出した。

駐車場が見えた。結構明るいじゃないか。こんなところでよく拉致できるよなあ。でも、ほとんど人気がないな。どこだ？と、車が動き出した。アレか！「こっちに来い！」と祈ったが、遠ざかる方向に動いて行く。何とか車を止めなきゃ。そのまま走り続けた。あと、5m、4m、だが、追いつかない。俺は傘を投げつけた。当たった。こら、大事な（はずの）車に何かぶつけられたんだぞ。怒って車停めて出てこいよ。おっ、止まった。やった！早く傘を拾わなきゃ。唯一の武器だ。

傘に手が触れたのと同時に、後部のドアが開き、男の足が出て来た。低い姿勢のまま傘をフルスイングして、男のすねを思いっきり打ってやった。手ごたえがあった。傘が折れたのがわかった。何か叫んで、男は後部シートから体半分を出し、すねを押さえて前かがみになっている。いい高さだ。そのあごに、これまた思いっきり右の正拳をくらわしてやった。男はそのまま後部座席にのびた。俺の右手もムチャ痛い。

そのとき、後頭部にすごい衝撃が走った。ありもしない光が目

見えた。やられた。すごく痛い。泣くほど痛い。が、まだいけそう
だ。でも、これ以上食らうとまずい。後頭部を押さえて転がって逃
げた。しかし、今度は背中が思いつきり痛かった。蹴られたんだ。
こりゃ、まずいや。警察、早く来いよ。俺が車でちよつとスピード
出したときや、自転車で傘さして二人乗りしてるときは追いかけて
まで来てくれるじゃないか。だが、青山は連れて行かれずに済みそ
うだ。良かった。できれば今のうちに逃げて欲しいが。

怖そうなスキンヘッドの兄ちゃんが胸ぐらをつかんで立たせてく
れた。が、腹を殴られた。効く。また、転がってしまった。すかさ
ず棒状のものが飛んでくる。木刀だ。当たり所が悪けりや死ぬぜ。
何とかしなきゃ。お、手に何か当たった。傘の残骸だ。木刀を持っ
たデカイ奴に投げつけた。「デカイの」が一瞬ひるんで後ろに下が
った。俺はその隙に立ち上がって車を背にした。これで、後ろから
やられることはない。正面に「デカイの」が、斜め左に細身の「ス
キンヘッド」がいる。ああ、後頭部が痛い。右手も痛い。早く病院
に行きたいよ。普通ならここで逃げるところだけど、青山はまだ車
の中だ。

「デカイの」が間合いを詰めてくる。が、「スキンヘッド」は動
かない。下手に俺のそばに来ると自分が木刀を食らうかも知れない
もん。チャンスだ。木刀の動きだけ見ていれば良い。木刀持つて
るのに使わないお人好しなどいない。「デカイの」は木刀を右手に
ぶら下げたままだ。普通は構えてから間合いを探るものだが、余裕
があるのか馬鹿なのか、先に間合いに入って、その後木刀を動かし
始めるつもりらしい。木刀が動き始める瞬間が勝負だ。・・・・・・
動いた！左の正拳を「デカイの」のみぞおちに打ち込んだ。一瞬遅
れて左の肩に木刀をもらったが、次の瞬間に右の拳をあごに向かっ
て突き上げた。のけぞる「デカイの」の腹にすかさず右の前蹴り。
「デカイの」は倒れて胎児のように体を丸めた。まだ木刀は持った
ままだ。よほど好きなんだろうな、木刀が。でも、こんな奴に好か
れちゃ、木刀も生まれて来た甲斐がない。あ、そっぴや甲斐の奴、

何してんだよ。警察が来る気配もないじゃないか。

右手が痛い。後頭部はもつと痛い。もう、逃げてもいいだろ。だが、青山は車から出ようとしない。仕方がない。引つ張り出して一緒に逃げよう。車の方を向いたら、またしても「スキンヘッド」だ。俺の横腹に強烈なパンチが入った。吐きそうだ。間違いない、こいつはボクシングをやってる。とつさに両手で頭を抱え込むようにガイドした。頭部にパンチをもらうわけにはいかない。が、何発もパンチが飛んで来る。こいつは強いぜ。色々なところにパンチが入る。ボディに入ると思わず呻き声が出る。やられるのは時間の問題だ。ええい、一か八かだ。両手を頭からはずし、右手を腰の高さに構え、左手は奴のパンチがよく見えるように目の高さに構えた。奴の右肩から二の腕にかけてがわずかに動いた（ような気がした）。来る！右足を左方向に一步踏み出す。顔への右ストレートをよけながらも、その右手を取って、背負い投げ！のつもりだったが、パンチが速過ぎて捕らえられなかった。どころか、捕らえてるはずの右手がないものだからバランスを崩して前につんのめった。と、額に硬い物がぶつかった。痛さと衝撃でその場に崩れ落ちた。許せ、青山、ダメかも知れない。が、何故か俺の下で「スキンヘッド」がうなってる。そうか、俺の額がこいつの額があごに当たったんだ。タイミングがずれて、フェイントになったんだ、頭突きの。フェイント頭突きなんて初めてしたぜ。ザマミロ。

後部座席でのびてる男を外に出し、青山を見ると、ガムテープがぐるぐると両手、両足に巻いてある。こりゃ、逃げられないよな。

「青山！大丈夫か」

「うん、先生も大丈夫？」

「ああ、あいつらがのびてるうちに行こう」

ガムテープをはがし終わりがけたとき、「デカイの」が立ち上がるのが見えた。残りのテープを急いではがし、2人で車外に出た。「スキンヘッド」も動き始めた。「デカイの」が行く手を遮るように立っている。木刀は手にぶら下げたままだ。学習能力がないのか

？だが、俺もボロボロだ。ここまでボロボロにされたのは久しぶりだ。

「先生」

青山が俺にしがみついてきた。

「よし、大丈夫だ」

言っではみたが「スキンヘッド」もいるし、2人を1度に相手にはできない。だが、お前は逃がす。青山にささやく。

「走れるか？」

「うん」

「俺が正面の奴に飛びかかったら、すぐにその脇を走って逃げろ。何があっても走れ。俺もすぐ行くから」

こんなときにあれこれ考えさせてはダメだ。有無を言わず行動させなくては、上手くいくものもいなくなる。

「イチツ、ニツ、サンツ、それっ！」

青山の背中を押し、思いつきりダツシュして体ごと「デカイの」にぶつかった。背中に痛みが走り、どっちが空でどっちが地面かわからなくなったが、スカートが走って行くのが見えた。良かった。

「デカイの」は転がっている。もう起きてくるなよ。

かろうじて立ち上がった俺の前で「スキンヘッド」が構えた。強いよなあ、ボクサーって。でも、ただの塾の先生だけど、俺も結構強いんだぜ。後頭部と額と背中と右手はとっても痛いけど、ふらふらだけど、青山は逃げたけど、こいつとは勝負しなけりやならないいや、勝負したいんだ。

「スキンヘッド」が右ストレートを出したのと、俺が左の拳を突き出したのは、ほぼ同時だった。が、頭に強い衝撃を受けた。負けだ。意識が遠のいていった。

目を開けたら、90度の角度に青山の泣き顔があった。

「先生！気が付いたの！良かった」

アスファルトに横になっていた。ただ、頭だけは青山のひざの上

だった。

「おつ、青山のひざ枕だ。ラッキー」

「馬鹿！このまま目を開けなかったらどうしようって……」
青山の泣き顔が、もっと泣き顔になった。違うな。じゃ、比較級の泣き顔になった。これも変だ。頭やられておかしくなったか。

「奴等は？」

「2人は車で逃げたの。もう1人は倒れてる。あれからすぐ、井上さんと宮さんが近所の人を連れて来てくれたの」

頭を動かすと、井上と宮が見えた。知らないおじちゃんも何人かいる。その足下に「スキンヘッド」が転がっている。ダブルノックアウトか。だが、俺は女子高生のひざ枕、奴はおじちゃん達に囲まれておねんね。こりゃ、俺の勝ちだろう。

「こつちです。速く」

甲斐の声だ。警官を連れて来たらしい。遅いんだよ。

「岸和田先生、大丈夫ですか？」

甲斐が尋ねたが、どこをどう見たら大丈夫に見えるのだろうか。

「いいえ、大丈夫じゃありません。このザマです。警察が遅いから」「すみません。井上と宮に状況をきちんと確認してから110番したもので」

確認だ？座ってる生徒相手に授業してるんじゃないんだぜ。

「はいはい。確認は大切でしょうからね」

いつまでもひざ枕してもらっているわけにもいかない。青山に肩を借りてゆっくり立ち上がった。あちこち痛い、特に後頭部が激しく痛い。それと、右手に全く力が入らない。

警官に両脇を支えられて「スキンヘッド」が立ち上がり、俺を見ろと言った。

「あんた、最初からカウンターを狙ってたのか？」

「そんな上等なもの狙うかよ。おまえのパンチなんてくらう予定じやなかったよ」

「なんで左だったんだ？右利きだろ？」

「お前が左にいたから。右だと間に合わなかったさ。それに、右手は痛かったんだよ」

「そうか」

「引き分けだな」

「スキンヘッド」はニヤツと笑った。その後連れて行かれた。知らないおじちゃんが話しかけてくる。

「でも、先生？ですか、相手が3人いるのによく生徒さんを助けようと思いましたね。普通はここまでしませんよ」

俺はするんだよ。俺にとって、生徒は息子で、娘で、弟で、妹で、恋人（女子生徒に限る）なんだよ。場合によっちゃ命も賭ける。

「ええ、普通じゃないもんで」

そう答えると井上と宮が笑いながら言う。

「確かに普通じゃないわね」

他人に言われると面白くない。

9月7日

昨夜、あれから、病院に連れて来られた。外傷の手当ての後、眠った。今朝は早くから起こされと頭部の検査をされた。その後、午前中いっぱい警察の事情聴取があった。警官が2人で根掘り葉掘り訊いてくる。何か俺の方が悪いことしたみたいだ。自分の生徒を助けて何が悪いのだろうか。気分が悪い。

塾長が来た。来なくていいって。治りが遅くなるから。「授業は心配しなくていいから、ゆっくり治せ」とありがた言葉を残して去って行った。仰せの通りにゆっくり治すから2度と来るなよ。

表向きは「病気で休み」ということにしてもらっている。甲斐、青山、井上、宮には昨夜のうちに口止めしてある。悪いことしたわけじゃないけど、塾の先生が乱闘の当事者というのも格好悪い。

昼過ぎ、青山が母親と一緒に来た。やたら感謝されて恥ずかしかった。しかも、2人して居座って色々世話を焼いてくれた。ありが

たいが、そこまでしてもらっても困る。いいと言つのに、青山が夕食まで食べさせてくれた。確かに右手が良く動かないので助かったが、「はい、アーンして」なんて言われたのはいつ以来だろう。照れてしまった。

「なんか、新婚さんみたいだね」

青山が言つたので、ますます照れてしまった。

9月8日

安達とせつが見舞いに現れた。病院では携帯電話が使えないから、安達にだけは「入院してるからかけてくるな」と言っていたのだ。せつまで連れて来るなよな。

安達が大笑いして言つた。

「ヒロシ、いいザマだな。お前、喧嘩はめつたなことじゃ負けないからいい気になってたんだろうが、世の中にはお前より強い奴もいるってことだ。心を入れ替える」

この馬鹿は何を言っているんだろうか。無視、無視。せつが尋ねてきた。

「まさか頭じゃないでしょうね？」

「その頭だよ。木刀でやられた」

「馬鹿ねえ、どうして。あなたらしくない」

「仕方ないよ。生徒を助けなきゃならなかったんだよ」

「せつさん、こいつは自分の生徒は恋人と同じくらい大切なんですよ」

「安達、うるさいんだよ」

「だがな、お前ごときが体張ったってどうにもならないこともある」「そうよ、ヒロシ、大切なものなら守りなさい。でも、だらしないこととして守りきれないようなら下手なことせずに初めから警察に任せなさいよ」

「また道場にでも通つて修行しなですか？」

こいつら、俺の怪我自体より、俺が乱闘で怪我したこの方が気になるらしい。俺が弱くなったと思ってるのか。ああ、悔しい。普通の喧嘩ならこんなことにはなっていないさ。少なくともやられる前に逃げてるぜ。

「で、頭、どうなの？」

やっと体の心配か。

「まだわからない。検査の結果が出てない」

「せつさん、大丈夫ですよ。こいつにはよくあることだから」

「大丈夫とは思っけど、結果が出たらすぐに知らせなさいよ」

「ああ、わかった」

「ところで、恭子さんは今度のこと知ってるの？」

「いや」

「え、どうして？」

「わざわざ知らせることもないだろう」

「俺が知らせておいてやるよ」

「馬鹿、要らないことするな。これ以上俺のことで苦しめるな」

「思い上がるな。苦しむかどうかは恭子ちゃんの問題だ。それに、

お前までひねくれてどうすんだよ。素直になれ」

「そうよ、ヒロシ。素直が一番」

こいつら、怪我で弱ってる俺に何を言いに来たんだ。

9月9日

頭部の検査の結果が出た。中身に異常なし。外傷のみ。退院だ。

9月10日

恭子から電話があった。怪我のことを聞いたらしい。もう退院したと言うと、少し声が柔らかくなった（ように聞こえた）。

安達からも電話があつた。退院祝いに「ごちそうしてくれ」と言う。せっかくだからフランス料理にしろと言ったら、あっさりOKしたからびつくりした。

9月12日

約束したレストランに行ったら、安達はいなくて、何と恭子がい
た。恭子はせつと待ち合わせだったと言う。やられた。が、「もう
料金はいただいていますから」というウェイターの言葉に心が動い
た。恭子も、

「やられたわね。もう、食前酒飲んでるからあきらめるわ」

シェリーらしき酒が入ったグラスを振って見せた。俺も素直に好
意に甘えることにした。が、恭子が酒飲んでる。知らないよ。

せっかくだからワインもちよつと奮発した。よせばいいのに恭子
も「ただのお酒だと一段とおいしいわ」と勝手なことを言いながら
飲んでいた。頼むから飲まないでくれと言つのに、飲んでいた。案
の定、酔って目がすわってきた。レストランを出て、恭子がわけの
わからないことを言い出す前に退散しようと思つたが、まだ飲むと
言い張る恭子を放っておけず、よく行く店に連れて行つた。

勝手にカクテルを何杯か注文して飲み、ますます目がすわってき
た。あきらめよう。

いきなり恭子が叫んだ。

「わたしのこと、いつたいていどう思ってるのよ！好きなの？好きな
んだったらプロポーズしなさいよ！さあ！」

こいつだけは、今までさんざん好きだと言つても頑として聞き入
れなかったのに、自分からプロポーズしろとはどういうことだ？や
っぱりわけがわかんなくなってる。しかも、大声で叫んだものだけ
ら、他のお客さんも店の従業員もこちらに注目してる。いや、目じ
やないな。全身耳にしてこちらをうかがっている。店中緊張してい
るのがわかる。

「さあ、早くしなさいよ。いったい何年あなたのことを……………」
。 いったいいつまで待たせるのよ……………」

恭子の声がつまる。俺の胸もつまる。

「わかったよ。恭子」

ここはストレートに言ってしまおう。

「俺と結婚してくれ！」

「イヤよ！」

恭子がきつぱりと叫んだ。

はあ？何だつて？「イヤよ」って……………」

店中の空気がゆるんだ。と言うより、店中がストンとすかされてしまった。そのうち「クツクツクツ」なんて忍び笑いが聞こえてくる。隣の席のカップルは必死で口を押さえてるが、肩が小刻みにふるえてる。ウエイトレスが俺達の横を通り過ぎるとき「プツ」と吹き出した。なぜか恭子も笑っている。

もうあの店には入れない。

9月13日

昨夜は悪酔いした。今も気分が悪い。何が「イヤよ！」だ。ああ、腹が立つ。

授業も何となく乱暴になっている。公私混同してるのが自分でもわかる。生徒も気付いてるに違いない。白井が口を開く。

「先生、はつきり言っただけ今日は荒れてるね。どうしたの？」

どうせまともな授業にはならないから、昨晚のことを聞かせてやった。生徒達はウケていたが、残りの授業時間を使って楽しそうに俺と恭子の今後について討論してくれた。「先生も変わり者、恭子さんも変わり者、変わり者同士でうまくいくに違いない」という結論をだしてくれた。ありがたいことだ。

9月15日

三井が会いたいと言うので、指定の喫茶店に行った。

「先生！」

「よお、久しぶり。連絡よこさないからどうしたのかと思ってた」

「ごめんね。色々あって」

「で、どうした？」

「産むわ。高校生だけどママになる」

「そうか。おめでとう。俺より随分早く親になるんだな。何か感慨深い」

「うん。立派な子を産んで、立派に育てるわ」

何か泣けてきた。

「先生、泣かないでよ」

「悪いな。でもダメなんだよ、こついうのって。すぐ涙腺がゆるむ」

「先生のおかげよ」

「俺は何もしていない。『金八先生』じゃないしよ」

「ううん。相談したとき、まず『おめでとう』って言ってくれた。

それがすごい力になった。本当言うと、それまでは墮そうって思ってたんだから」

「お前の親や相手は？」

「最初はみんな産むのには反対だったわ。わたしも何度かそう思いかけたけど。やっぱり、先生の言うように『好きな男の赤ちゃん』だもの、生まない後悔だけはしたくなかったの。最後にはみんなわかってくれた。祝福してくれた」

「お前、本当にいい親を持ったな、いい男捕まえたな」

涙がまた出てきた。

「泣かないでよ。わたしまで泣けてきちゃった」

2人でしばらく泣いていた。周りで見てたら「何事だ？」と思うだろうな。

「お前、高校はどうするんだ？」

「休学する。ひと段落ついたら、また2年からやり直す。どこかに

入り直してもいい」

「相手は？」

「大学に行ってもらうわ。この子のためにもしっかり勉強してもらわなくっちゃね」

三井はお腹を押さえた。

「大丈夫なのか、お金は？」

「ウチの親も、向こうの親も援助してくれるって。て言うか、両方の親にべったりよ」

「お前ら、親に一生頭が上がらないなあ」

「イヤでも孝行するわよ」

「良かった。本当に良かった」

「ありがとう。先生、わたし達ね、わたしが高校卒業したら正式に結婚するんだ。何年先かわかんないけど。そのときは絶対結婚式に来てね」

「ああ、お前達とお前達の子どもを見に、絶対行く。歌も歌ってやる。挨拶もしてやる。もちろんご祝儀は6桁持って行ってやる。それも、アメリカドルで」

「ありがと、ご祝儀以外は期待してるわ」

「おう、立派な赤ちゃんを産めよ」

そして、三井から退塾の届けを受け取った。気持ちのいい退塾だ。

9月16日

せつが話があるという。お昼に、せつが勤めている病院近くにある公園で会った。

「お前達、はめてくれたな」

「いいじゃない。少しは進展があったようだし。恭子さんにプロポーズしたんだって？」

「何で知ってるんだよ」

「恭子さんから聞いたのよ。恭子さん、かなり酔っててしっかりと

は覚えてないようだけど、ヒロシからプロポーズされたみたいって、真剣に悩んでたわよ」

「……………真剣にねえ。またあの「イヤよ!」が耳に聞こえてきた。」

「断られたんだよ。『イヤよ!』ってね」

「酔ってる恭子さんが真面目に物事を考えるわけがないでしょ。普段とは天使と悪魔ほど差があるのに」

「そりゃそうだけど。大体あいつがプロポーズしろって言うからしたんだぜ」

「しろって言われてホイホイするあなたもあなたよ」

「すみません」

「謝んなくていいの。それより、どうするのよ、これから」
「これからって?」

「じれったいわね、恭子さんと結婚するの?しないの?」

「あのね、俺はもう何回も自分の気持ちをあいつに伝えたよ。この前みたいに酒が入ってるときじゃなくて、あいつがまともなときに」
「それで?」

「ダメ」

「そうなの」

「ああ、そうなの」

「恭子さんの気持ちを考えたことあるの?」

「あるよ。毎日考えてる」

「どういう結論に達したの?」

「わかんない。ただ、俺は恭子が大好きだってことだけは確か」

「恭子さんもあなたのこと絶対好きよ」

「俺もそう思う。でもなあ」

「しっかりしなさいよ」

「どうしっかりしていいか見当がつかないんだ。それに、俺がしっかりする、しないの問題じゃないような気がするし」

「……………彰子?」

そつだ、彰子だ。彰子が、いや「彰子がいた」そして「彰子が死んだ」ということが、どうにもならない事実として存在する。

「やっぱりね。彰子か」

「仕方ないのかな？」

せつは問いかけには答えずしばらく俺の顔を見ていた。そして、また話し始めた。

「あのね、いつか彰子が話してくれたことがあるの。馬鹿げてるって思ったから、そのときは笑って済ませたんだけど……。彰子是这样言ったの、『ヒロシと恭子はいつか惹かれ合うような気がする』って」

「惹かれ合う……って」

「『もし本当にそうなら？』って訊いたら、『最初は悲しいだろうけど許すと思うわ』って。何か、生きてるときから、自分の死も、ヒロシと恭子さんのことも全てわかってたみたいな言葉だった」

そつだ、俺にもわかってる。気付いてる。

「そして、今のヒロシはわかってる。もし彰子……」

「やめる！」

俺はせつの言葉を遮った。

「それ以上聞きたくない」

せつはうなずいた。

「わかってるんならいいわ。でも、そこから始めないと何も進展しないわよ。残酷かも知れないけど。じゃあ、遅れるといけないから行くわね」

せつは歩き始めた。

病院へと続くイチヨウの並木道を歩くせつの後姿は絵になっていた。もし、せつが振り返って俺を見たらどう思うのだろうか。絵になっているのだろうか。背景にしか過ぎないのだろうか。それとも、絵に付いた情けないシミなのだろうか。

9月18日

深夜、せつを誘って海までドライブした。尋ねたいことがあった。本当は答えはわかっていいるのだが、せつに「そうだ」と言って欲しかったのだ。まるで、母親や友人の支持がないと何もできない甘えたガキみたいだと、自分でも思っていた。それでも、せつの言葉を聞いたかったのだ。車を降りて砂浜沿いの遊歩道を歩き、ベンチに腰を下ろした。辺りは暗かった。夜の真っ黒な海。砂浜にも遊歩道にも、もちろん海の中にも、誰かがいる気配はなかった。

俺は彰子との思い出をとりとめもなくせつに語った。せつは黙って聞いていてくれた。

「一目惚れだったんだ。俺は彰子のが好きだったんだ。本当に」何度目かの「本当に好きだった」の後で、せつが口を開いた。

「ヒロシの彰子への思いはわかる。でもヒロシが今愛しているのは恭子さんよ」

「彰子は許してくれるかな？」

「許すと思うわ」

しばらく間をおいた後、俺は思い切って尋ねた。

「もし、彰子が生きてても？」

「ええ」

「たとえ彰子が生きてても、俺はいつか恭子を好きになる。間違いないか？」

「間違いないわ」

遊歩道の端の方に人影が見える。もう、夜明けが近いのか。

「そうか」

「もう、いいんじゃない？彰子は許してくれるよ。だって生きてるときから許す準備をしてたんだもの。きつと願ってるよ、あなたと恭子さんが幸せになることを。でも、ちょっとだけ意地悪したかったのよ。今頃はペロツと舌を出してるわよ」

「意地悪か。当たり前だな。彰子も好きだったし恭子も好きだって言っくんじゃ、意地悪のひとつもしたくなるよな」

遊歩道の人影が次第に大きくなる。かばんを提げた女子高生だ。ずいぶん早いが通学途中なのだろう。辺りがかなり明るくなっていた。

「せつ、いいんだよな、彰子と恭子が2人とも俺の心について」

「いいのよ。彰子への思いがあるから恭子さんを愛せない、恭子さんを愛しているから彰子への思いがなくなる、なんてうそはやめてね。ヒロシには彰子への思いもあるし、恭子さんへの愛もある、それが真実よ。だって彰子は死んじゃったんだから。恭子さんは生きているんだから」

「彰子の死が俺を曖昧にしてるんだな」

「そうよ、彰子が生きてたら、あなたはこんなに迷わない。必ず恭子さんを選ぶわ。彰子が死んだからみんな苦しむのよ。悪いのはあなたでも恭子さんでもない、彰子よ。彰子の意地悪よ」

今までずっと海を向いていたせつの顔が俺に向いた。

「恭子さんを幸せにしてあげて」

ちょうどそのとき、女子高生が俺達の前を通り過ぎた。岬の影から朝日が姿を現した。せつが女子高生の後ろ姿を見ながら言った。

「あの子が朝を連れてきたみたい。まるで朝の使者ね」

「お前、やけに文学的な医者だな」

「褒め言葉だと受け取っておくわね。で、ヒロシ、あなたにも朝が来た？」

「まあな。ありがとう」

「どういたしまして。わたし精神科医になろうかしら」

「無理」

「そうね、初めから答えがわかっている患者さんばかりじゃないからね。でもね、ヒロシ、大変なのはこれからよ。恭子さんはまだ闇の中よ」

9月19日

夜、部屋の前で恭子を待った。帰って来た恭子はびっくりしてた。近くの公園へ行った。

「恭子、おれはやっぱりお前が好きだ」

「いきなりどうしたのよ」

俺は無視して続けた。

「この気持ちはどうしようもないんだ。たとえ、彰子が生きてても、俺はきつとお前のことが好きだと思っ」

「ヒロシ、いったい何を言い出すの？」

「はつきりしたんだよ。彰子がお前の姉だろうが他人だろうが、彰子が生きていようが死んでいようがどうでもいい。俺はお前が好きなんだ」

「ひどくない？姉さんはどうなるの？」

「どうにもならない」

「何よそれ。あなたは姉さんのことはもうどうでもいいの？」

「そうじゃない、そうじゃないんだ」

「それじゃ、どうだって言うの。わたしは姉さんの代わりなんですよ。あなたと姉さんは出会ったの、愛し合ったの。そして姉さんが死んだ。あなたがわたしを好きだって言うのは、姉さんが死んだからなのよ」

「違うんだ。俺は彰子のこととは忘れない。だが、お前のことはそれとは別なんだ。俺とお前とは、どんな時代でも、どんな場所でも、どんな環境でも、絶対に会おう。そして、俺はお前を好きになる」

「勝手なこと言っただけで苦しめないでよ」

恭子は歩いて行った。

俺の正直な言葉は伝わらなかった。姉の死によって結果的に自分が俺とつき合うのは許せないのだろうか。姉、彰子への思い、俺への思い、2つの思いの間で苦しんでいる。

恭子の心の中にも彰子がいる。かつて俺を苦しめた彰子が。そし

て、恭子を痛めつけている。俺は初めて彰子を憎いと思った。

俺と恭子の関係は、彰子におまけのようにくっついていて関係なのか。

俺は恭子の心の封印を解くことが出来るのだろうか。

第7章　銀の指輪

9月20日

恭子と連絡が取れない。

電話をかけても出ない。もちろん、向こうからもかかってこない。

9月22日

夜、せつから電話があつた。

「今日、偶然恭子さんに会つたの。すごく疲れた顔してた。眠れないんだって。うとうとしたかと思うと、彰子の顔が見えたり声が聞こえたり、それで、ハツとして目が覚めて、朝までその繰り返しだつて」

「それって、一種の精神病じゃないか」

「うん、病気とは言わないまでも、かなりストレスがたまってるみたい」

「まいったなあ」

「あなたとはもう会わないって言ってたわよ。そんな馬鹿なこと言わないで素直になりなさいって言ったけどね。『姉さんを死なせたのはわたしよ』なんて言うのよ」

「彰子を死なせたって？　どういうことだ？」

「彰子が生きてるうちからヒロシのことが好きで、彰子がいたら自分の気持ちが伝わらない。だから、彰子がどこかに行けばいいと心のどこかで思っていた。そうしたら、本当に遠いところに行っちゃったってことですよ」

俺はあの夏の日、恭子が言ったことを思い出していた。「どっち

かが死ねばいい。でも本当はどっちにも死んで欲しくない」

「それほど自分を責めてるのか」

「うん。恭子さんには、専門家のカウンセリングを受けるように勧めておいたけど。自分で解決方法はわかってるって……」

「俺のこと忘れるってことか」

「それも1つの方法だと思うわ。でも、できると思う？できないわよ」

「じゃ、どんな方法があるんだよ。まさか……」

「うん、自殺ってことも考えられるわよ。自殺とは言わないまでも、何かあつたらすんなり死を受け入れると思う」

「俺がそんなことさせない」

「ヒロシがその気でも、本人があれじゃ」

「何とかするよ」

「約束よ。何とかしてあげてね。仕事がらみとはいえ思い切って日本に戻って来たのよ。心の奥底ではあなたに会いたかったのよ。あなたに救いを求めているのよ。救ってあげてね」

「ずっと酒を飲ましておけばいいんだけどな」

「そうね、できることなら酔ったままにしておいてあげたいわね」

「彰子と恭子……」

9月23日

彰子の墓に行った。街を一望できる丘の中腹に彰子は眠っている。何をするとということもなかったのだが……

「彰子、もういじめないでくれよ。俺も恭子も十分苦しんだよ」

「別にいじめてなんかいないわよ。2人で勝手に苦しんでるだけよ」
彰子の声が聞こえたような気がした。

十字架が刻まれた灰色の石の板は、後ろに澄み切った青空を従えて飽くまで涼しそうにたたずんでいた。

少し肌寒い日だった。

9月25日

安達と酒を飲んだ。酔つてくると安達はからみ始めた。俺と彰子、恭子との関係を説明してやるといった。そんなことできないと言っても「俺にはわかつてるから、聞け」としつこい。

「ヒロシ、お前は昔からム力つく奴なんだよ。ピアノ弾かせりや生意気に俺にすぐ追いつく、走らせりやインターハイ、勉強させりや1年で国立大学、おまけに、塾で教えりや教え子は合格ときたもんだ。ああ、ム力つく」

なんだよ、ただ、喧嘩売ってるだけじゃないか。

「待てよ、俺だってそのときそのとき一生懸命努力してきたんだぜ。今もしてるし」

「当たり前だろう。努力あつてこそその人間だ。だが、そこがム力つくんだよ。その努力ができるってのが俺に言わせりや才能なのさ。べらばうな才能さ」

こいつ、どこが俺達3人の関係なのさ。

「俺に言わせりや、努力するのが当たり前で、何もしない奴の方が変なの」

「そうだろうとも。だがよ、もう1人すごいのがいたじゃないか」

「誰だよ。絶対にお前じゃないし」

「わかんないのか。お前にはわかりづらいよな、同類だからな。彰子ちゃんだよ」

「彰子？」

「そつだよ。やっぱり気付いてなかったのか」

「俺も彰子も普通だぜ」

「それもム力つくんだよ。気付いてないところによ。お前と彰子ちゃんのすごさは、大発明したとか、IQが200あるとか、百億円稼いだとか、そんなんじゃないんだよ。例えば、俺が、全てを犠牲にしてでもしなくちゃ、と決心してようやくできるような努力をよ、

当たり前のようにしちゃうところなんだよ。その情熱なんだよ。彰子ちゃんはそのなお前を本能的に認めて受け入れた。お前もそうさ、同じ魂の持ち主に惹かれた。そりゃ最初は見た目だったかも知れない。でも、見た目だけじゃすぐに終わっちゃてたさ」

酔ってる割にはまともなこと言うじゃないか。

「恭子ちゃんも姉と同じようなお前に興味を持った。そして、お前にとっては当たり前なの、でも、普通の人がくらったらつぶれてしまいうくらいの情熱の直撃をくらったんだよ」

「事故みたいじゃないか」

「一種の事故だよ。受験っていう目標があつたにしてもな。お前をしつかりと見据えて、応えようとしたんだよ。で、お前が恭子ちゃんに惹かれていったのもわかる」

「俺自身にもはつきりしない心がお前にわかるのかよ」

「わかるよ。お前は、デタラメなんだよ」

「何だよ、それ」

「彰子ちゃんはな、ピッチャー岸和田浩が投げるとんでもないボールをこともなく受けとめて、軽く投げ返すキャッチャーだった。お前を一番よく理解してるのが彰子ちゃんだ。お前自身ですら時々持て余すお前と、自然に、あれだけうまくやっていけたんだからな。最高の相性だよ。彰子ちゃんと一緒にいればこの上なく安らぐさ、普通なら。でも、お前は安らぎなんか求めちゃいない。どころか、理解されるとかされないとか、そんなこともどうでもいいのさ。デタラメだから。お前が求めているのは、バッターなんだよ。お前が投げるボールを打ち返したり、空振りしたりするバッターなんだ。お前に向かってくる激しさ、お前を打ちのめそうとする強さだ。戦い終えて初めて勝ち負けを越えて気持ちに通じる、そんな女だ。お前と勝負できる女だ。バッター香山恭子さ」

「ホント、デタラメな女性観だ」

「ああ、デタラメさ。でも、結構当たってるだろ？彰子ちゃんはお前を理解し寄り添った。恭子ちゃんはお前に負けなかった。さあ、

時間が経てばデタラメなヒロシ君はどっちを選ぶでしょう？」

「でも、デタラメな俺に選ばれても困るだろうよ」

「そうなんだよ。だから恭子ちゃんもデタラメなんだ。恭子ちゃんは彰子ちゃんとは違うから、お前のことあんまり理解してないぜ。たとえ理解したとしても、それはそれ、自分の生きたいように生きるはずだ。お前もそうだろ？つまり、相互理解なんて今のお前達にはあっても仕方がない。そんなもの突き抜けてデタラメに惹かれ合ってる。理解は一番最後にやって来るんだ。どうだ、わかったか」

「ああ、よくわかった。そうか、俺達はデタラメだったんだ」

「そうさ。でもよ、ヒロシ、デタラメに惹かれ合ったとしても、デタラメなままじゃダメだぜ。途中でリタイアして、お前につらい選択をさせなかった彰子ちゃんのためにも、恭子ちゃんと一緒にマトモになれよ」

「安達……」

「おっと、香山恭子、バッターボックスに突っ立ってるだけでバットを振る気がないようです。マウンド上のピッチャー岸和田、困惑しています。腰に手を当てる香山を見ています」

「なに、実況中継ごっこをしてんだよ」

「あ、しかし、岸和田、プレートに足をかけました。投げるようです。岸和田は変化球は苦手です。いえ、投げられません。ストレート一本です。香山にぶつけてカツを入れるんでしょうか。棒球で打ち気を誘うんでしょうか。それとも、遠慮なしに思いっきり投げ込むんでしょうか。さあ、振るかぶりました」

「俺はどんなボールを投げたんだよ？」

「さあ、そこまではわかんない。でも、ピッチャーが投げなきゃ始まんないぜ。バッターはピッチャーの投げるボールに反応するんだから。いいか、バッターがどんな反応しようと、マウンドにいる限りは投げ続けるよ」

話すだけ話して、安達はおぼつかない足取りで店から出て行った。こら、金払えよ。

だが、あのスチャラカポンも言うてくれるよな。ありがとよ。

9月26日

安達の母親から電話あり。安達は、昨夜、ふらつと車道に出て車にはねられたらしい。

9月27日

せつから電話があつた。安達はせつの勤めている病院に運び込まれていた。「病室にちよつと顔を出したけど、怪我人とは思えないほど元気だった。具合を尋ねるのも馬鹿らしいくらいに」だそうだ。見舞いに行くのはやめた。

9月28日

「おい、今、せつさんにはつき合ってる人がいるのか？」

安達がいきなり電話で尋ねてきた。

「誰がいるだろ。よく知らないけど」

「誰だよ？本庄か？」

「いつの話だよ。もうとつくの昔に別れてるよ。お前がケイコちゃんに振られるより前のことだぜ」

「じゃ、誰だよ？」

「知らないよ。せつの病院にいるんだから直接聞きに行けよ」

「それもそうだな」

「だが、どうした、せつに惚れたか？」

「ああ、惚れた。前からいいなとは思ってたけど、職場のせつさんを見たら、もう、完全に惚れた」

「また病気がでたな。今度は白衣フェチにでもなったか。怪我の前に、その、すぐ女にちよつかい出す病気を治せ」

「大きなお世話だ。じゃな」

あの馬鹿、せつに手を出すとは。身の程知らずめ。

9月29日

授業後、宮本が話しかけてくる。

「ねえねえ、『宦官』って本当にいつぱいいいたの？」

確かに歴史に関する質問だが、頼むからまともなこと訊いてくれ、
と思いつつも、

「ああ、いつぱいいいたさ。宦官が政治を仕切ってた時代だってある
んだぜ」

「へえ、すごいね。宦官、見たことある？」
「ないよ、そんなもの。と思いつつも。」

「まあ、言ってみればオカマみたいなもんだからな。宦官っぽいも
のは見てるかもな」

「じゃ、オカマと一緒になんだ」

「うーん、色々違うけどな。まず、作り方が違うよ」

「どう違うの？」

「アレをなくすのは同じだけど、オカマは、医学的な手術でチヨン
切るだろ。けどな、宦官ってのはまず、こっ、紐でくくってだな
・・・・・」

事細かに宦官の作り方を説明してやった。途中からは北も加わり、
「宦官の作り方」って本が書けるくらいの大講義になった。

受験まであと3か月あまり。可哀想な宮本。

9月30日

恭子は心を閉ざしている。もしかしたら心を病んでいるのかも知
れない。俺に再会してかえって闇が濃くなってしまった。そして、
俺から去ろうとしている。実際、そうするしかないのかも知れない。

俺は嫌だ。しかし、当の俺に何の力もない。恭子に何もしてやれない。恭子は失意のまま、闇を抱えたまま、またアメリカに行く。そして、俺達は全くの他人になっていく。俺は嫌だ。大切な人を失うのはもう嫌だ。

問題は恭子の中の彰子なのだ。俺の中の彰子とは違うのだろうか。優しく、可愛く、頭が良く、色々な修飾語が付くが、最終的には、二十歳の若さで亡くなった彰子。それ以外にどんな彰子がいるのだろうか？「彰子」は「俺」だったんだ。俺の知らない彰子などいるのだろうか。

．．．．．もしかしたらいるかも知れない！

10月1日

手紙を書いた。会いたいと。

絶対に会わなくてはならない。マリアに。

10月2日

せつに尋ねた。

「せつ、1つ教えてくれよ。俺と恭子がもしかしたら惹かれ合うかも知れない、彰子はそう予感してた、そうだったよな。そんな予感を持ちながら彰子は割り切って俺とつき合ってたのか？」

「ヒロシ、彰子はそんなケチな女じゃなかったはずよ」

「え？」

「予感は予感よ。彰子は先のことを考えて、自分の愛情をケチるような女じゃなかったわよ。その時その時を一生懸命に生きてた、幸せいっぱい」

「幸せいっぱい．．．．．」

「ええ、見ていてこっちまで幸せになるような幸せ。彰子のおかげ

で、幸せってほかの人にもうつるんだって理解できたわ。すごく幸せだったのよ」

「……わかった。恭子の心を開けるかもしれない。」

「せつ、ありがとう！」

「何よ、急に」

「とにかく、ありがとう」

10月4日

塾の生徒達の多くが通う中学校で中間試験が始まる。対策用の問題をどつさり用意しておかなければならない。朝から出勤だ。普通は昼過ぎに出勤だから、かれこれ6時間も早い。普通のサラリーマンなら午前9時始業として、午前3時に出勤するようなものだ、なんて考えて歩いていると、制服を着た中学生か高校生の女の子が手を合わせて祈るようにポストの前に立っているのが見えた。祈る場所が違うだろ、とも思ったが気になって見ていた。その子はかばんから手紙を取り出して見つめていた、かと思うと、手紙に「チュツ」とキスをしたのだ。もちろん音など聞こえはしなかったが、完璧な「チュツ」だった。そして、投函を済ませてその子は歩き出した。たまには朝から歩いてみるもんだ。久しぶりにいいものを見た。

因みに、ものを知らない生徒（子ども）だけではなく、普通の大人でも平気で「ウチのポストに鍵を入れといて」とか「今日はポストに何も無い」とか言うが、あんたらのウチは郵便局か？ あんたらのウチにあるのは「郵便受け」だろ？ 違うか？

言葉は時代につれて変わるものなのだろうが、どうも耳について仕方がない。俺がおじさんになったということなんだろうか。

10月7日

中間試験の対策が終わった。俺はやるだけのことはやった。生徒達は自身のことにもかかわらず、やるだけのこともしていないだろうが、そこそこの点数は取るだろう。何せ俺の教え子達だ。

期末試験前の忙しい時期になるまでに何としてもイギリスに行かなければならない。マリアに会わなければならない。マリアに教えてもらわなければならない。

時間がないんだ。恭子が俺の近くにいる間にけりをつけなければ。身内に危篤になってもらおう。4、5日なら塾を空けても大丈夫だろう。

10月11日

塾の近くに新しいケーキ屋ができた。「レッカー」という名前だ。ドイツ語で「おいしい」っていう意味だが、あんまりケーキ屋では聞かない名前だ。知らないうちにどこかに強制的に移動させられてそつな名前だもんな。

早速、北がなにやら買ってきた。

「『レッカー』って、ドイツ語で『おいしい』って意味なんだそうです。店の親父さんに聞きました」

しばらくして、大久保も「レッカー」の包みを提げて現れた。

「『レッカー』って、ドイツ語で『おいしい』って意味なんだそうです。知りませんでした」

みんなきちんと聞いてくるもんだ。わかんないことは素直に尋ねた方がいいもんな。それなら俺も教えてもらってこよう。「レッカー」の意味を。

「こんにちは。そのシュークリーム2つください」
「はい」

親父がシュークリームを箱に詰め始める。俺は笑いそうになるの

をこらえて尋ねた。

「あ、それと『レッカー』って、どういう意味なんですか？」

「おいしい」

「何語なんですか？」

「ドイツ語」

親父は不機嫌そうだった。いや、腹の中では怒っていたに違いない。

ああ、面白かった。

つい買ってしまったシュークリームを片桐さんに持って行った。

「あ、これ『レッカー』のですね。ありがとうございます。ところで先生、『レッカー』ってどういう意味だかご存知ですか？『おいしい』ってどういう意味なんだそうです、ドイツ語で。さっきね、お店のご主人に聞いたんですよ」

10月12日

レッカーの入り口に「レッカー」はドイツ語で「おいしい」という意味です」という張り紙がしてあった。

10月21日

空港から塾へ電話した。片桐さんが出た。

「岸和田ですけど、塾長は？」

「今、いらっしやないんですけど」

「そうですか。良かった」

「どうかしたんですか？」

「ええ、ちよつとイギリスへ行くんですけど」

「は？イギリスって、あの、ヨーロッパの？お店の名前じゃないですよね」

「ええ、ヨーロッパのイギリスです。ちょっと私事で、3日ほど。

塾長には『父親が危篤』って言うておいてください」

「はあ、構いませんけど。いいんですか？」

「まあ、ばれたらばれたときのことです。お土産買って来ますから、よろしく」

「はあ、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

10月22日

ブリストルという町に MARIA は住んでいる。

久しぶりに MARIA と会った。MARIA はチョコレートケーキを焼いて迎えてくれた。

俺は MARIA に胸の内を正直に話した。

「僕は彰子とつき合っていて幸せでした。でも、彰子は二十歳の若さで死んでしまいました。それから、ずっと、彰子のことを不幸な、可哀想な女としか思えませんでした。そして、その思いのためにずいぶん苦しみました。でも、今はちよつと違うんです。彰子は幸せだったんじゃないかと思うんです。『死』そのものは不幸でしたが、彰子は幸せなままでこの世を去ったのではないかと。勝手な解釈ですが。いま、僕には好きな人がいます。いえ、彰子が生きているときからその人は心の中にました。彰子への気持ちの方がまだ大きくて、そのときは彰子以外考えられませんでした。時間が経てば、もしかしたら、その人の方が大きな存在になっていたかも知れませんが、そうなる前に、まだ、2人が幸せでいるうちに、彰子は天に召されました。僕は、彰子のこと忘れません。でも、その人のことが好きで、大好きで、彰子と同じように幸せにしたいんです。そのためには、彰子は本当に幸せだったと言わなければなりません。僕の思い込みなんかじゃなくて、真実として。その人はかつての僕以上に苦しんでいます。幸せがあることに気付いていないんです。教

えてください。彰子は幸せだったんですか。その人に伝える幸せはあるんですか」

マリアは黙って聞いていた。そして、俺をある部屋に案内してくれた。

「ヒロシさん、彰子は日記をつけていたのよ。わたしも知らなかったんだけど、遺品を整理していたら出て来たのよ。いつか、あなたやその人に見せるときが来るかも知れないと思ってた。好きなだけみてちょうだい。自分で確かめてね」

通された1室では、書籍類、ノート類、アルバム、洋服などが、まるで主を待つかのように整然と保たれていた。その中に何冊もの日記があった。ふと見ると、テーブルの上に鳥の羽をモチーフにした銀の指輪があった。あの指輪だ。何故、ここにあるんだ？彰子の言葉を思い出した。「わたしの幸せの象徴よ。いつまでも、死んだ後も幸せが続くのよ」手にとってみた。もうダメだった。涙があふれてきた。指輪をテーブルに戻し、よく見えない目で1冊目の日記のページを繰り始めた。

彰子・・・・・・・・

何時間経っただろうか。

部屋から出てリビングに入ると、マリアがソファから立ち上がった。そつと歩いて来て、俺を柔らかに抱きしめてくれた。本当の母親のように。

「ヒロシさん、わかったでしょう。彰子はとっても幸せだったのよ。娘を幸せにしてくれてありがとう」

マリアが優しくささやいた。そして、こう続けた。

「ご存知でしょうけど、わたしにはもう1人娘がいるの。意地っ張りで、自分からは幸せになろうとしないのよ。わたしが何を言っても聞かないのよ。あなたが幸せにしてやってくだらない？」

同じ親からの頼みでも、塾生の親からのとはちよつと違うよなあ、

なんて思いながら、目の奥に、涙がいつぱい順番待ちをしているのを感じていた。

マリアが話してくれた。

「こんな風になるとは思っていなくて……。彰子が死んだときにはわたしも悲しくて何をどうすればいいかわからなかった。しばらくして、彰子は最期まで、死の瞬間まで本当に幸せだったことに気付いたの。それはそれは幸せな人生だったのよ。でもね、そのとき、それをあなたや恭子に話しても無駄だったでしょう。第一、あなたと恭子はすぐに気持ちが通じ合うと思っていたから。恭子は自分の気持ちに気付いてたし、彰子の幸せを素直に引き継いで欲しかったんだけど、思うようにはならなかったわね。恭子は傷ついてた。彰子の死に傷ついたのではなく、自分の思いに傷ついたの。そうねえ、例えば、幸せな彰子をちよつと妬んだり、いなくなればいいと思ったたり、不幸な目に遭えばいいと思ったり。姉妹の間ではよくあることでしょう。そして、本当に彰子がいなくなった。自分の思いの通りに。もちろん、恭子と彰子の死は関係ないんだけど、恭子は自分を責めてたの。あんなこと思わなければ良かった、彰子の死は自分の思いのせいかも知れない……。理屈ではそんなことはない和理解してるはずよ。でも、心の奥で思ってた、『彰子を不幸にしたのはわたしだ』って。そんな恭子があなたと幸せになろうって思うわけがない。あなたをあきらめることで罪滅ぼしをしようと思ったのよ。わたしには何も言えなかった。それでいいと思つたの。時間が経てば忘れてしまふ、みんな過去になる。わたしはこの国で、恭子はアメリカで、あなたは日本で、それぞれの人生を生きて。でも、だめね。やっぱり、あなたと恭子とは強い絆で結ばれてる。神の決定よ。恭子を幸せにしてやってね。彰子を幸せにしてくれたように。そして、香山洋平がわたしを幸せにしてくれたように」

帰り際、マリアがあ の指輪をくれた。あ の日、 彰子を送った日、 恭子が彰子の指から無理矢理はずしてマリアに渡したのだそうだ。

10月24日

授業に間に合うように空港から塾に直行した。何とか授業1時間ほど前に塾に着いたかと思うと、片桐さんが走り寄って来た。

「お帰りなさい。早速ですけど、先生あてに吉村という方から何度か電話をいただきました。お急ぎのようでしたけど、ご連絡の取りようがなくて」

「すみませんでした、ご迷惑をおかけして」

「いえ、いいんですけど。つい先ほどもお電話があつて、先生がお帰りになつたらすぐにこの番号にお電話いただきたいということでした」

「ありがとうございます。あ、これ、お土産です。塾長には内緒にね」

お土産と引き換えるように片桐さんからメモ用紙を受け取った。

すぐにかけてみると、そこは病院だった。が、せつの勤めている病院ではなかった。少しだけ背筋が寒くなった。もしや恭子が・・・しかし、気を落ち着けて切り出した。

「岸和田と申します。吉村という者から、そちらに連絡するように言われてお電話差し上げています」

「岸和田様ですね。少々お待ちいただけますか？」

「ご面倒をおかけいたします」

待つ間の長いこと。

「お待たせいたしました。いま、吉村先生と代わりますので」
げっ、せつか。きつと叱られるぜ。

「ヒロシ！あなたどこに行つてたのよ！」

やっぱり。

「すみません・・・・・・。イギリスへちよつと」

「イギリスですって。いいご身分ね」

「いや、遊びじゃなくて……」

「当たり前よ！こつちじゃ恭子さんが大変なことになってるんだからね！」

やはり、そうか。

「恭子がどうしたんだ？生きてるんだろ？」

「何のんきなこと言ってるの！死んでても不思議はないわよ！」

「怪我か？病気か？」

「あのね、落ち着いて聞きなさいよ」

俺の方が今のせつより落ち着いていると思うが……。

「一昨日の朝、会社のエスカレータに乗ってるときに、急にフツと倒れて、何段か転げ落ちたのよ。そのまま意識不明になっちゃって」
「それで」

「会社の方がすぐに救急車呼んでくれて、この病院に運び込まれたの。山添さんがわたしに知らせてくれたのよ」

「ありがとう。お前がいてくれて助かったよ」

「馬鹿！ありがとうじゃないわよ！たまたま打ち所が悪くなかったからでしょ。たまたま会社のエスカレータだったからでしょ。もし運転中だったりしたらひどいことになるのよ！大体、わたしはもうアフリカに行くんだからね！いつまでも当てにしないでね！」

「その、アフリカって何だよ。初めて聞け」

「ボランティアよ、ボランティア。今は話がややこしくなるからいいのよ」

お前がややこしくしてるんだろうが。まずは恭子のことだ。

「そうか、ボランティアか。で、恭子の様子は？」

「そうよ、ボランティアよ。で、恭子さんはね、頭も打ってるんだけど、幸い脳や骨に影響はなかったのよ。これといった外傷もないわ。でも、体そのものが相当衰弱してたみたい」

「意識はもうしっかりしてるのか？」

「ええ、点滴も何本か打って体力も回復したから、退院させようかって担当の先生と相談してたこと」

「退院はいいけど、1人にしておくのもまずいだろ」

「そうね、1人にはしておけないわね。落ち着くまではどうしてもあなたが様子を見てることになるわよ。わたしも自分の仕事があるし、日本にはほかに頼れる人なんていないし」

「それは構わないよ」

「来てくれるなら明日の朝にでも退院できるように話しておくわ」

「わかった、そうしてくれ。今夜は俺がついてる。授業が終わったらすぐ行くから。それまでは悪いけどいてやってくれ」

「いいわよ。でもね、いつまでもわたしが日本にいると思ったら大間違いよ」

「アフリカか。何で急に」

「急じゃないのよ。ずっと前から思ってたの。医療面で役に立ちたって。あんまり先送りしてると、体力も気力もなくなっちゃうから、今しかないの」

「どうして何も言ってくれなかったんだよ」

「ヒロシに言っても仕方がないじゃない。わたしのことをわたしが決めたんだから。それとも、あなたも一緒に来て守ってくれる？」

「そりゃ無理だよな」

「でしょう」

「で、いつ行くんだよ」

「年末よ」

「待てよ、年末って」

「もう色んな手続きも済ませてあるから。そんなことより、病院にちゃんと来てよね」

恭子は大変なことになってるし、せつはいなくなるなんて宣言するし、おまけに塾の仕事はこれでもかというほど滞ってるし。何をどうするか整理し切れない。が、まず、恭子のことだろう。

病室に入ったときには、恭子はもう眠っていた。せつにお礼をいい、イギリスへ行ってきた理由をかいつまんで説明した。

ずっと、眠る恭子のそばにいた。可愛らしい寝顔だった。少し痩せたみたいだったが、スヤスヤと安らかな寝息をたてる恭子を見て心身共に何とか回復するのではないかと思った。しかし、明け方、恭子の口から漏れた言葉に慄然とした。

「……………姉さん、すぐに行くから。待っててね」

10月25日

恭子が目を覚ました。俺の顔を見て素直に微笑んだ。

「目が覚めたな」

「いつからいてくれたの？」

「ゆうべから。せつと付き添いを代わったんだ。それより、気分はどうだ？」

「いいわよ。ありがとう」

退院の手続き、挨拶をして、病院から恭子を連れて出た。恭子の部屋に着いたのは昼前だった。

「恭子、しばらく仕事は休め。連絡しておいてやる」

「ええ、そうして」

「腹減ってないか？何か作ってやろうか？」

「うん、お願い。何でもいいから作って」

「よし、ちよつと待ってる」

冷蔵庫を覗き込みながら思った。今朝から恭子が素直すぎる。明け方の言葉が思い出された。

「恭子、ゆうべ何か夢でも見てたのか？」

「うつん、別に。どうして？」

「いや、寝言を言ってたから」

「どんな？」

「なにかブツブツ言ってたけどよく聞き取れなかった」
本当のことは言えなかった。

「そうなの。覚えてないわ」

残り物を適当に料理した昼食を食べ、コーヒーを飲んでいると、
「もう少しいてね」

恭子が言ったのでびっくりした。素直どころか、甘えてくるなんてどうなってんだろう。絶対変だ。

午後2時を回った。もう行かないと溜まりに溜まった仕事が付かない。

「それじゃ、行くから。無理しないでおとなしくしてろよ」

「うん」

「明日の朝また来るよ。授業が終わったら電話入れるけど、何かあったらすぐに携帯を鳴らせ、飛んでくるから」

「うん」

部屋から出て何歩か歩いてふと振り返ると、恭子が微笑んだ。そして、言った。

「ヒロシ、本当にありがとう。さようなら」

生徒達はテキストの問題を解いている。わずかだが、考え事をする間ができてしまった。間髪入れず恭子のことか頭に浮かんできた。素直過ぎる。全く恭子らしくなかった。「うん、お願い」「もう少しいてね」「ありがとう」「さようなら」……「さようなら」？恭子からこの言葉を聞くのは3回目だ。これまでの2回はその後本当に俺の前から消えた。しかも「姉さん、すぐに行くから」……「まずいぜ！だが、絶対に行かせない！」

「お前ら、悪い！自習！」

いきなり叫んだので、生徒達がびっくりしている。

「何？」

「ちよっと急用」

「どこ行くの？」

「秘密！」

教室を出て走って職員室に戻った。かばんを取り、職員室をでたところに塾長がいた。何で今日に限ってフラフラしてるんだよ。

「塾長、何やってるんですか？」

「ああ、ちよっとトイレ」

「そうですか。じゃ」

「はい。……ちよっと！岸和田先生！どこ行くんですか！」

「ええと、弟が危篤で早退します！」

走りながら、振り返りもせずに答えた。塾長が怒鳴った。

「父親の次は弟か！」

「そつでーす！」

叫んだら、近くの教室から笑いが聞こえた。走りながらかばんから指輪を取り出した。指輪を強く握りしめて、タクシーを捕まえるために大通りまで更に走った。

恭子の部屋に着いた。入り口のドアは閉まっていたがロックされていなかった。靴を脱ぐのもどかしく、部屋の中に上がりこんだ。

「恭子！」

呼んだが返事なかった。キッチンにもリビングにも恭子はいなかった。何か声が聞こえる。奥の寝室に入った。ベッドの上に座る恭子の後ろ姿があった。窓に向かって何かひとり言を言っていた。

「恭子」

声をかけると初めて俺に気付いたようだった。俺の方に顔だけ向けた。ゾツとするほど白い顔だった。力のない声が返ってきた。

「ヒロシ？」

「おい、どこか痛いのか？」

俺の問いには答えず、恭子はまた窓の方を向き、こう言った。

「姉さん、ヒロシが来たわよ」

胸が張り裂けそうだった。声が出なかった。たとえ出たとしても、

恭子にかける言葉は思いつかなかった。恭子は見えない彰子と話していたのだ。

「姉さん、もう、そんな顔しないでよ。もうすぐよ」

頭の働きも体の感覚も鈍くなってきた。自分とは関係の無い世界に迷い込んだようだった。

「わかったわよ。そんなにせかさなくても、わたしはすぐそっちに行くから。……ヒロシ？」

「それ」は、ゆっくり振り返り俺を見ると、また「彰子」の方に向き直った。

「ヒロシはまだ行けないのよ。こっちにいるのよ。残念でした。いいじゃない、わたしがそばにいれば、一緒にヒロシを待ってましよう」

俺を待つ？

「でも、3人そろうなんて、本当に何年振りかしら。あ、姉さん、やっぱりヒロシがいると嬉しそう。顔がゆるんでるわよ。げんきねえ」

「それ」は体ごと俺の方を向いた。

「ほら、ヒロシ、彰子姉さんよ」

「それ」は左腕を肩の高さまであげ、首から上を左に向けた。上向きになった手のひらの先にいる「彰子」を俺に示すように。スロ―モーションの映像だった。俺は目でゆっくりと細い手の動きを追う、白い横顔を見つめ、揺れる黒い髪を眺めた。

「2人ともどうしたの？何か話すことはないの？」

「それ」が不思議そうな声を出してこちらを向いた。続けて口を動かして何か音を発していた。

肩、腕、手のひら、首、横顔、髪、口。「それ」が、モノが、バラバラに動いていた。

音を聞き、モノを見ているしかなかった。手を伸ばせば届くところできているはずなのに、俺がいるこの同じ時間に起きているはずなのに、俺とは何の接点もないただの現象が続いていた。その現

象が世界と切り離されているのか、俺が世界から遊離しているのかわからなくなってきた。

それでも、俺の目は何かを見つけようと動いていた。ようやく顔を探し当てた。本当に白い顔だった。その中に黒い大きな瞳があった。瞳に視点が合った。その瞳を中心に、部分ごとに切り離されたモノではない何かを認識しようとした。「それ」は恭子だった。このとき、俺は現実の世界に戻って来た。

俺の中で何かが噴き出した。声に戻ってきた。

「恭子！ 彰子が見えるか！ おい、彰子が見えるのか！」

俺は恭子の両肩をつかんで揺すった。

「今、何が見える！ 俺だろ、俺の顔だろ！」

恭子がゆっくりとうなずいた。

「彰子の声が聞こえるか？ 聞こえないだろ、俺の声しか聞こえないだろ」

恭子がまたうなずいた。

「そうだろ、彰子はもういないんだから」

恭子が口を開いた。

「わたしが姉さんを・・・・・・・・」

「恭子！」

言葉を遮った。心を救わなければならない。

力をくれ！ 言葉をくれ！ 指輪を握りしめた。

「恭子、死んでもいいぞ。死にたかったら死ね」

恭子がびっくりしたように顔を俺に向けた。俺は続けた。

「だけど・・・・・・・・」

恭子が少し首をかしげ、俺を見た。

「俺のところで死ね！」

恭子の目から涙がこぼれ落ちた。

「いいか、確かに彰子は死んだ。だが、それはお前のせいじゃない」

恭子の泣き顔が俺を見つめた。

「人は病気や事故では死なない、ましてや他人の思いなんかで死ぬ

もんか。寿命で死ぬんだ、神の思し召しだ」

「思し召し……」

「彰子はこの世で一番の仕事を済ませたんだ。その仕事がわかるか？」

恭子の首がゆっくり左右に動いた。

「俺をお前に会わせることだ」

恭子の目が大きくなった。また涙があふれてきた。

「そして、幸せをお前に手渡すことだ」

「幸せ？」

「俺は彰子と一緒にいて幸せだった。彰子も幸せだった。幸せなまま彰子は死んだ。これだけは確かだ、彰子は幸せだったんだ」

「姉さん……」

「恭子、お前がいて彰子は幸せだったんだよ」

「わたし、が、いて？」

「そうだ、お前がいたから幸せだった。恭子や俺やマリアやせつに囲まれて幸せだったんだよ。俺にはわかる、彰子是这样って『恭子、わたしと同じくらい幸せになってごらん』って。だって、彰子は本当に幸せだったんだから。わかったか、お前は幸せになっていいんだ」

「幸せだった？ 姉さんは幸せだった……」

「ああ、そうだ。マリアのところで確かめた」

俺は銀の指輪を見せた。

「ほら、お前がこの世に残しておいてくれた彰子の『幸せ』だ。お前が受け取る『幸せ』だ」

恭子の目が指輪に注がれた。

「お前は幸せになるんだ。俺はお前を幸せにする、彰子以上に。だから、幸せなまま死なせる。約束する。お前は誰のためでもない、お前と俺のために死ぬ。2人が幸せだったその証に、俺のところで死ぬ、俺のところで幸せに死ぬんだよ。それまでは一緒だ！ いいか、約束しろ！」

恭子の泣き顔が、美しく、可愛らしい泣き顔がうなずいた。

俺は恭子を抱きしめた。耳元で泣きながらささやく恭子の声が聞こえた。

「あなたのところで死んでいいのね？」

答える代わりにもっと強く抱きしめた。今まで恭子を苦しめていたものを締め出すように。

最終章　　チョコレート

10月26日

冷静になつてみると恥ずかしい。「幸せ」だの「死ぬ」だの、安っぽい歌謡曲でも聞かない。それを何度も繰り返すなんて。彰子が幸せだったから恭子も幸せになれ、なんて、こじつけたよな。第一、これからつていうときに、なんで「死ぬ」なんだろうか。よくわからない。何より、恭子より長生きしなくちゃならなくなつたぜ。無理だ。あいつ以上の生命力が俺にあるはずがない。とんでもないこと言っちゃったような気がする。

まあ、いいか！

せつに恭子とのことを報告した。本当に喜んでくれた。ありがとう、せつ、お前のおかげだよ。

一応、安達にも恭子とのことを報告した。ちよつと喜んでくれた。ありがとう、安達、下手に首を突っ込まないでいてくれてよ。いや、本当に。

安達がこう言った。

「そうか。ついに恭子ちゃんの心をこじ開けたか。よくやったよ。褒めてやる。そういや Kim Carnes っていう女性歌手の歌で”ROUGH EDGES” っのがあるんだよ。割とグツとくるんだけど、まるでその歌詞みたいなんだよ、お前と恭子ちゃんとは。まあ、聞いてみる。とにかくおめでとうよ。お前達、お似合いかもな。そうだなあ、キャベツと青虫くらいにはよ」

早速、CDを買って、”ROUGH EDGES” とやらを聞いてみた。いい歌だった。安達、ありがとう。

当然のように減給処分をくらった。今回はさすがにこつぴどく叱られた。授業放棄だもんな。でも、いい。

授業中、生徒達が問題を解いている間、つい”ROUGH ED GES”を口ずさんでしまった。「機嫌が良さそうだ」と指摘された。「そうか」と、とぼけたが甘かった。

「恭子さんとうまくいったんだ」

井上が要らぬことを言った。どうせひやかされるのだ、

「ああ、うまくいった」

正直に答えた。「これで、もう授業にならない」と覚悟したが、生徒達は意外におとなしい。変だ。青山が口を開いた。

「先生、おめでとう」

拍手と歓声が湧き起こった。

何？こいつら、祝福してくれてるぜ。

「お前ら………。ありがとう」

結局授業にならなかった。生徒達は落ち着いてたが、俺が壊れてしまった。

11月3日

アメリカ時代の友人、ブライアンから手紙が届いた。彼は現在、西海岸の大学で主に日本文化を教えているのだが、その大学で日本の社会や教育について教えないかという誘いだった。研究も十分にさせてくれるし、論文次第だが将来のポストも考えてくれるという。すごい話だ。前向きに検討しよう。

11月5日

塾からの帰り、午後11時を回っている。携帯が鳴った。恭子か

らだった。酔っているようだ。ちよつとだけ。

「ヒロシー、お仕事終わったんでしょー。ご苦労だったねえ。焼肉食べよー」

これが、つい先日まで、生きるの死ぬのと騒いでいた女のかけてくる電話か、いったい。

結局、呼び出しに応じてしまった。ブライアンからの誘いについても相談してみたかったし。でもやめておけば良かった。俺が焼肉屋に着いたとき、恭子はやっぱり酔っていた。それも、かなり。

「ヒロシー、おいでよ。食べよ」

恭子の席には何枚も皿がならんでいる。空のビア・ジョッキも。恭子の向かいに座った。

「なによーお。何か言いたそうじゃない」

「いや、別に。遠慮なくいただきましようか。誘った方のおごりだろうから」

「おお、遠慮なくいただいてくれい」

すでに恭子が頼んでいた肉などを網にのせて焼きながら、ブライアンの手紙の件を切り出した。

「ブライアン？何それ？ブライアン？ブラ、イアン。ブラ、イヤーン。アハハハ。ブラ、取っちゃイヤーン。イヤよ、イヤよ、アメリカなんか行っちゃイヤーン。アハハハハ」

この女が酒飲んだるときに真剣に相談を持ちかけた俺が馬鹿だった。話はあきらめて食べることに専念しようと思ったが、できるわけがなかった。恭子は、箸で網から肉を取るまでは普通にしているが、自分の手元のタレが入った小皿に運ぶまでにポロポロと全て落としてしまうのだ。何もない箸にタレをつけて口に運び、何かに気付いて不思議そうに小皿を見つめる。俺は敢えて何も言わなかった。同じ事を何度も繰り返した後、肉を網から直接口に持っていく行動に出た。しかし、やはり途中で落としてしまう。これも同じ事を何度も繰り返し返した。恭子の前は落とした肉でいっぱいだ。テーブルは肉と油でギトギトだ。見ていて恥ずかしい。近くの席の客や、店の

従業員も恭子を見て笑ってる。もう教えてやろうと呼びかけると、恭子はびっくりするほど真剣な表情で俺を見た。そして、これまた真剣な声でこう言った。

「わたしの肉がないの。ねえ、ヒロシ、わたしの肉知らない？」

11月6日

昨夜の「わたしの肉がない」事件を、絵を描きながら生徒に話してやったら喜んでいた。

11月8日

ブライアンからの誘いについてあれこれ考えてみた。

「英語」、何とかなる。「専門知識」、一応大学院で勉強したし、何とかする。「アメリカでの生活」、留学してたし、平気。「お金」、詳しくは聞いてないけど、栄明塾より給料が安いことなど有り得ない。問題なし。「家族」、俺などいてもいなくても関係ない。安心。「恭子」、そのうち仕事でアメリカだ。好都合。

なんだ、風はもうアメリカへアメリカへと向かって吹いてるよ。でもなあ、教え子達がいるからなあ。

11月22日

恭子は来年の4月からロサンゼルスで仕事だそうだ。

「お前、俺のところはずっといるんじゃないのかよ」

「心はずっと一緒よ。置いておくわ」

「昔どっかのサッカー選手が代表をはずれるときに言ったような言葉だな」

「ヒロシこそアメリカに来れば。あなたの1人くらい養ってあげるわよ」

こいつは、ブライアンの件などこれっぽちも頭に残っていないんだ。見事なものだ。よくわかった。こいつと何か交渉するときは、酒飲ませて、どさくさに紛れにサインなり捺印なり」させればいいんだな。

「ヒロシ、聞いているの？」

「ああ、それ、いいね。俺が家事一切してやるよ」

「ふうん。本当にこの国が、生徒達が捨てられたらね」

「『捨てる』ってのは何かトゲのある言い方だな」

「でって、そうでしょ。それにね、これまでもずっと離ればなれだったんだからね。別々の国に住むことが今更どうだって言うのよ」

「そりゃそうだ。だが、お前、俺と一緒にいるのが本当は嫌なんじゃないか？」

「そんなことないわ。でもね、ヒロシにはヒロシの大切なものがあるでしょう？」

「恭子もずいぶん大切なんだけど」

「ありがとう。だけど、自分の生き方を捨ててまでわたしを大切にしてくれなくてもいいのよ。わたしにだって自分の生き方があるし」

「何だよ。結局今までのままか」

「違うわよ」

「わかってるよ」

12月1日

うーん。決めた。アメリカに行こう。

12月3日

休憩時間、ふと教室をのぞいて驚いた。大野（中2女子）が自分のおっぱいを机の上に乗せて安らいでいたのだ。この大野は、はっきり言うとおっぱい太っている、並ではなく。おっぱいも並ではない。確か

に普通の状態だと重かるう、肩も凝るだろう、邪魔にもなるだろう。でも、普通するか？体をずらして、首は椅子の背もたれの上、おっぱいは机の上なんて。注意もできないよな。

「最近、おっぱいを机の上に乗せてくつろいでいる人がいますが、見苦しいのでやめるように」

なんて、絶対言えない。

女子生徒だつて、そりゃ、何も言えないよな。男子生徒なんか見て見ぬ振りしてる。俺も見なかったことにしよう。

恐るべし大野。

12月13日

珍しく仕事が早く終わったので、北と進藤、片桐さんと一緒に飲みに出た。鍋をつつきながら、ビールや日本酒を飲んだ。

隣では普通のサラリーマン達（俺達、少なくとも俺は普通ではない）が鍋を囲んでいる。子どもの学校や塾の話をしているから、苦笑しながらもつい耳を傾けてしまった。

「だけど課長、課長のところはもうすぐ中学受験じゃないんですか？」

「ああ、上の男の子がな。しなくてもいいのになあ。女房が受ければ儲けものだつて」

「僕は中学受験なんて考えもしませんでしたよ」

「僕も公立だった。金なかったし」

「課長、またまた」

「いや、本当なんだ。うちは、僕が小学生のときに、親父がよそに女作つて出て行ったからなあ」

「え、そうなんですか？初耳だなあ」

「うん、だから『モチヅキ』っていうのも母方の姓なんだ。小学校の途中で名前が変わっていじめられたら困るって、中学に入るときに『モチヅキテッペイ』になったんだよ」

「へえー。因みにそれまではどういう名前だったんですか？」

「『カヤマテッペイ』だよ」

俺は思わずむせてしまった。片桐さんが背中をさすってくれた。

「親父は単身赴任したイギリスで女作って、会社も辞めちゃって。日本に帰って来るには来たらしいけど。どうしているか。母親は何も言わないし、僕も聞いちゃいけないって思ってたし」

「全然音沙汰なしですか？」

「何でも、娘ができたとかちらつと聞いたことはあるけど。僕の妹だな」

「課長、親父さんのこと恨まなかったんですか？」

「そりゃ恨んださ。母親が可哀想だったし。だけど、今はなあ、親父の生き方もわからないでもない。そんな風に生きてみたいなあ、って、たまには思う」

「浮氣しいってことですか？課長もてるからなあ」

「からかうな。でも、浮氣じゃないんだよ。親父は本当にその人を好きだったんだよ。だから、母親も気持ちの区切りがついたんだろうなって。いい加減な浮氣くらいで別れるような女じゃないからな、うちの母親も。今は孫に囲まれて幸せそうにしてる」

「へえー、知らなかったなあ。でも会いたくないですか、親父さんや妹さんに」

「あつてみたいなあ。親父はぶん殴ってから、その後一緒に酒でも飲みたい。妹には『初めまして、兄です』なんて挨拶して、照れたりしてなあ」

「妹さん、美人なんですかね？」

「僕の妹だよ、美人に決まってる！」

「課長、是非紹介してくださいよ」

「もし会えてもお前にだけは紹介しない」

「ひどいなあ。でも、本当に会えたらいいですね」

「ああ、いつか会いたいなあ……。じゃ、行くか」

テッペイ課長は部下を連れて出て行った。

俺は、テッペイさんのいた席に向かってグラスを軽く上げ、会釈

して、ビールを一気に飲み干した。進藤が不思議そうに言った。

「岸和田先生、どうしたんですか？」

「いえ、ちよつといい話を聞かせてもらったもので」

「盗み聞きですか。僕もよくしますよ」

北が相変わらずとぼけたことを言う。

テツペイさん、お兄さん、あなたの親父さんはもうこの世にはいません。上の妹さんも親父さんのところに行っちゃいました。下の妹さんは幸せにしていますよ。それと、あなたの妹さんは2人とも間違いない美人ですよ。

俺は、思わず泣いてしまった。いきなり泣き出したんで、皆、啞然とした。北が、

「泣きたいときは思いっきり泣かなくちゃね。僕は笑おうかな」

なんて言いながら笑い始めた。皆、笑い始めた。俺も、泣きながら笑った。

12月21日

今日で2学期の授業が終了。きりがいいので、塾長に、3月、公立高校の入試が終わったら塾を辞めたいと申し出た。

「岸和田先生、それはちよつと困ります」

「別に、いいでしょう。塾長は常々、『講師の代わりはいくらでもいる』っておっしゃってるじゃないですか。ましてや、僕みたいな問題ばかり起こす講師はいなくなつた方がいいでしょう」

意地悪な言い方をしてみた。案の定、塾長は言葉に詰まっている。「……………まあ、まだ時間があります。考えさせてください。でも、口ではなんと言おうと、何度減給しようとして、正直なところ、あなたが惜しいんです」

コノヤロ、今更何を言い出すんだ。

「もし、この塾を辞めたとして、その後は何をするつもりなんですか？」

「生徒を引き抜いて自分で塾を始めるとか、ライバル塾に移るなんてことはしませんからご安心ください」

「それじゃ、何を？」

「言う必要も義務もないと思いますので」

また、意地悪な言い方をしてみた。

しかし、俺もプロだ。公立高校入試まではきっちりと生徒達に尽くしてやるぜ。

12月22日

恭子にアメリカに行くことを話した。向こうの大学で教えると言ったらびっくりしていたが、嬉しそうだった。本当は、もう、離れたくはないのだ。俺だってそうだ。

12月23日

ブライアンに電話し、アメリカに行くと告げた。変な日本語で喜んでくれた。

「Hiroshi, SAMURAI, BANZAI!」

実家にも電話してみた。弟が出た。

「ああ、俺。言っておいてくれ。来年アメリカに行くから。向こうの大学で教えるって。じゃね」

「待てよ、何か、見合いの話が来てるぜ。いい加減に落ち着いてもらわなきゃ困るってさ。それに、いつまでも彰子さんのこと引きずってるわけにもいかないだろうって」

「落ち着くような年かよ。それに、彰子のこと是一生忘れないぜ」

「そうか。でもよ、俺もお見合い写真見せてもらったけど、美人だぜ」

「じゃ、会っただけ会ってみるか。お見合いってのも話の種だ」

「親父にどやされるぜ、ふざけるなっ」

「いいじゃないか。美人の顔見て、いい雰囲気の中でお茶でも飲めりゃ」

「相手に失礼だろうが」

「なあに、嫌われるのは簡単さ」

「・・・相変わらずだな。俺が言うのも変だけど、大人になれよ」

「イヤだ。じゃな。伝言頼む。そのうち顔出す」

12月24日

冬期講習開始。気合が入り過ぎて自分が怖い。だが、忙しいぞ。

12月26日

昼休み、職員室で生徒達と馬鹿話をしていたら、「岸和田先生、お電話です」と片桐さんが知らせてくれた。受話器を取る。

「もしもし、岸和田です」

「ヒロシ、今、空港。今から日本を離れるの」

せつだった。アフリカでの医療ボランティアに参加するのだ。

「悪いな、見送りに行けなくて。せめて年が明けて松が取れる頃ならな」

「見送りに来てもらっても困るもの」

「俺は邪魔者か」

「S女の正門で出会ったときからのね。3年ほど行って来るわ。それまでには恭子さんと幸せになってるのよ。何しろ、彰子と・・・」

せつの声が途切れる。泣いているのだろうか。

「彰子と何だよ？」

「何でもないわよ。彰子も恭子さんもあなたのどこが良かったのか

しら」

「さあね。せつも俺とつき合ってみればわかるんじゃないか」

「最後まで軽口たたくわね。馬鹿なこと言っていないでしっかりするのよ」

「しようと思う。せつ、お前も向こうできちんと役に立って来いよ。元気でな」

目の前がかすみ始めた。彰子や恭子と関係なしにせつと出会っていたら、きつと……。

「ありがとう。じゃ、行くわね」

「ありがとう。せつ！忘れないぜ！」

「そうよ、ずっと覚えていなさい。わたしも覚えてるわ。さよなら、キ・シ・ワ・ダ・ヒ・ロ・シ」

プツンと電話が切れた。

せつ、吉村せつ、俺は一生お前に感謝し続ける。

「今度は『せつ』だつて」

「恭子さんはどこにいったの」

白井と長崎の得意技、「相手に聞こえる内緒話」で我に返った。しまった、ここは塾だった。

12月27日

高3の原が授業中ずつとにやついている。大学入試を目前にして、ついに気が触れたかあきらめたかどちらかだろう。可哀想に。

授業後、一応理由を尋ねると、何と「彼女ができた」と言う。

「1つ年上で、今、看護学校に通ってる人なんつすよ。年上とは思えないくらい可愛いんつすよ」

「将来は看護婦か。いいな」

「先生、自分の趣味に走っちゃダメつすよ。僕の彼女なんつすから」

「お前に俺の趣味が理解できるのかよ」

「できません。先生の相手はめちゃくちゃな人って噂ですから」
当たり前だ。だが、他人に言われるとあまり面白くない。

「俺の趣味はいいから。ま、うまくやれ。だが、お前、今がどんな時かわかってるだろ。勉強もきちんとしてろよ。泣くことになるぜ」

「はい、もちろん。何か、こう、全てにパワーがみなぎるっていうんですか？勉強もはかどるんですよ」

「勝手にしろ」

1月5日

授業後、宮本が話しかけてくる。

「ねえねえ……」

「宮本、もう『今年』だぜ。やめよう。俺が悪かった。謝る」

「じゃなくて、中国の本読んでたら、『宦官の息子』とかよく出てくるんだけど。何故？」

どこが、「じゃなくて」だ。いつもの話になってるじゃないか。

「色々あるんだろ、宦官になる前の子とか、養子とか」

「へえ、そうか。それとね、宦官って中国だけじゃないの？」

「ヨーロッパ辺りにもいたんだぜ。元々はオリエントで……
。やめよう、宮本。頼むから試験に出る勉強して」

1月6日

安達が電話をかけてくる。

「せつさんの携帯に電話してもつながらないんだよ。お前、知らない？」

そういや、安達にはせつのこと言うの忘れてた。

「せつなら医療ボランティアでアフリカに行っただぜ、年末に。3年は帰って来ないって」

「何い！お前、どうして早く教えてくれなかったんだよ」

「悪い悪い。でも、お前とは関係ないじゃん」

「これから関係作るんだよ、俺とせつさんは」

「ひょっとして、せつのことが本気で好きなのか？」

「ああ、好きだよ」

「早く言えよ。何とかしようもあつただろうに」

「何だと！お前は恭子ちゃんとのことで屍になってたから気を使つてたんじゃないかよ。それを、何？自分さえうまくいったら、俺やせつさんはもうどうでもいいわけ？へえー、いつからそんな人になつちやつたの？」

お前がどれだけの気をつかつてくれたって言うんだよ。でも、逆らつたらややこしくなるだけだ。

「スマン、スマン。だけど俺も連絡取れないんだよ。向こうで落ち着いたら連絡先を教えてください」

「なんでお前なんだよ！俺に知らせてくれよ。お前には恭子ちゃんがいるからいいじゃないか。せつさんは俺によこせ」

「わかつたよ。連絡先がわかつたら教えてやるから。その先は好きにしろ」

「俺もアフリカに行くぞ！」

安達はせっかく入った出版社をどうするつもりなんだろう。

「安達よ、ちょっと冷静になれよ。会社があるだろう？」

「うるさい。女のことと熱くなるのはお前だけの専売特許じゃないんだよ。せつさんのことに比べりゃ、俺の入った会社なんてどうでもいいことなんだよ」

「お前がせつを好きなのはよくわかつたけど、せつがお前をどう思つてるかくらいは確かめてからにしたらどうだ？会社辞めてアフリカに行くのは」

「おい、『せつ』『せつ』ってファーストネームを呼び捨てにするな」

「はいはい、わかりました。せつさんの気持ちは確かめたんですか

？」

「いや、まだだ。行ってから直接確かめる。だから、せつさんの連絡先はすぐに教えるよ」

安達が本気でせつに惚れてるとは思わなかった。

1月8日

3学期の授業開始。入試直前で、受験学年は気合いが入っていた。俺は冬期講習の疲れが出て、気力も体力も途切れそうだった。しかも、いつの間にか冷たい雨が降っていた。傘を持って来ていない。こんな雨に打たれたら絶対に風邪を引いてしまう。まいったなあ。

授業終了後、塾の前は、我が子に傘を持って来たり、我が子を車で迎えに来たりした生徒の親達でいっぱいだ。生徒達がうらやましい。

10分ほどで生徒達も親達も帰って行った。と、1つ、こちらに近付いてくるベージュの傘があった。その下はえんじのコートだ。ベージュとえんじの下で恭子の顔が微笑んだ。

「これ、傘、使って。持って来てないんでしょ」

「ありがとう。わざわざ持ってきてくれたのか」

「ついであつたから。じゃあね、風邪引かないでね」

「ああ、助かった。ありがとう」

「どういたしまして」

恭子は歩き始めた。俺はその後ろ姿に言った。

「おい、その色、相変わらずよく似合うな」

恭子は振り向くとにっこりと笑った。天使の（少なくとも俺には）笑顔だった。

「先生、今のが恭子さん？」

「ウオッ、ビビッた。いきなり話しかけてくるなよ。誰だ？長崎だった。」

「ああ、酔っぱらいの恭子さん」

「ふうん、まともな人じゃん。て言うか、すごくカワイイ」

こいつらの褒め言葉は「カワイイ」しかないのだろうか。まあ、いいや。

「長崎、だまされちゃダメだよ。あいつはいつでも悪魔になれるんだから」

「先生、その悪魔にまいったんでしょ」

1月13日

書店で立ち読みをしていると、近くで誰かが「ダディ！ダディ！」と叫んだ。そちらを見ると、どうしたって英語が母語には思えない顔をした4、5歳くらいの小汚いガキだった。何が「ダディ」だ。お前は「父ちゃん」って言わなきゃだめだよ。リアリティがゼロなんだよ。まだ「ダディ、こつちだよ」なんて言ってやがる。不釣合いな言葉を発する口でもつねって泣かせてやりたくなった。

イヤ、待て。ここは日本だ、子どもが自然に「ダディ」なんて言うわけがないじゃないか。親がそう言わせているのだ。ウン？もしかしたら父親が英語圏の人か、一部の芸能人のように「ダディ」という呼び名が似合う人かもしれない。と、思い直し、「ダディ」が現れるのを待っていた。

出たぜ。どこが「ダディ」だ。てめえ、「亀吉」って名前（この名前の人がいたらごめんなさい。飽くまでイメージの問題です。他意はありません）がピツタリのどこからどう見ても由緒正しい2千年来の農耕民族の顔して何が「ダディ」だ。「おつとつ」、譲歩しても「父ちゃん」じゃないか。「父ちゃん」が嫌なら「お父さん」とか、アチラ言葉がよければ日本でも市民権を得ている「パパ」とか、いくらでも呼ばせ方はあるだろうが。そりゃ、どう呼び合おうが親子の勝手だが、家庭内だけにしてくれ。現実と大きく乖離した呼称を人様に聞かせるのは迷惑つてもものだ。各自治体は、こういう親子を取り締まる迷惑防止条例を作れよ。

よほど注意してやろうかと思ったができなかった。母親が来たからだ。その「父ちゃん」、「母ちゃん」に向かって「ハニー」って呼びかけたのだ。笑ってしまっただけで注意するどころではなくなってしまった。「母ちゃん」は「父ちゃん」を「ダーリン」とか呼ぶんだろ。迷惑家族は笑ってる俺をにらみながら通り過ぎた。あいつらが「ダディ」で「ハニー」なら、塾長だつて「リチャード」で、塾長の奥さんなんか立派に「ベアトリス」や「エリザベス」だぜ。腹も立ったが、笑わせてもらった。

1月17日

夜の10時を余裕で過ぎてる。中2の渡辺が授業中にうまくいかなかった英単語のテストを受けている。再テストなら普通にあるが、渡辺は再々々々々々々々々々テストくらいなのだろうか。かなり多めに用意しておいたテスト用紙がなくなるうとしている。またしても失敗した渡辺がノートに英単語を書きながら言う。

「僕、頭が悪いから……」

これだよ。できない理由に「頭が悪い」ってすぐ言うもんな。

「たかが単語を覚えるのに、頭の良し悪しが関係あるもんか。ただ、覚えるか覚えないかの違いだ」

「なかなか覚えられないのは頭が悪いからでしょ」

「違うよ。覚えるのに少しの時間で済むか、長い時間かかるかの違いだ」

「そうかな、やっぱり頭の差だよ。尾崎なんかテスト前に1分ほど眺めたら満点取っちゃうんだから」

「尾崎は確かにすごいよな。でも、覚えてしまえば尾崎もお前も同じだろうが」

「そう……?」

「100mを10秒以内で走るか17秒で走るかくらいの違いだ。10秒以内で走る奴はオリンピックなんかに出て名が売れるけど、

17秒の奴も、その7秒後にはやっぱり100m走っちゃってるんだぜ。10秒を切る奴はそりゃとつてもすごいけど、100m走ってことには変わりはない。どんな体でもありさえすりゃ100mくらいなんとなる。脚がなくなつたって車椅子でそここの速さで走れるんだぜ。人間の能力差なんてせいぜいそんなもんだろ。頭も同じさ」

「そうなんだ」

「そうだ。だから頭がいいとか悪いとかグダグダ考えずに、時間がかかってもいいから覚えりゃいいんだよ」

「ごめんね、いつも遅くまで」

「謝ってどうする。俺はいいんだよ。人のこと気にするより覚えてしまえ」

1月19日

恭子がふとつぶやいた。

「先生って何なのかなあ」

「は？」

「何となくね。ヒロシが先生してるのか、先生がヒロシしてるのか、どっちだろうって」

「何だよそれ」

「だから、何となくだって。言ってみただけなの」

1月20日

原、彼女に振られる。彼女の最後の言葉は「あなたを好きだと思つてたのは、錯覚だったの」だそうだ。

1月23日

授業中、佐伯の手袋が目についた。

「おい、佐伯、ちよっと手袋貸してくれよ」

「いいよ」

「ありがとう」

手にはつけずに足に履いてみた。無茶苦茶気に入った！なんか、昔の映画に出てくる怪獣の足みたいだ。見方によっては可愛いじゃないか。

佐伯はおとなしくテキストの問題を解いている。今のうちだ、とばかりに、教室中歩き回ってみた。いい。すごい。

誰も気付いてくれないと寂しいので白井をつついて見せてやった。
「カワイイ！」

白井が叫んだ。それ以後は授業にならなかった。ただ1人、佐伯がブルーになっていた。

1月25日

白井が話しかけてきた。

「家でね、みんなにね、手袋を履いて歩いて見せてあげたの」
やめてくれよ。塾であったことをいちいち家や学校で報告するんじゃない。

「え？ やっちゃったの」

「うん、お母さんなんか気に入っちゃって、わたしと一緒に手袋履いて歩き回ったよ。お父さんに『うつとうしい』って言われたけど」
「お茶目なお母さんだな」

「うん。でもね、ふと気付いたようにわたしを見てね、『あんた、塾で誰に何教えてもらってるの？』って」

「で、どう答えたんだ？」

「うん。『岸和田先生に英語よ』って」
うわあ。

1月28日

今日はテレビの音楽番組に、Kという女性歌手が出演する。見たい。番組は夜8時から、授業の真っ最中だ。しかし、見たい。この上なく見たい。仕方がないのでその授業の生徒全員を強制的にテレビのある教室に連れて行って、見せた。おとなしく見てるから不思議だ。授業（テレビ鑑賞も授業の一環だが）より静かにしてるからムツとなった。Kが歌っているときに歌詞を口ずさんでやったら、「しーっ！」とたしなめられた。とりつかれたように見入っている。特に女子生徒。こいつらがみんなK憧れているとしたら、嬉しいよ。うな、とんでもないことのような。KがサマになるのはKだからで、こいつらが一斉にKと同じ格好をしようと、Kと同じ口調でしゃべろうと、やっぱりこいつらはこいつらなんだろうなあ。何を書いてるんだろう、俺は。うーん、自分に付加価値をつけることを教えてやらねば。いや、先に自分を客観的に見つめる強さを持ってもらわなくては。勉強教えている場合じゃないかも知れない。

1月29日

そついや、昨日テレビにKが映ったら、女子生徒ほぼ全員が「カワイイ」とか言ってたぞ。俺の考える「カワイイ」とはほど遠いメイクをしてたが、何でも「カワイイ」んだな、自分の気に入ったものは。そのうち世の中は「カワイイ」とものと「カワイクナイ」ものの2種類だけで成り立つようになるんだろうな。あいつら「的」には。

塾長に呼び出された。やっぱり。

「昨日は授業中学生徒にテレビ、しかも音楽番組を見せたそうだが、どういうことだ？」

「そついうことです」

「・・・・・・・・」

普通なら「ザマミロ」と腹の中で言ってるが、今日は口から意外な言葉が出て来た。

「すみませんでした。以後気をつけます」

「え・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

塾長がびつくりしている。

「いや・・・・・・・・、これから気をつけてくれればいいんだよ」
すぐに解放された。

たまには謝ってみるもんだな。ザマミロ。

しかし、減給処分。

1月30日

授業が終わって職員室に戻ると、北が質問に来た生徒に何か教えてる。何度説明しても生徒には理解できないようだ。北の説明が悪いわけではない。北は当たり前のことを最初から順を追って丁寧に説明しているのだ。

「・・・・・・・・ということだ。わかったか？」

「うーん・・・・・・・・。まだ」

「よし、それなら・・・・・・・・」

結局、生徒が納得して帰ったのはそれから1時間ほどしてからだった。大久保が北に声をかけた。

「北先生、よくあそこまで根気強く教えますね。僕には無理かな」

北が答えた。

「さっきのは勝ったとは言えないけど負けてもないかな。じゃ、次の勝負に備えて帰ります。おっと、命の水も補給しなくちゃねえ、あかねちゃんここで」

北は帰って行った。大久保はポカンとしたアホ面を数秒さらした

後尋ねてきた。

「勝ち負けって……何なんですか？」

「さあね」

大久保にはわかるまい。俺も北の言う勝ち負けがわかっているのではない。だが、同じような基準はある。

生徒が、俺の教えたことを100%理解してくれりや確かに嬉しい。10か20言えば100まで理解してくれりや嬉しい上に楽だ。出来のいい生徒だけ集めてすごくレベルの高い授業もしてみたい。でも、今、ここにある現実に取り組まないと。多くの普通人に理解してもらうことを放棄したら、それは俺の負けなんだ。そして、負けないだけで精一杯。勝つなんてことがあるのだろうか、先生という職業に。

1月31日

授業を始めようと思ったたら高橋がいない。高橋と仲の良い城之内に尋ねてみた。

「ああ、高橋、今頃は彼とデートしてるよ」

「彼だあ。その彼っていうのは人間なのか？」

「そんなこと言って。先生知らないの、スツツゴイかつこいい人なんだよ」

「知るか。好きにしろよ。でも、高橋がよくそんない男を捕まえられたな」

「そうよね、いい男とブス、美人とブサイクな男の組み合わせって結構多いよね」

「俺はそんなこと言ってないぜ。高橋がブスだなんて」

「言ってるじゃない。言いつけてやる」

「構わないぜ。高橋の1人や2人、何とでも言いくるめてやる」

「でも、どうして釣り合わない組み合わせができちゃうのかな？」

「そうだなあ、人間は自分の外見が他人に比べてどの程度のものか

なんて、結構よくわかるからなあ。で、外見が普通、あるいは普通以下の人はそれがよくわかってるから、連れてる相手でそのコンプレックスを埋めようとする。つまり、つき合う相手が美男・美女なら、自分もいい男・いい女に見られる。少なくとも、美男・美女を連れてるんだから、何かすごいところがあるんだろうなと、みんなに思ってもらえる」

「そうかもね」

「でも、美男・美女は誰がどう見たって美男・美女なんだからつき合う相手にそんなもの求めなくていい。まあ、好みの外見はあるだろうけど。だから、目に見えない内面とか、努力して獲得したものとか、努力そのものに惹かれることが多いんだと思う。で、そういう組み合わせが結構あるんだろう」

「へえ、それじゃ、先生と恭子さんもそうなの」

「どういう意味だ」

「だって、恭子さんは美人なんですよ」

「ちょっと頭にきた。」

「俺達は運命の出会いをしたの。それで、神様のはからいで付き合い始めたの」

「言った後の城之内のため息が少し耳に痛かった。」

2月1日

安達から電話があった。

「おい、恭子ちゃんがおかしなこと訊いてきたぞ」

「何て？」

「『ヒロシは何が嬉しくて塾の先生なんてやってたのかしら』って」

「で、お前はどうか答えたんだ？」

「『多分、生徒が志望校に合格したり、夢に近付いたりしたらうれしんじゃないか』って答えておいたけど。実際はどうなんだ？」

「うーん、ちょこちょこ嬉しいことはあるけど、結果として目に見

えるのはそんなところだよな。だが、俺が生徒の夢を叶えるわけじゃないし、生徒と同じ夢も見られない」

「そりゃ、そうだ。でも、恭子ちゃんは何でお前に直接訊かないんだ？」

「今、忙しいし、まともに答ええないと思ったんだろ」

「そうなのか？」

「多分な」

「ふうーん。ところで、せつさんからまだ連絡はないのか？」

「ない」

「いいな、すぐに教えるよ」

恭子、俺は教えたいから教えてたんだよ、教えてるんだよ。そして、教えても教えても無力感を味わってきた。それでも教える。俺は先生なんだから。先生である限り教えるよ。

2月2日

毎日が戦争。この業界の常とはいえ、入試前のこの時期は毎年凄まじい。

しかし、推薦入試で孝行に受かった生徒や、早めに合否を出す一部の私立高校・大学へ受かった生徒もちろはら出てくる。お前達、よくやった！

2月3日

せつから手紙が届く。住所と近況報告だけの簡単なものだった。早速、安達に教えてやった。

2月4日

昼過ぎ、安達の母親から電話があつた。

「智宏が、会社を辞めてしばらく旅に出るって言つんですよ。馬鹿なことは止めなさいって言つても、『今アフリカに行かなきゃ一生後悔する』とかわけのわからないこと言つて、全然聞かないんです。お願いします。智宏を止めてください」

「今回だけは僕にも止められないと思います」

「岸和田さん、何か知ってるんですか？」

好きな女を追いかけて行くんです、なんて本当のこと言つたら、とんでもないことになりそうだしなあ。ええい、ウソも方便だぜ。

「はい。実は智宏君は飢えや貧困で苦しんでいるアフリカの人々のことをずっと前から考えていたんです。苦しみを和らげる方法はなにか、自分に出来ることはないかって。それは真剣に」

「そうなんですか」

「ええ。せつかく入った会社はどうするんだ、冷静になれって言つても、『アフリカの人のに比べりゃ、俺の入った会社なんてどうでもいいことなんだよ』って叱られたんです。止むに止まれぬ思いなんですよ。きっと、智宏君にとって、『アフリカの人』は人生をかけて悔いのないものなんでしょう。彼の熱い思いは僕には止められません」

「智宏がそこまで考えていたなんて……」

「立派でしょう？でも、お母さんには照れくさくて言えなかったんだと思います。ほら、男の子っていうのはそんなところがあるじゃないですか」

「そうですねえ、女親には、男の子ってよくわからないんですよ。でも、フラフラしてた智宏がねえ、そんなことを考えてたなんて。ありがとうございます。よく話し合つてみます」

何とかごまかした。

安達の携帯を鳴らして塾まで呼び出す。

「……というわけで安達よ、お前は『アフリカの人』に人生をかける立派な人になっちゃったから。まあ、親がどう言おうが

行くんだろっけど、大義名分は立てておいてやったから、少しは話し合ってみるよ」

安達は何も言わずに両手で俺の右手をしっかりと握り、何度も上下に揺すって、その後やっぱ何も言わずに出て行った。

良かったんだろっか。

3月3日

恭子がドキツとするようなことを言った。

「ヒロシ、人の気持ちを確かめる、っていうか、試したことある？」
結構最近確かめたぜ、お前を口説くために。わざわざイギリスまで行った。

「何だよ、それ」

「よくあるじゃない。子どもがどうってことないってわかってるのに、母親の気を引こうと、わざと大げさに痛がったり、泣いたり」
ちよっと安心した。

「うん、子どもの頃はしたかも知れない。けど、泣いたりわめいたりしてるうちに本当に痛くなったり熱が出たりするから不思議だよな。で、母親が心配してくれると、やけに安心して幸せな気分になったりして」

「じゃあ、あるんだ、人の気持ちを試したことが」

「それは試すというより、何だろっ、子どもなりにバランスを取るのに必要なことなんじゃないかな」

「必要なか・・・。わたしもバランス取ってみようかな」

「絶対止める！」

「どうして？」

「お前はとんでもないバランスの取り方するような気がする」

「しないわよ。わたしは子どもじゃないから」

3月4日

明日は公立高校入試。中学3年生に最後の授業をした。
何でもいいから頑張ってくれ。

3月5日

「受験の朝、先生の顔が見たい、声が聞きたい」というかわいげのある奴などいないのだが、「魔除け」をしてやるつもりで、教え子に声をかけに毎年どこかの高校に行くことにしている。今年は美園北高校だ。丘の上にある。最寄の駅から続く坂道を300mほど登ると、まず、通用門がある。さらに10mほど奥が正門になっている。俺は通用門のところで朝早くから待機していた。

試験開始時刻の1時間30分前くらいから、ぼちぼち受験生が姿を見せ始める。坂を歩いて登って来る者がほとんどだが、親に車で送ってもらう者や、タクシーで来る者もいる。しかし、誰もが一応は通用門の前を通るから、教え子を見逃すことはない。それにしてもかれこれ1時間前だっていうのに、俺の教え子は1人も姿を現さない。この高校を受ける奴は20人ほどいるのだが……。「受験の朝は余裕をもって行動しろ」という俺の言葉を、ある意味では守っているのだろ。余裕違いだよ。

他塾の先生達は、校庭や校舎の前で生徒達に使い捨てカイロを渡したり、何かプリントを見せたりしている。何故か生徒と握手している先生もいる。いいよな、することがあつて。ああ、ヒマだ。

ほかにすることがないから、坂を登ってまず目に付く通用門から入ろうとするほとんど全ての受験生に声をかけることにした。もちろん知らない奴らだけだ。

「君、君、ここは通用門だよ。正門はあっちだから。受験のときくらい、堂々と正門から入った方が気分がいいよ」

「ここは通用門だからね、言ってみれば裏口。縁起が悪いよ。正門から入ったほうがいいんじゃない？」

なんて、交通整理の警官みたいに、手で正門を示して受験生達に親切に教えてやる。受験生達も、

「そうですか。ありがとうございます」

「わかりました」

と、やけに礼儀正しく返事をして正門に向かう。

さすが受験の朝だ。普段なら礼儀の「れ」の字にも縁がなさそうな連中も、緊張して礼儀正しくなってるんだろうな。そのうち、何を思ったのか「お早うございます」と俺に挨拶する者まで現れた。すると、それを見ていた他の受験生達も何か勘違いして俺に挨拶する。挨拶されれば、俺にも「ああ、お早う。頑張つてね」と言葉を返すくらいの常識はある。さらに、「正門はあっちだよ」と教えてやる。ほぼ全員の受験生が「お早うございます」と俺に挨拶して、俺の示す正門へと向かう。引率のどこかの先生や、子どもを送つて来た親までもが、「お早うございます」「お疲れ様です」と挨拶してくるもんだから、それはそれは気分がいい。受験の朝の人の流れを見事なまでに仕切っている、仕切り続ける。ああ、忙しい。

それから20分後、やっと教え子達が現れた。

「お早う。やっと来たか」

「お早うございます。先生、何やってるんですか」

「ああ、みんなに正門を教えてやってるんだ」

師弟の会話を交わす間も、俺の知らない受験生達が次々「お早うございます」と挨拶して行く。

「先生、今の誰なんですか？」

「知らない」

「……先生、わたし達の受験のときくらい、おとなしくしておいてください。頼みますから」

「ああ、悪いわるい。つい調子に乗っちゃって」

教え子達と一緒に正門から入り、一応は先生らしく、自信のなさそうな奴を、

「自信を持て。お前はすごい。カエルよりすごい。バッタよりすごい」

い。もしかしたらネコよりすごいかも知れない」

と、励ましたり、この期に及んでダラダラとしまりのない奴には、「ロンドン市街地の中心部、『シティ』から北北西に35kmほどのところにあるニュータウンの名は？出るぞ」

と、問題を出して緊張感をもてせてやったりした。

お前達、がんばれよ。顔は見られなかったけど、他校を受ける「お前達」もがんばれよ。

3月6日

大学入試はほぼ結果が出る。

・・・・・・弘中、神垣、堀が合格。松下が不合格。大田、岡田が合格。宮本は浪人決定、当たり前だ。乾、井上、松山、後藤が合格。原も合格、これは錯覚ではない。橋本、福島、何と宮城まで合格。浜田は第2志望に合格、しかし、浪人。宮、高瀬、中井が合格。吉岡は不合格。高梨も不合格、今から間に合うところに出願。青山が合格、高羽が合格、しかし、高校の単位不足で留年。平野が合格・・・・・・

みんな、よくがんばった。誰が知らなくても、俺が知ってる。

さよなら。

3月8日

今日は朝から塾に来て私物の整理をした。

そして、最後の授業だ。「さようなら」を言いたい気持ちを抑え

て授業を進める。

あと5分だ。あと5分でこの塾での授業が終わる。

「何か質問はないか？授業以外のことでもいいぞ」

「先生、いつか自分の命より大切なものがあると云ってたけど、何？」

「地球？」

「地球も大切だけどな。人間なら本来誰でも持つてると思う」

「体？」

「違う」

家だ、財産だ、子どもだ、色々な答えが出るが違う。

「見えないものだ」

心、精神、愛。近い、表現の違いだけだ。

「魂」

「魂？それって命や心と同じじゃないの」

「違う。なんて言えばいいのかわからないけど、魂ってのは色々な形で遺伝するんだ。しかも、血のつながりを越えて」

「ふうん。よくわからない」

「いつかわかる、かも知れない。わかった奴は俺の魂が遺伝したんだぜ、きっと」

生徒達は「気持ち悪い」「わかりたくない」とさんざんなことを言っていた。しかし、お前達は確実に俺の魂に触れた俺の教え子達だ。とんでもない魂で悪かったけどよ。

さよなら。

3月10日

せつから手紙が届いた。

「変な日本人がいきなり現れて、診療所の隣にほったて小屋を作ったかと思うと、子ども達に算数やアルファベットを教え始めた。何

日かして政府軍に連れて行かれたけど、すぐに戻って来て本当にほったて小屋臨時学校の先生になっちゃった。政府の公認っていうより政府の黙認だけど、今じゃ結構慕われてる。その安達先生はおかしなことばかりするからわたしも楽しめる」

安達、やるじゃん！

3月11日

午後、早い時間、生徒達が来る前に、塾長や先生方、片桐さんに挨拶をした。そして、塾を後にした。

さよなら、栄明塾。

塾を去るのはどうでもいいが、生徒達と別れるのがつらい。これまで実際に教えた生徒達はもちろん、これから出会うはずだった生徒達と別れるのも。まだ出会っていないのだから普通は「別れる」とは言わないかもしれないが、俺の中では何の不思議もないことだ。まあ、また新しい人々に出会うからいいけどね。

3月12日

明日、いよいよ恭子が俺より一足早く渡米する。向こうでは一緒に暮らすんだから2人で行けばいいのだが仕事では仕方がない。まあ、先に行つて色々と整えておいてもらえば楽でいいよな。

恭子から電話があり、空港へ行く前に食事をする事になった。

正午に汐里が丘駅に来いと言う。

「何で、汐里が丘駅なんだよ」

「すごくおいしい天ぷら屋さんがあるのよ。しばらくおいしい天ぷらも食べられないから」

「なんていう店だよ」

「名前は忘れたわ。でも、駅から歩いて5分くらいよ。道は覚えてるのよ」

「ふーん、そうか」

「そう言えばヒロシ、明日は汐里が丘高校の合格発表でしょ？」

「ああ、でも、もう関係ないからな」

「せっかく汐里が丘まで行くんだから、ついでに合格発表も見れば？」

「いいよ、塾からも誰か見に行くさ」

「そう言わずに。ヒロシの最後の教え子達でしょ。合否くらい見届けてあげなさいよ。バチは当たらないわよ」

俺はこの教え子って言葉には弱い。「最後の」って修飾語がつけばなおさらだ。

「それもそうだな」

「何時に発表なの？」

「正午のはずだけど」

「それなら、ちよつと早めに11時30分に汐里が丘高校で会いましょう」

結局、汐里が丘の合格発表を見に行くことになった。ここいら辺では最難関の高校だ。生徒が一番多く受験したのも汐里が丘だし、毎年合格発表を見に行ってるのも汐里が丘だし、いいか。生徒の受験番号リストを探しておかなきゃならない。しかし、あの辺りにおいしい天ぷら屋があるとは知らなかった。

3月13日

11時25分に汐里が丘高校に着いた。受験生や親達、学校や塾の先生らしき人達がもうかなりの数集まっていた。同僚、いや、元同僚の杉下の姿も見える。お互い軽く礼をする。ちよつと気まずいが、来てしまったものは仕方ない。恭子も来ていた。たわいない話をしながら正午を待った。教え子達の姿も見える。手を振る子、ニツと笑ってガッツポーズをする子、見て見ぬふりをする子。色んな子がいる。いていいのだ。いるのが当たり前なのだ。

武市が挨拶してきた。

「先生、恭子さん、こんにちは」

「こんにちは。いよいよだな。大丈夫さ、お前なら」

「そうだいいけど。じゃ、友達が待ってるから行くよ」

恭子が不思議そうに尋ねた。

「どうしてあの子がわたしの名前を知ってるの？」

恭子を話のネタにしたなんて言えないしな。

「有名人だったんだよ。ウチの塾じゃ」

「そうなの」

それ以上の追求はなかった。いい女だ。

正午が近付いてきた。ドキドキしてきた。胸が締めつけられてきた。毎年のことだがこの時間は体に良くない。ああ、今年は何人泣くのだろう、違う、何人笑うのだろう。吉田は、藤谷は、本原は・・・。ああ、もっとキツチリ教えとくんだった。武市と長崎はまず大丈夫だろうが・・・。授業後残してでも鍛え上げておけば良かった、特に森川と神田は・・・。

人がますます多くなった。何か向こうが騒がしい。正午まで後5分、高校の先生が現れたようだ。いよいよ合格者の番号掲示だ。

「ぼちぼち見てくる。ここで待っててくれ」

「ええ、待ってるわ。でも・・・」

「でも、何だよ？」

「わたしのR大の合格発表のときは、一緒に掲示板の前まで見に行っただけだったの」

そうだ。あのとき、恭子が俺の手を握りしめたとき、俺は初めて気付いたのだ。自分の中に恭子を愛おしいと思うもう1人の自分がいたことに。

「じゃ、また手をつないで一緒に行くか？」

「わたしが一緒に行っても仕方がないでしょ。早く行った方がいい

んじゃない」

人混みをかき分けて掲示板の前に出ると、高校の先生が腕時計に視線を落としている。そして、おもむろに顔をあげると、ざわめきがおさまった。

「えー、では、時間になりましたので合格者の番号を掲示いたします。くれぐれもお怪我のないようお願いいたします」

さあ、教え子達よ、神よ。

紙が貼られる。後ろから押されるように前に出る。手にしたりストの番号を探す。……。あつた、全員あつた。信じられない。もう1度確かめよう。……。ある、やっぱり全員ある。

「やったぜ！ザマミロ！」

何に対してザマミロなのかわかんないが、思わず叫んでしまった。「！！！！！！」だぜ。

掲示板前の人混みから出ると。教え子達が走り寄って来た。やっぱりこいつらは俺の教え子だ。何か言ってる、何て言ってるかわからない。叫んでる奴もいる、もちろんわからない。男子が飛びついてくる。1人、2人……。支え切れない。倒れる。でも、もういい。俺の支えなどいらぬ。俺なんかぶっ倒して先へ進め。立ち上がる。改めて顔を見ると、みんな言い顔をしてる。いい男、いい女ばかりだ。このいい男、いい女はこれから自分の人生を歩み続ける。俺にしてやれることは、もう、ない。

歓喜の時はすぐに終わる。合格した喜びでいっぱいなのは俺達も教え子達も別れの時でもある。もう2度と会えない奴もいるのだ。今このとき

よくやったな。おめでとう。お前らを待ってる人はいっぱいいる

から、もう行け。ここからお前らの姿を見てるからしつかり歩め。さようなら。

俺は教え子達の後ろ姿に向かって深々と頭を下げた。

頭を元に戻し、今度は空を見上げた。少しだけ優しく霞んだ早春の青空だった。

教え子達が行ってしまってから、恭子が歩み寄って来た。

「立つてるだけでなかなか来ないからどうしたのかなって思ってた」

「奴等が行くのを見てたんだ」

「やけにしんみりしてるわね。落ちた子がいたの？」

「いや、全員合格した」

「そう、良かったわね」

「ああ、行こうか」

「本当に行ってもいいの？」

「いいさ」

何も話さずに2人肩を並べて正門まで歩いた。そこで自然に足が止まった。母校でもなんでもないので、こうして正門を出て行くことは2度とないと思うと名残惜しかった。振り返った。校庭の手前に体育館が、奥に4階建ての校舎が見える。校舎の前に掲示板がある。受験生を歓喜させたり落胆させたりしてきた掲示板。もう見に来ることもない。と、何故か恭子の後ろ姿が視界に入ってきた。いつたいた何なんだ。恭子は校庭を歩いて突っ切ると、掲示板の前で止まりこちらを振り向いた。

「ヒロシ、おいでよ！」

恭子が叫ぶ。恭子のところに向かって歩き始める。恭子が掲示板の紙上の番号を指でたどっている。恭子の横に立つ。

「ヒロシ、この中に教え子の番号がいっぱいあるんでしょ？」

「ああ」

「ただの数字だけど、あなたにとっては、とっても大切な数字なの

よね。……そうなのよね？塾の先生」

「恭子、俺は……」

「いいわよ、何も言わなくて。もしかしたらと思ってたけど、いいえ、本当はわかってたの。あなたとあの子達が一緒にいたとき、わたしの入る余地なんて全然なかった。あなたが『先生』のとき、わたしはとてもじゃないけどあなたの教え子にはかなわなかった……。生徒と一緒にだと、あなたは何かから何まで『先生』なんだなって」

「恭子……」

「それに、さつき校門のところから振り返ったときのあなた、無防備で、懐かしさや思い出がいっぱい、全部を受けとめるような、全部を心にしまいこむような、さびしそうで、やさしそうで、さうよ、やさしさに溢れてて……、溶けちゃいそうな振り返り方だった」

恭子は続ける。

「姉さんのことは振り返るしかないけど、ここにはまた来ることができるんだから、無理して今日振り返らなくてもいいのよ。きっとあなたは来年も、その次も、ずっと、こうしてここに来るのよ。大切な数字を見るに。そしてこの掲示板の前で教え子達を見送るのよ。ねえ、塾の先生」

恭子は目に涙をためている。

「恭子……」

「せっかくのチャンスをみすみす棒に振って、そうやって一生安月給の塾の先生してればいいわよ。年に一度の数字だけを楽しみにして。わたしには理解できないけど」

「……すまない」

いきなり恭子が飛びついてくる。不意を突かれて思わず抱きとめてしまう。目の前に恭子の泣き顔がある。

「でも、わたしは塾の先生大好きよ」

恭子の顔が斜めに傾き、見えなくなつた。俺の口は柔らかい唇で

ふさがれた。

こんなまつ昼間、高校の掲示板の前でキスするのは初めてだ。普通そんなことしないよな。しかも今日は合格発表の日だ、知り合いが見てるかも。いいんだろうか。ああ、もう、いい。涙の味がする。恭子の涙だ。俺はやっぱり恭子が好きだ！

どれくらいキスをしていたかわからない。目の前に恭子の顔が見える。

「ずっと待つてるからな。帰って来いよ、俺のところに」

「当たり前よ、いついまでも待つてなさい」

「『いつまでも』ってどういうことだよ」

「そういうことよ。でも、まず履歴書用紙買いに行きなさいよ。どこの塾に拾ってもらわないとね、先生！」

「そうだな、うん、まずは履歴書だ。ついでに求人誌も。どっかの塾で先生しないとな。恭子の好きな塾の先生を」

そして、何より、俺自身が好きな塾の先生を。

「……わたし、あなたのところで死ぬから。絶対に」

恭子の顔が、今度は泣き笑いの顔が斜めに傾き、また見えなくなった。

3月14日

昨日はまいった。この俺が人前でキスをしてしまうとは思わなかったぜ。さめると恥ずかしかった。逃げるように高校を後にした。

その後食事に行った。駅から歩いて5分のはずの天ぷら屋を30分歩き続けて探すが見つからず、結局、味も値段も界限で一番という寿司屋に入った。もちろん支払い俺だった。

ありがとう、恭子。

それから空港へ行った。あっさりした別れだった。

「じゃあね、彰子姉さんにきちんと報告しておいてね」

恭子はニコツと笑って、サツときびすを返して消えていった。振り返りもしなかった。

まあ、いいか。もうお互い、気持ちが伝えられず、伝えてもらえず、伝わらず、つらい思いをすることはないんだ。

帰宅途中、コンビニで求人誌を買った。フルタイムの塾講師の募集は思ったより少ない。しかも、この春の大学卒業者なんての募集が多い。

「俺はこんな競争率が高い職業に就いてたんだな。一種のエリートじゃないか」

自分で言って笑ってしまった。

ウン？「常勤講師募集。大卒以上年齢不問。中・高生の英語・国語・社会を教えられる方。受験学年の指導の経験ある方優遇」まるで俺のためにあるような求人じゃないか。決まりだな。どこの塾だ？
……「栄明塾」だって。

3月15日

「栄明塾」様に履歴書を送らせていただいた。

3月16日

ブライアンに断りの電話を入れた。彼は俺の説明を聞くと言った。
「Crazy, but fantastic! Hiroshi, SAMURAI, HAKIRI, BANZAI!」
相変わらず変な奴だ。

3月18日

ありがたいことに「**栄明塾**」様に採用していただけた。恭子にそのことを報告したら、

3月19日

「……と言つわけで、こうなつちやつた。彰子、お前に会えて良かった、お前を好きで良かったよ。で、幸せでいてくれて本当にありがとう。お前に負けないくらい幸せになるよ、俺も恭子も。今度は恭子と一緒に来るからな。やきもち焼くなよ」

「それと、『言葉』をありがとう」

「彰子、この指輪、恭子に渡すの忘れてた。しばらく俺が持つてるから」

3月20日

「ええ、皆さん、どういうわけだか、また、新しく入って来られた岸和田浩先生です。文系教科を担当してもらいます。ちよつと変わった方ですが仕方ありません。皆さんよろしくお願いします」

変な紹介をしやがって。相変わらずイヤな奴だ。

「岸和田です。なさらないとは思いますが、お気遣いなく」

進藤が話しかけてきた。

「岸和田先生、また一緒に頑張りましょう。あ、指輪。これまで指輪なんてしてなかったでしょう。はあ、彼女からですか？」

俺からだよ。元々俺が買ったんだ。で、自分で買った指輪を自分でしてる。かつこ悪いな。

「いいえ、違いますよ」

「またまた、とぼけちゃって。でも、普通は薬指ですよ？どうして小指なんですか？」

薬指が太くて小指にしか入らないからだよ。あー、色々うっとうしい。普段ははずしておこう。

「何となく小指なんですよ。これはね、ある人に上手に渡らなくてね、僕から渡すことになったんです」

それまでに俺の祈りもこめておこうと思って……………。

「先生！」

誰かが呼んでる。

「先生、岸和田先生！」

誰かじゃない、生徒だ。俺の生徒だ。

そして、俺は先生だ。教えても教えても、伝えても伝えても、まだ教え足りない、伝え切れない先生だ。だから、いつまでも教える、伝える。生徒に教えてもらいながら、伝えてもらいながら。

「どうした？」

「ちよつと来て、チヨコあげる！」

20xx年 4月20日

この日、恭子は俺との約束を果たした。

最終章 〽 チョコレート（後書き）

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
読んでいただいております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6798a/>

塾の先生

2011年10月1日03時21分発行